

名阪道路(天理地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

天理市教育委員会

例 言

1. 本書は天理市教育委員会が名阪道路(天理地区)の側道整備に伴って平成23年度から25年度にかけて実施した名阪道路(天理地区)埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局奈良国道事務所の委託を受けて天理市教育委員会文化財課が実施し、係長青木勘時(平成26年度末退職、役職は調査当時)、主査北口聡人が現地における調査を担当した。このほか、遺物整理作業と報告書の作成を平成27年度におこなった(本書)。
3. 調査に際しては、国土交通省近畿地方整備局奈良国道事務所、また喜殿町・南六条町の方々に多大なご協力を賜った。記して謝意を表する。
4. 本文中の引用文献や挿図出典については各章の末尾に示している。
5. 付編として福田さよ子氏(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)より玉稿を賜った。
6. 遺物整理作業及び本書作成に至るまで下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する。
飯塚健太・鈴木宏英(天理大学卒業生)、佐藤佑哉・三宅康永(天理大学)、阪原奈都美・西村あかね(奈良大学)、今井智恵・村下博美(奈良女子大学大学院) [所属はいずれも調査参加当時]
7. 現地調査及び出土遺物について、下記の方々から有益なご教示・ご指導を賜った。記して謝意を表する(敬称略)。
大野壽子・岡見知紀・小栗明彦・後藤愛弓・松吉祐希・安原貴之(奈良県立橿原考古学研究所) [所属はいずれも当時のもの]
8. 本書の作成は北口が担当し、青木が一部を分担した。文責は目次に明示した。編集は北口が担当した。
9. 遺構図の座標表示は、世界測地系による。標高は東京湾平均海面を基準とする。

目 次

例 言 目 次

第1章 名阪道路(天理地区)埋蔵文化財発掘調査の経緯と経過	北口聡人	1
I. 経 緯		1
II. 経 過		1
第2章 位置と環境	北口聡人	2
I. 地理的環境		2
II. 歴史的環境		2
第3章 調査の成果		5
I. 平成23年度の調査	北口聡人	5
1. 第15調査区		5
2. 第16調査区		6
3. 第17調査区		7
4. 第18調査区		9
II. 平成24年度の調査		12
1. 第3調査区	青木勘時	12
2. 第5調査区	青木勘時	16
3. 第6調査区	青木勘時	19
4. 第7調査区	青木勘時	20
5. 第8調査区	青木勘時	21
6. 第9調査区	北口聡人	22
7. 第10調査区	北口聡人	24
8. 第11調査区	北口聡人	25
9. 第12調査区	北口聡人	26
10. 第13調査区	北口聡人	28
11. 第14調査区	北口聡人	29
12. 第16-2調査区	北口聡人	29
III. 平成25年度の調査	北口聡人	33
1. 第1調査区		33
2. 第2調査区		33
3. 第15-2調査区		35
IV. 出土遺物		39
1. 平成23年度調査区の出土遺物	青木勘時	39
2. 平成24年度調査区の出土遺物	青木勘時・北口聡人	41
3. 平成25年度調査区の出土遺物	青木勘時	61
4. 特殊遺物	北口聡人	62
第4章 まとめ	青木勘時・北口聡人	66
付編 天理市南六条ノカミ遺跡の古墳周濠出土木質遺物の樹種	福田さよ子	68
図 版		
抄 録		

図版目次

図版 1	第15調査区 ①	
図版 2	第15調査区 ②	
図版 3	第16調査区 ①	
図版 4	第16調査区 ②	
図版 5	第17調査区 ①	
図版 6	第17調査区 ②	
図版 7	第18調査区 ①	
図版 8	第18調査区 ②	
図版 9	第18調査区 ③	
図版10	平成23年度調査地	航空写真
図版11	第3調査区 ①	
図版12	第3調査区 ②	
図版13	第3調査区 ③	
図版14	第3調査区 ④	
図版15	第5 E 調査区	
図版16	第5 W 調査区	
図版17	第6 調査区	
図版18	第7・8 調査区	
図版19	第9 調査区	
図版20	第10調査区 ①	
図版21	第10調査区 ②	
図版22	第11調査区 ①	
図版23	第11調査区 ②	
図版24	第12調査区 ①	
図版25	第12調査区 ②	
図版26	第13調査区	
図版27	第14調査区	
図版28	第16-2調査区 ①	
図版29	第16-2調査区 ②	
図版30	第16-2調査区 ③	
図版31	第16-2調査区 ④	
図版32	平成24年度調査地	航空写真 ①
図版33	平成24年度調査地	航空写真 ②
図版34	平成24年度調査地	航空写真 ③
図版35	平成24年度調査地	航空写真 ④
図版36	平成24年度調査地	航空写真 ⑤
図版37	第1 調査区	
図版38	第2 調査区	
図版39	第15-2調査区 ①	
図版40	第15-2調査区 ②	

図版41	平成25年度調査地 航空写真
図版42	平成23年度調査地出土遺物
図版43	平成24年度調査地出土遺物 ①
図版44	平成24年度調査地出土遺物 ②
図版45	平成24年度調査地出土遺物 ③
図版46	平成24年度調査地出土遺物 ④
図版47	平成25年度調査地出土遺物
図版48	第3調査区出土木製品

挿図目次

第1図	調査区配置図	1
第2図	調査地周辺の遺跡	3
第3図	第15調査区平面図	5
第4図	第15調査区南壁土層図	6
第5図	第16調査区平面・土層図	7
第6図	第17調査区土層図	8
第7図	第17調査区平面図	9
第8図	第18調査区平面図	10
第9図	第18調査区土層図	11
第10図	第3調査区平面・土層図	12
第11図	3SD01平面・土層図および西肩部出土状況図	13
第12図	3SD02平面・土層図	14
第13図	3SD03・3SD04平面・土層図	15
第14図	第5調査区平面・土層図	17
第15図	5WNR01平面・土層図	18
第16図	第6調査区平面・土層図	20
第17図	第7調査区平面・土層図	21
第18図	第8調査区平面・土層図	22
第19図	第9調査区平面・土層図	23
第20図	第10調査区平面・土層図	24
第21図	第11調査区平面・土層図	25
第22図	第12調査区平面・土層図	26
第23図	第13調査区平面・土層図	27
第24図	第14調査区平面・土層図	28
第25図	第16-2調査区平面・土層図	30
第26図	第1調査区平面・土層図	34
第27図	第2調査区平面・土層図	36
第28図	第15-2E調査区平面・土層図	37

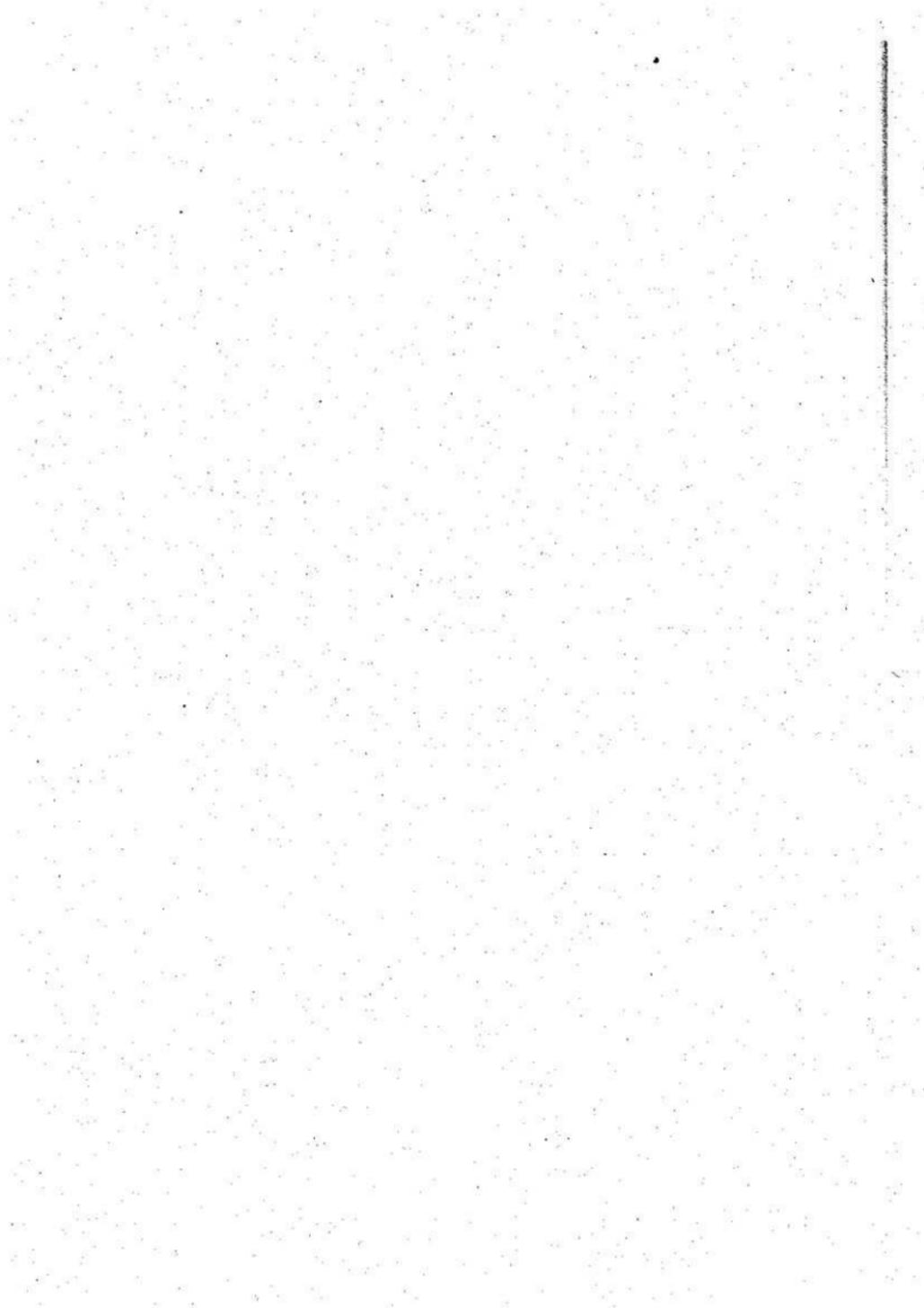
第29図	第15-2W調査区平面・土層図	38
第30図	平成23年度調査区出土土器類①	40
第31図	平成23年度調査区出土土器類②	41
第32図	第3調査区出土土器類①	43
第33図	第3調査区出土埴輪類①	45
第34図	第3調査区出土埴輪類②	47
第35図	第3調査区出土土器類②	49
第36図	第3調査区出土埴輪類③	51
第37図	第5調査区出土遺物	53
第38図	第9・10調査区出土遺物	55
第39図	12SE01出土遺物	56
第40図	12SD01ほか出土遺物	58
第41図	第14・16-2調査区出土遺物	59
第42図	平成25年度調査区出土土器類	62
第43図	平成25年度調査区出土埴輪類	63
第44図	3SD03出土木製品	65
第45図	喜殿町周辺の既往の調査	67

表目次

第1表	平成23年度調査区出土遺物観察表	42
第2表	第3調査区出土土器類観察表①	44
第3表	第3調査区出土埴輪類観察表①	46
第4表	第3調査区出土埴輪類観察表②	48
第5表	第3調査区出土土器類観察表②	50
第6表	第3調査区出土埴輪類観察表③	52
第7表	第5調査区出土遺物観察表	54
第8表	第9・10調査区出土遺物観察表	55
第9表	12SE01出土遺物観察表	57
第10表	第12・14・16-2調査区出土遺物観察表	60
第11表	平成25年度調査区出土土器類観察表	62
第12表	平成25年度調査区出土埴輪類観察表	64

写真目次

写真1	第3調査区 of 古墳想定復元案	67
写真2	天理市南六条ノカミ遺跡古墳周濠出土木質遺物類微鏡写真	68



第1章 名阪道路(天理地区)埋蔵文化財発掘調査の経緯と経過

I. 経緯

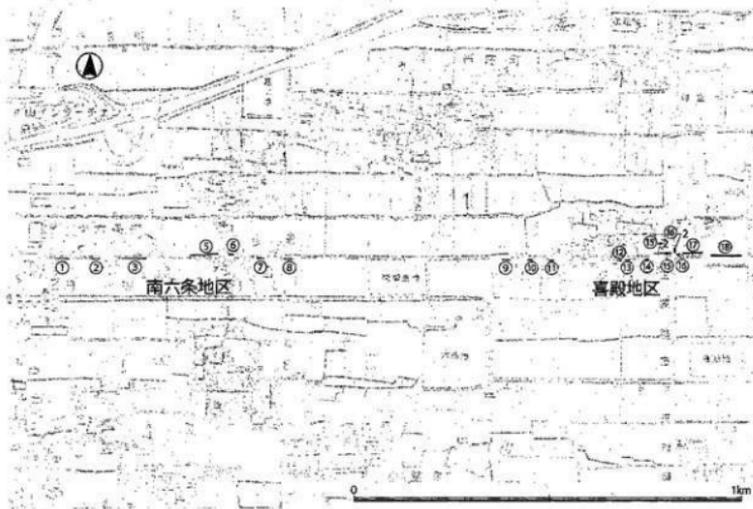
今回の調査は、西名阪自動車道の南0.2～0.8kmを東西に通る市道31・53号線が、国土交通省近畿地方整備局奈良国道事務所により名阪道路側道として拡幅整備されるのに際し、道路拡幅に伴う事前調査として実施したものである。同拡幅工事は天理市南六条町と喜殿町にまたがる延長2.3kmにおよび、事前の踏査で遺跡の兆候が確認された17か所について、天理市教育委員会が発掘調査を計画した。

II. 経過

調査実施に当たり、当初は南六条町地内に第1～第8調査区、喜殿町内に第9～第18調査区の合計18箇所を調査する予定で調整に着手した。その後、諸条件を考慮して第4調査区の掘削を断念、同用地を駐車場および休憩用仮設ハウス設置箇所として活用することとし、残りの17箇所について発掘調査を実施した。さらに調査開始後、第15・16調査区について追加調査(第15-2・16-2調査区)を実施したことから、最終的な調査箇所は合計19箇所となった。

拡幅予定地は調査当時、依然として用地買収が進行中で、調査着手時点で未買収の調査区が複数存在した。このため、調査は用地買収済みの地点から順に実施することとした。また、調査予定地はほとんどが水田に隣接することから、地元協議の結果、調査実施期間は稲刈り後の農閑期に限定された。

このような事情から、発掘調査には平成23年度から25年度までの3か年度を要し、発掘調査のみならず整理作業も順不同に実施することとなった。このため本書においても、調査区番号順ではなく調査年度ごとに報告することとした。



第1図 調査区配置図(S=1:12,500)

第2章 位置と環境

I. 地理的環境

今回の調査地は、天理市の北西部に位置する南六条町から喜殿町にかけての東西延長約1.7kmの区間である(以下、調査地を便宜的に「南六条地区」「喜殿地区」と呼び分ける場合がある)。一帯は、調査地東端付近が高瀬川をはじめとする小河川によって形成された扇状地の扇端部に位置するほかは緩傾斜扇状地に位置し、調査地西端付近で標高約48m、東端付近では標高約57mを測る。周辺は糸里地割を比較的良好に残す水田や集村が分布し、調査地南側には佐保川の支流である珊瑚珠川やさらにその支流である石上川が糸里地割に沿って概ね東西に流れている。

II. 歴史的環境

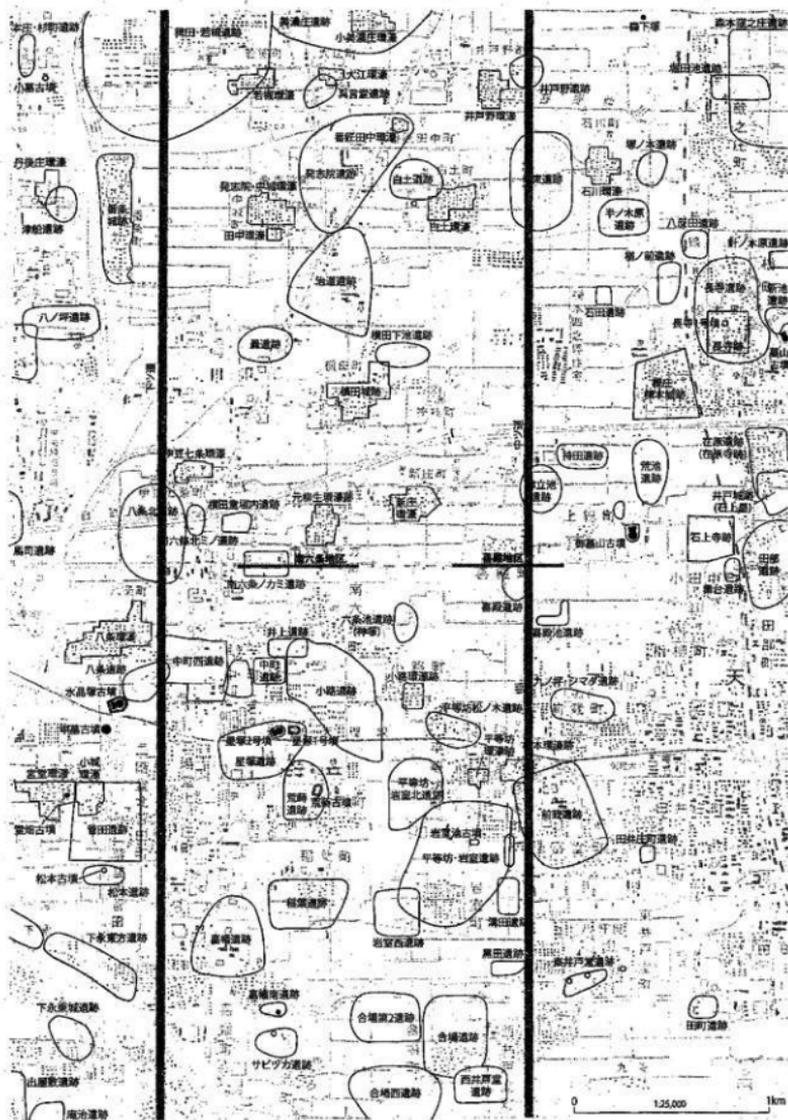
南六条地区の西～南西方では、京奈和自動車道および郡山下つ道JCTの建設に伴う発掘調査が近年盛んに行なわれ、大きな成果を上げている。このうち八条北遺跡、中町西遺跡、南六条北ミノ遺跡などでは縄文時代後期ないし晩期の土器が出土している。また、喜殿地区の南方約1kmに位置する平等坊松ノ木遺跡でも縄文晩期土器の出土が見られる。

弥生時代については八条北遺跡、八条遺跡で弥生時代前期末～中期前半の方形周溝墓が確認され、今回の調査地のうち南六条地区でも弥生時代前・中期以降の溝状遺構が確認された。当該地点は同時に確認した後期古墳の周濠状遺構と合わせて「南六条ノカミ遺跡」として新規に奈良県および天理市の遺跡地図に登録している。また、平等坊松ノ木遺跡でも弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑を確認している。なお、喜殿地区の南方約1.5kmには平等坊・岩室遺跡、北東約1.5kmには長寺遺跡が所在し、いずれも弥生時代の大規模集落として著名である。

古墳時代には、この地域では主に後期古墳の分布が見られる。南六条地区の南西約1kmには全長50mの帆立貝式墳丘に二重周濠をもつ水晶塚古墳が所在し、古墳時代後期前半の埴輪や木製品が多数出土した。南六条地区の南約1.0kmには、後期前半の前方後円墳として星塚1号墳(全長36m)・2号墳(全長39～41m)があり、多様な埴輪類が出土したほか、1号墳では笛や琴などの楽器形木製品、2号墳では横穴式石室が検出され、玉類や金製耳飾りなど豊富な副葬品の存在が特筆される。今回の調査でも南六条地区で古墳周濠状の遺構を確認したほか、地元の住民によると南六条町元柳生方集落西方の水田地帯にも埴輪出土伝承があるといひ、南六条地区付近に複数の後期古墳の存在が想定される。一方、南六条地区の北西約0.2kmに位置する南六条北ミノ遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓も確認されている。喜殿地区東方約0.7kmには御嵩山古墳(前方後円墳、全長74m)が所在し、後期前半の埴輪類や須恵器のほか多量の木製品が出土した。なお、南六条地区南方約1.3kmには荒礒古墳(前方後円墳、全長約30m)、喜殿地区南方約1.5kmには岩室池古墳が所在し、いずれも後期前半の埴輪類が多量に出土している。

集落遺跡としては古墳時代中期の中町西遺跡や後期の中町遺跡があり、中町西遺跡では韓式系土器が多数出土している。星塚1・2号墳周辺には星塚遺跡が広がり、古墳時代前期の土坑や溝が確認された。南六条地区東端の南方約0.5kmには小路遺跡が広がり、古墳時代前期および後期の遺構が多数確認されている。喜殿地区南方約0.8kmには古墳時代中期前半を中心とする丸ノ坪・シマダ遺跡があり、玉造りに関わる遺物が多数出土した。

飛鳥時代以降平安時代前半にかけての古代には、南六条地区西方約0.4kmに下つ道、喜殿地区に中つ道の古代官道が南北に走り、八条北遺跡では下つ道の両側溝のほか、道に付随する施設の可能性がある掘立柱建物跡群が確認されている。今回の調査では、喜殿地区で中つ道東側溝とみられる溝状遺構を



第2図 調査地周辺の遺跡(S=1:25,000)

確認した。喜殿地区東方約1kmの石上寺跡は白鳳期の軒瓦が採集され、創建が飛鳥時代に遡る可能性も指摘される古代寺院で、北方の標本校区にかけて分布する古代寺院群の最南端をなす。

中世以降は八条遺跡や八条北遺跡、中町遺跡、平等坊・松ノ木遺跡などで平安時代ないし鎌倉時代まで、小路遺跡や九之坪・シマダ遺跡、喜殿地区東方約1.1kmの田部遺跡などで室町時代までの遺構・遺物が確認されている。環濠集落や城館として西から八条環濠、伊豆七条環濠、元柳生環濠跡、新庄環濠、小路環濠跡、標本城跡などがみられるが、いずれも未調査で詳細は不明である。

<主要参考文献>

- 近江昌司1960「大和国石上寺及び長寺址出土の遺跡」『大和文化研究』6-6
- 村田修三1980「大和の環濠集落」『日本城郭体系10』新人物往来社
- 泉武1983『九ノ坪・シマダ遺跡発掘調査概報』天理市教育委員会
- 楠元哲夫編1985『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集
- 泉武編1990『星塚・小路遺跡の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第4集
- 高野政昭編1991『平等坊松ノ木遺跡発掘調査報告』考古学調査研究中間報告17 埋蔵文化財天理教調査団
- 泉武・松本洋明1992「荒時古墳(第1次・第2次)」『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和63・平成元年度』天理市教育委員会
- 青木健時1994『よみがえる弥生のむら—平等坊・岩室遺跡の調査成果から—』天理市教育委員会
- 泉武1996「御基山古墳」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度(1992・1993年)』天理市教育委員会
- 泉武2003「中町遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成8・9年度(1996・1997年)』天理市教育委員会
- 伊藤雅和・本村充保編2003「中町西遺跡」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第85冊
- 本村充保2004「八条北遺跡・南六條北ミノ遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2003年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 本村充保・相見梓2005「八条北遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2004年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 坂崎編2006『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第94冊
- 石田大輔・松本吉弘2010「田部遺跡(平成10年度の調査)」『天理市文化財調査年報 平成20年度』
- 石田大輔2011「標本町 長寺遺跡の考古学」『天理市埋蔵文化財センターだより』Vol.13
- 持田大輔ほか2012「八条北遺跡・下ツ道」『奈良県遺跡調査概報 2011年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 岡見知紀2013「中ツ道」『奈良県遺跡調査概報 2012年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 北山峰生2014「中ツ道推定地」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』奈良県立橿原考古学研究所

<挿図出典>

第2図：国土地理院発行1:25,000地形図「大和郡山」に加筆

※本章で用いる遺跡名は、天理市内の遺跡については「天理市文化財・遺跡分布地図」、市外の遺跡については「奈良県遺跡地図」に準拠した。

第3章 調査の成果

I. 平成23年度の調査

喜殿地区の第15調査区から第18調査区の調査を実施した。

1. 第15調査区

現在道路の北側を面する水路に北接し、標高55.1～55.5mを測る畑地に設定した調査区である。現地の小字名は東垣内である。当初、東西20m、南北1mの調査区を設定し、後にトレンチ西端で西側および北側、東端で東側および北側への拡張を行った。調査は全て人力によって行い、平成24年1月16日に開始し、平成24年1月30日にすべての作業を終了した。最終的な調査面積は28.9㎡である。

(1) 層序

調査地の現況は耕作地で、調査区西端は畦にかかって一段高くなっている。褐灰～暗灰黄色のシルトを主体とする耕作土を除去すると、概ね現地表面下0.3m前後でにぶい黄橙色～明黄褐色を呈する細粒砂～シルト層が露出する。この層を基盤として遺構が検出されたが、基盤層の下方では中粒砂ないし粗粒砂の堆積も見られ、地盤としてはやや不安定であることを窺わせた。遺構検出面の標高は54.6～54.9mである。

(2) 遺構

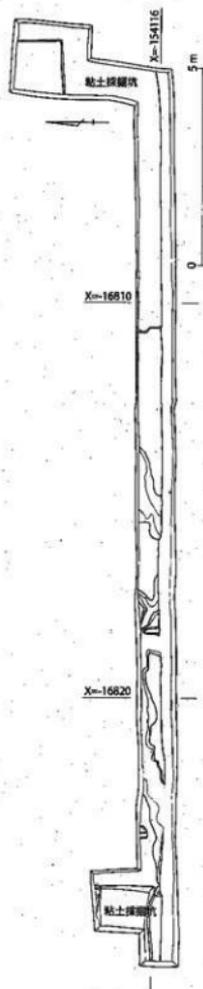
落ち込み

調査区内で複数の落ち込みを確認した。いずれも平面形は不整形で遺物を含まず、自然地形の一端を捉えたものと解釈される。埋土は褐灰色ないし黄褐色系のシルトや砂を主体とする。

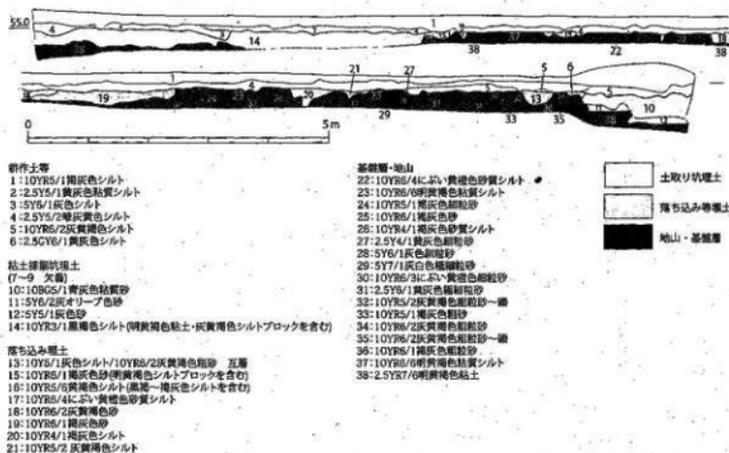
粘土探掘坑群

調査区両端付近を中心として、輪郭が直線的でほぼ垂直に掘り込む土坑を複数検出した。調査区東側では東西7.8m以上、南北1.8m以上にわたって地山と同質の明黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルトを埋土とする土坑が2基以上重複し、時間的制約から底面まで掘削しなかった。西端では東西2m以上を測る土坑を検出し、当該部分に中つ道西側溝が推定されたことから北へ拡張した上で底面まで掘削したが、土坑底面では何らの遺構も検出し得なかった。ここでは、東西1.8m以上、南北1.2m、検出面からの深さ0.5m程度の方形の土坑を南北に連続的に掘削している状況が看取された。埋土は灰色系の砂質土である。付近住民の教示によれば、喜殿町に戦後まで瓦屋があり、周辺で粘土の探掘が盛んに行なわれていたとのことで、これらがその痕跡に当たるものと推測される。

(3) 小結



第3図 第15調査区
平面図(S=1:125)



第4図 第15調査区南壁土層図(S-1:80)

本調査区の遺構検出面は標高54.6~54.9m前後を測り、耕作土直下で遺構面となる。調査地付近は道路面推定地であったが、これに関連する遺構を確認することはできなかった。中つ道関連遺構としては、東に近接する第16-2調査区で中つ道東側溝とみられる溝状遺構を検出している(後述)が、その底面レベルは標高54.6~54.8mを測り、本調査区の遺構検出レベルと大差ない。また、第15調査区の現地表面レベルも第16および16-2調査区と比べて1m近くも低く、本調査区では近世以前の遺構はすでに削平・消滅しているものと判断された。

2. 第16調査区

主要地方道天理環状線の東に隣接する標高56.0~56.1mの開閑地に設定した。現地の小字名は辻である。東西12m×南北2mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成23年11月24日に開始し、翌年1月13日にすべての作業を終了した。調査面積は24㎡である。

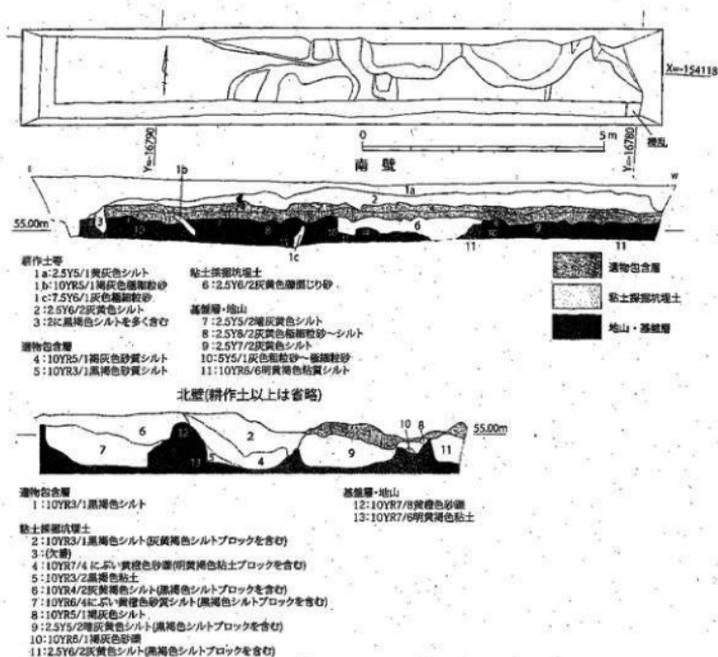
(1) 層序

調査地の現況は現地住民の農作業用通路として用いられ、黄灰色シルト(厚さ約0.2~0.5m)と灰黄色シルト(厚さ約0.3m)からなる表土を除去すると、にぶい黄褐色砂礫ないし黒褐色粘土の層が表れる。この層は厚さ0.3mを測る遺物包含層で、これを除去すると現地表下約0.8mでにぶい黄褐色ないし暗灰黄色のシルト層(厚さ約0.4m)が表れる。この層の上で粘土採掘坑群を検出した。遺構検出面の標高は55.1~55.3mである。遺構を検出したシルト層の下方には明黄褐色粘質シルトが見られるが、この上面に遺構の兆候は認められなかった。

(2) 遺構

粘土採掘坑群

調査区東半を中心に複数の土坑が密集し、切り合いが顕著である。いずれも平面形は隅丸方形~不整



第5図 第16調査区平面・土層図(S=1:100)

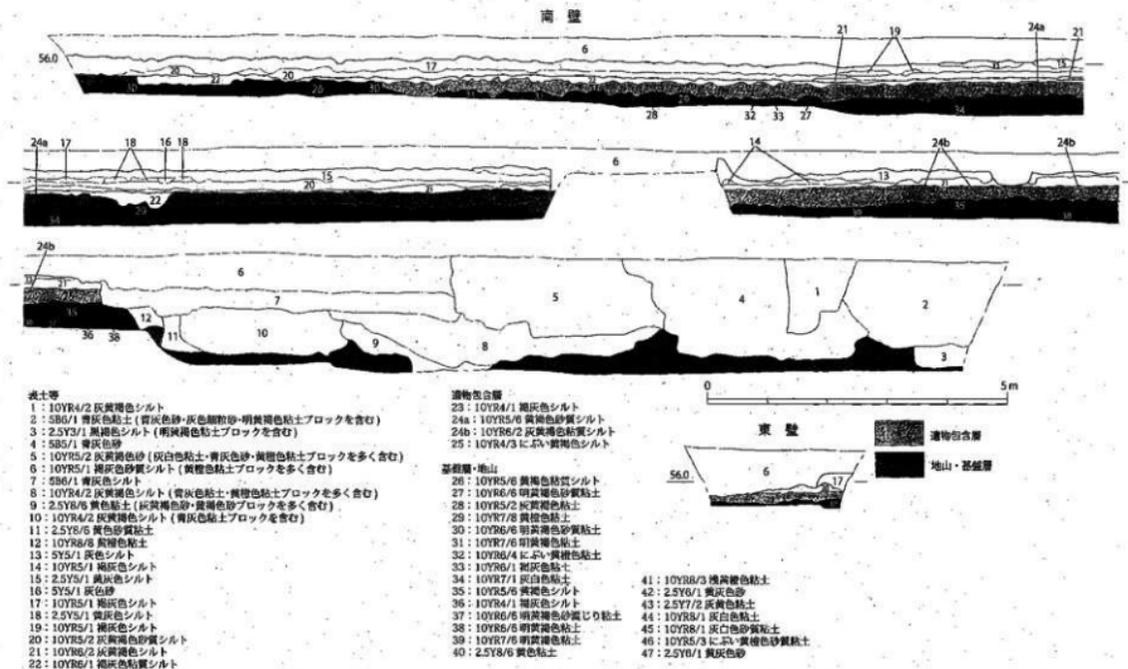
円形を呈し、長軸方向で2～2.4m、検出面からの深さ0.4～0.7mを呈する。埋土は灰黄色礫層じり砂、灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、黒褐色シルトないし粘土、暗灰黄色シルトなどさまざまであるが、いずれも黄褐色系ないし黒褐色系のシルトブロックを多く含む。これらの埋土からは中近世の土器や銭貨等が出土しており、周辺調査区の状況から考えて、これら土坑群も近世の粘土採掘作業に伴うものと考えられよう。

(3) 小結

本調査区でも第15調査区と同様に中つ道関連遺構の検出が期待されたが、結果的には複数の粘土採掘坑を検出するのみとなった。平成24年度に実施した第16-2調査区の調査成果と合わせると、本調査区は中つ道路路面及び側溝から外れていたと考えられる。

3. 第17調査区

石上川の現流路の北側に接し、標高56.0～56.2mの里道に設定した調査区である。現地の小字名は辻である。東西52m×南北3mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成23年11月24日に開始し、翌年1月13日にすべての作業を終了した。調査面積は156㎡であ



第6図 第17調査区土層図(S-180)

る。

(1) 層序

調査地の現況は里道で、褐色砂質シルトからなる造成土(厚さ約0.4m)および灰色系のシルトからなる耕作土(厚さ約0.3m)を除去すると、調査区東端付近で遺構面が露出するほかは現地表面下約0.7mにぶい黄褐色シルトを主体とする遺物包含層(厚さ約0.2m)が露出する。この層には土師質羽釜、瓦器皿など中世の遺物を含む。これを除去すると、現地表面下0.7~1.0mで黄褐色シルトないし黄橙色粘土からなる地山となる。この地山上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は55.3~55.8mである。なお、調査区西端から15mにわたっては、耕作土上面ないし現地表面を掘り込み面として大規模に攪乱(深さ1.0~1.6m)され、遺物包含層はおろか遺構検出面すら大きく削平されている状況であった。

(2) 遺構

素掘溝群

調査区内で、南北方向の素掘溝を合計10条検出した。幅0.2~1.2m、検出面からの深さ0.05~0.15mを測る。埋土は遺物包含層と同質同色で、中世後期ごろまでの遺物がわずかに出土した。

ピット群

調査区内でピット8基を確認した。規模は直径0.15~0.5m、検出面からの深さ0.03~0.17mを測る。ピットはそれぞれ散在し、建物等を形成するような状況は確認できない。

(3) 小結

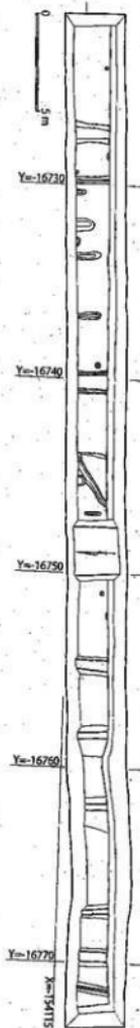
本調査区では中世後期以降の耕作痕跡を検出したほか、小規模なピットを複数確認したが、建物跡などを形成するものではなく、明瞭な遺跡の兆候は確認できなかった。なお、調査区西側の大規模な攪乱は、掘り込み面からみて新しい時期のものであるが、第15・16調査区で顕著に見られた粘土採掘行為にかかわる痕跡である可能性も考えられる。最も新しいものは現地表面を掘り込み面として粘土層に達する前に掘削を止めており、これらについては粘土採掘以外の性格を想定する必要がある。

4. 第18調査区

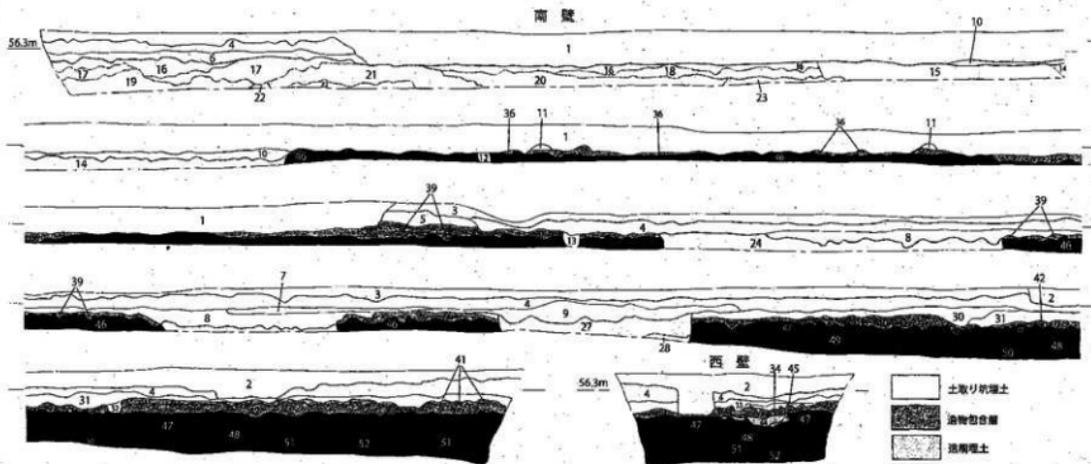
石上川の現流路の北側に接し、標高56.3~56.7mの里道に設定した調査区である。現地は小字十ノ坪(調査区以北)と小字芦田上ノ方および八ノ坪上ノ方(調査区以南)の境界に位置する。東西78m、南北4mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成23年11月24日に開始し、翌年1月13日にすべての作業を終了した。調査面積は312㎡である。

(1) 層序

調査地の現況は里道で、灰色砂礫ないしシルトからなる造成土(厚さ約0.2~



第7図 第17調査区
平面図(S=1:250)



造成土・耕作土等

- 1: 10YR8/1 灰黄色砂-シルト
- 2: 2.5Y8/2 灰白色砂
- 3: 10YR6/4 褐灰色砂質シルト
- 4: 10YR5/1 褐灰色シルト
- 5: 2Y6/1 灰色シルト
- 6: 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 7: 5Y5/1 灰色粘土(褐色砂を含む)
- 8: 3Y5/1 灰色粘土
- 9: 2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 10: 5Y6/2 灰白色シルト
- 11: 10YR5/1 褐灰色シルト
- 12: 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
- 13: 10YR5/6 褐褐色粘土(灰色粘土ブロックを含む)

粘土・採掘破砕土

- 14: 10YR8/6 黄褐色粘土(灰黄褐色砂を含む)
- 15: 10YR5/2 灰黄褐色砂・明黄褐色粘土ブロックを含む
- 16: 7.5Y6/1 灰色シルト
- 17: 10YR7/6 明黄褐色粘土(灰色シルトブロックを含む)
- 18: 10B6/1 黄灰色シルト
- 19: 5B6/1 黄灰色シルト(明黄褐色粘土ブロックを含む)
- 20: 10YR6/4 灰・黄褐色砂
- 21: 10YR8/6 黄褐色粘土(灰色シルトブロックを含む)
- 22: 10YR7/6 明黄褐色砂質シルト(灰色シルトブロックを含む)
- 23: 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
- 24: 3Y5/1 灰色粘土・明黄褐色粘土ブロックを含む
- 25: 10Y6/1 灰色シルト
- 26: 10Y6/1 灰色シルト(明黄褐色粘土ブロックを含む)
- 27: 2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 28: 2.5Y6/3 灰・黄色砂質シルト

田耕作土

- 29: 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
- 30: 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 31: N7/0 灰白色粘質シルト
- 32: 10YR5/6 明黄褐色砂質シルト(褐灰色シルトブロックを含む)
- 33: 7.5YR5/4 灰・黄色砂質シルト
- 34: 10YR7/4 灰・黄褐色粘砂

遺物包含層

- 35: 10YR6/2 灰黄褐色粘土
- 36: 2.5Y6/2 灰黄色砂質シリシルト
- 37: 7.5Y6/1 灰色粘土
- 38: 2.5Y6/2 灰黄色砂質シリシルト
- 39: 3Y5/1 灰色粘土
- 40: 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
- 41: 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
- 42: 2.5Y3/1 黄灰色砂質シルト
- 43: 10YR5/4 灰・黄褐色シルト

ISD01 埋土

- 44: 10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 45: 10YR5/1 黄灰色粘土

基盤層・地山

- 46: 10YR7/6 明黄褐色砂質シリシルト
- 47: 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
- 48: 10YR5/6 黄褐色砂質シリシルト
- 49: 10YR5/6 明黄褐色砂質粘土
- 50: N7/0 灰白色砂
- 51: N6/0 灰色砂
- 52: 10YR6/6 黄褐色粘土

II. 平成24年度の調査

南六条地区の第3調査区～第8調査区、喜段地区の第9調査区～第14調査区について調査を実施した。また、第16調査区の北方において奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査で中ツ道側溝とみられる溝状遺構が検出された(岡見2013)ことを受けて、第16調査区の北西に第16-2調査区を設定して追加調査を実施した。

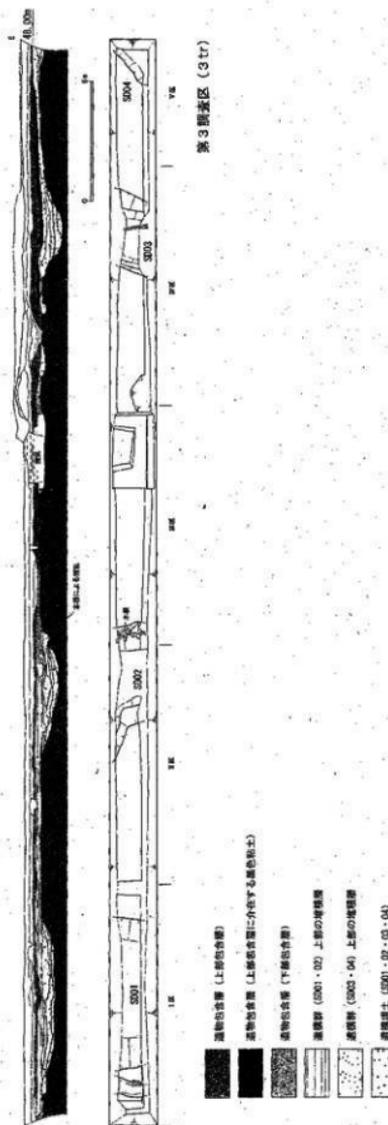
1. 第3調査区

平成24年度調査時の南六条地区の最西端で実施した調査地点である。現地における調査は、平成24年12月18日より調査区設定等の準備を開始し、年末年始の中断時期を挟んで平成25年1月19日にすべての調査に係る作業を終了した。

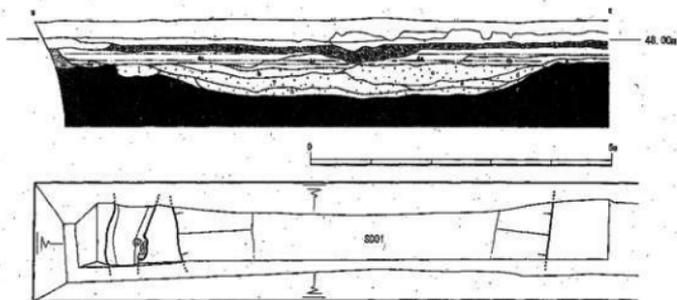
調査は市道南側に位置する狭長な調査地の東西に、幅2mを基調とした東西長さ45mの調査区を設定して当該地点における遺構、遺物包含層の有無確認を目的として実施した。なお、調査を進行するに連れ、良好な遺物包含層を確認したため調査区西端より東方に向けて10m毎にI～V区の小区を設定し遺物取り上げ時の便宜を図ることとした。

(1) 層序

調査地の現状では一部に造成盛土の客土が置かれた状況も見られたが、基本的に調査にさほど支障は無く現状の耕作土上面より発掘調査に係る掘削を行なうことができた。調査地全体では西端より東方にかけて若干の地表面傾斜、下降は見られたものの、耕作土、床土の直下、現地表面下0.5m前後の深度で褐灰～灰黄褐色砂混じり粘質土・粘土からなる遺物包含層(上部包含層=第3層)を確認することができた。上部包含層は層厚0.1～0.4mで調査区各所に凹凸が



第10図 第3調査区平面・土層図(S=1:200)



遺物包含層（上部包含層）

3a: 黄灰色細砂混じり粘質土 3b: 灰黄褐色細砂混じり粘質土

遺物付 上部堆積層

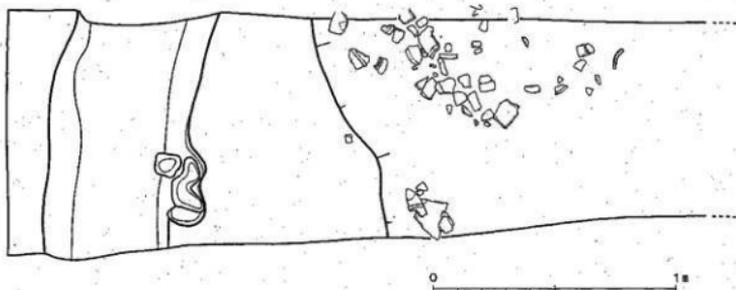
4a: に近い黄灰色細砂・粘土互層 4b: 灰黄色細砂・シルト 4c: 淡黄色～灰黄色細砂・粘土互層 4d: 黄灰色砂質土

第3D01 雑土

a: 暗灰黄色細砂・細砂・砂質土 b: 灰黄褐色細砂混じり粘質土・粘土 c: 黄灰色砂質土（埴輪片多く含む）

d: 暗灰色細砂混じり粘質土 e: 暗灰色砂質土ブロック混じり粘土 f: 暗灰色細砂混じり粘質土・粘土埴輪片多く含む

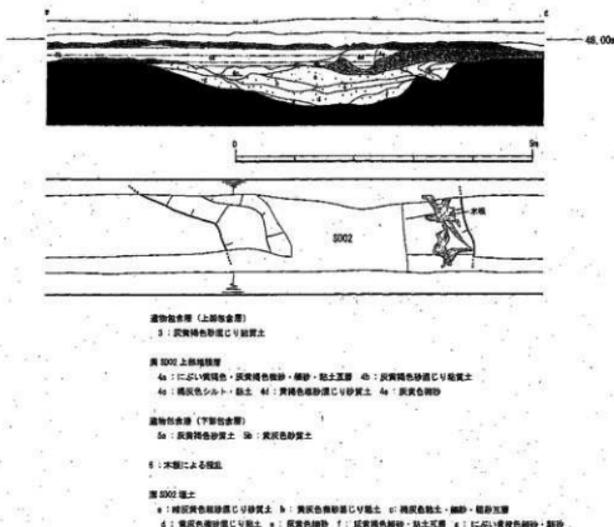
g: 灰黄色細砂・細砂 h: 灰黄色粘土 i: 暗灰色細砂・粘土互層 j: 灰黄色細砂



第11図 3SD01平面・土層図(S=1:80)および西側部出土状況図(S=1:20)

ありつつも平均的な広がり呈し、土師器、須恵器と若干の埴輪片を包含していた。

この上部包含層以下での状況は調査区の東西で大きく異なり、西方のⅠ・Ⅱ区では直下に多量の埴輪片を含む浅黄～黄灰色の細砂・粘土や下部の微砂を基調とした堆積層（遺構群上部の堆積層=第4層）が0.2～0.6mにわたって堆積しており、Ⅰ・Ⅱ区間の下面では標高47.7m前後で黄褐色粘土・シルト層の地山面となって遺構検出面を確認することとなった。溝3SD01・02はこの地山面で検出している。調査区東方のⅢ～Ⅴ区においてはⅠ・Ⅱ区間に見られた先述の堆積層は存在せず、Ⅳ・Ⅴ区間にも上部包含層より下に黒色砂混じり粘土（第3層下部）が介在する。また、ここではその直下に弥生土器、



第12図 3SD02平面・土層図(S=1:80)

土師器、須惠器片等の遺物を含む黒褐色砂混じり粘質土の堆積層（遺構群上部の堆積層=第4層）を経て灰黄色砂混じり粘質土の地山面で溝3SD03・04を検出するに至った。他にもⅢ・Ⅳ区間のみではあるが、さらに下位に落ち込む灰黄褐色砂質土の遺物包含層（下部包含層=第4層）も存在し、西側では上部にⅠ・Ⅱ区遺構面上部堆積層が重なることからこれら遺構群埋没の先後関係を知る鍵となる。ここでも下面では浅黄色シルト・粘土の地山面となっていた。

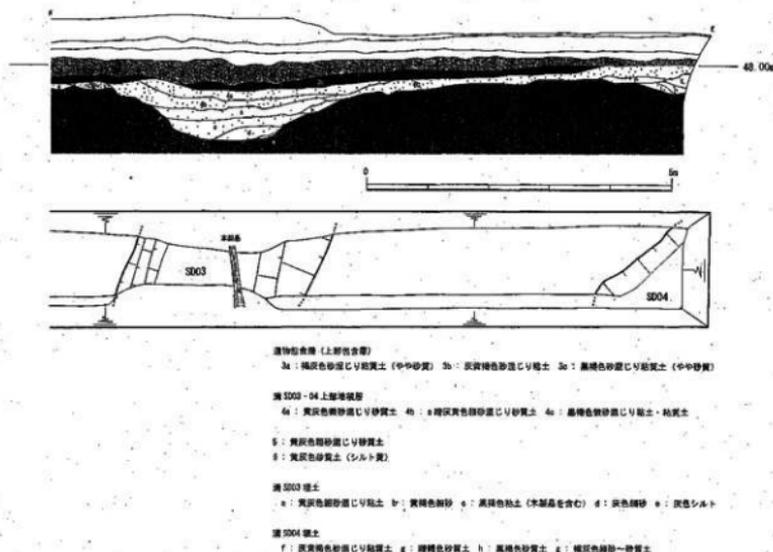
(2) 検出遺構

調査区の全域にて地山面直上で4条の溝状遺構を検出している。

溝3SD01

調査区西端付近のⅠ区で現地表面下0.6m前後の深度で検出した幅6.0～6.3mの溝である。深さは検出面より0.7m程度である。検出に至るまでの間には多量の埴輪片と須惠器、土師器を含む微砂・細砂と粘土の互層および砂質土等の上部堆積があり、埋没までの間に周辺から流入した遺物の在り方が見えた。埋土の上部では東寄りに埴輪片を多く含む砂質土の堆積層が深くっており、下部では底面付近にまで粘土層を主とした堆積が続いた。埋土下層での埴輪片の出土状況では東岸の肩部から溝底に向かって傾斜する在り方で分布しており西方より流入する状況が見られた。また、溝底面直上の堆積層は粘性の強い粘土が堆積しており、湿潤な状況が一定期間持続した様子が推定できる。

溝埋土および埋没までの堆積層中に埴輪、須惠器等が主体を占める出土遺物の様相から古墳周濠と考えられる溝状遺構である。そして埴輪等の出土状況からは、おそらく西側に墳丘の存在が想定される。その場合には広い溝幅から径20m以上の墳丘規模をもつことが考えられる。なお、西岸付近に検出した幅0.6m前後の溝については古墳に付随した遺構とも考えられ、例えば墳丘からの排水溝や埴輪列設置



第13図 3SD03・3SD04平面・土層図(S=1:80)

のための布張り掘り方の溝であったとも推測されるものである。

溝3SD02

調査区中央西寄りの地点に当たるⅡ区東端付近で検出した溝である。現地表面下0.7m前後の深度で検出しており、東西幅4.2mで深さは検出面より0.6m程度である。東肩付近には二葉マツの埋没樹木根が重複して遺存し、掘削時の形状が破壊されているようで弧状に巡る西岸とは異なる状況を呈していたが、おそらく北西～南東方向に湾曲する平面形であったと思われる。埋土は下部では溝底面から両肩までの傾斜に細砂・粗砂の流入後に粘質土や粘土の堆積があり、上位には砂・砂質土・粘土の互層堆積を経て埋没した様子が窺えた。さらに上部では東側に下部包含層が先行堆積し、その後西側肩部を覆うように調査区西側から続く微砂・細砂・粘土の互層堆積が重複して埋没した状況が見られた。遺物は埋土上半部で大きめの埴輪や須恵器片が出土するほかは下部では細片のみでほとんど顕著な遺物の出土は見られなかった。

溝3SD03

調査地東端付近のⅣ区東半で検出した溝である。現地表面下0.8m前後で検出、確認した。東西幅3.2mで深さは検出面から0.6mを測る。断面形は逆台形に近い半円形を呈し、埋土は溝底面から東方法面側に細砂層を介しつつも下半には粘土層の堆積のみが見られた。ここからはわずかな埴輪片、須恵器や土師器等の土器片とともに木製品が出土している。

木製品は調査区の南北両壁に跨って出土しており、2.0m以上の一木を加工した建築材を転用したものと考えられる。一部が焼成により炭化しており、墳丘上での祭祀行為に使用した後に周濠内に廃棄された木製樹物（威儀具）の可能性も考えられる遺物であった。

さらに上位の溝埋土上半では砂質土、砂混じり粘質土を主体とする砂質土壌による埋没が進み、ここ

でも埴輪、須恵器片や中世土器片が含まれていた。

溝の肩部では東が低く、西に高くなっていることからこの溝についても西側に墳丘をもつ古墳の周濠となるものと思われる。また、遺物出土は少ないながらも位置関係を考慮すれば前述の溝3SD02と対を成し径20m程度の円墳に想定復元することが可能である。

溝3SD04

調査区東端のV区で検出した北東～南西方向の溝状遺構である。調査区の北壁から南壁に向けて西岸を確認したのみであり全容については不明点が多い。深さは検出箇所の最深部で約0.5mを測る。埋土は南壁側の最下部では粘質土・粘土が深く堆積し、下部では細砂、砂質土が基調となる。また、上部では粘質土となっていた。遺物は埋土上部より弥生中期の遺底部片が出土している。溝の性格と時期については不明瞭であるが、付近および上部堆積層出土土器の内容から弥生前・中期以降の流路である可能性も考えられる溝である。

(3)小結

第3調査区の調査では弥生時代に遡る流路と弥生前・中期の土器片出土に加え、埋没古墳周濠の一部を検出し、2基の古墳の存在を確認している。その前後関係については判断材料に乏しく明らかにはできなかったが、多量の埴輪片が出土した溝SD01とその他の溝や調査区内で出土した埴輪、須恵器片等の資料により6世紀後半頃までの時期を考えたい。

以上のように、第3調査区においては極めて小面積の調査であったにも関わらず、南六条地区の調査では最も多くの成果を得ることができたと言える。

2. 第5調査区

南六条地区の西方で実施した調査地点である。現地における調査は、平成24年度調査の開始日となる10月22日より調査区設定と準備を開始し、近接の第6調査区と併行して調査を進行した。そのためすべての調査に係る作業については11月21日に終了した。

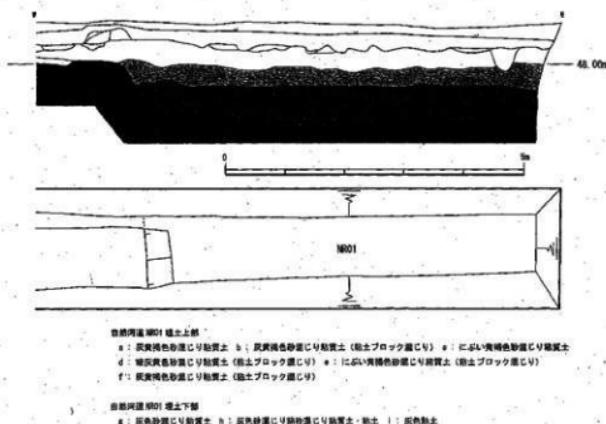
調査は市道北側の狭長な調査地の東西に連続した2つの調査区を設定、配置して調査を進めた。西調査区(5Wトレンチ)では幅2mを基調に、東西長さ40mを、東調査区(5Eトレンチ)では幅2.5mを基調として東西長さ30mの規模で設定し、当該地点における遺構、遺物包含層の有無確認を目的にそれぞれ調査を実施した。

以下、個々の調査区ごとに調査概要を記すことにする。

第5調査区東地区(5Eトレンチ)

(1) 層序

当該地においては、調査地の東端から西側付近にまで盛土造成による層厚0.3mの客土がすでにされていたが、西端については近年までの耕作面が表出している状況であった。当調査地以東の南六条町調査区の多くと同様に、盛土以下の現地表面下約0.6m～0.8m付近あるいは耕作土面下約0.4m前後の深さにまで旧耕作土、床土等の耕作に伴う層序を確認し、以下は標高48.2m前後でほぼ平坦な地山面(灰黄褐色砂混じり粘質土)となっていた。基本的には耕作土直下で地山となっていたが、調査区西半では部分的にはあるが、これら上部の耕作に伴う堆積層直下の地山面直上に古墳時代土器小片を含む遺物包含層(黒褐色砂混じり粘質土)が遺存することを確認している。なお、地山の上面では、多くの素掘り溝群とともに小穴も検出している。



第15図 5WNR01平面・土層図(S=1:80)

える。また、遺物の出土は微量であったが、小穴群や壁面の土坑痕跡等の検出遺構により集落痕跡の一端を知ることができた。時期的にはおそらく古墳時代の範疇であったことが窺い知れた。

第5調査区西地区 (5Wトレンチ)

(1) 層序

当該地においても、現状は東側を中心に西側に薄く盛土造成が行なわれていた。造成による客土は現地表面下約0.2m~0.4mまでにおよび、以下に耕作土、旧耕作土が続き地山面に至る状況は当調査区以東の調査区とほぼ同様な状況を示していた。

しかしながら、東西に長い当調査区内では少しずつ状況は異なり東半部では耕作土、旧耕作土、床土の下位に標高48.0m付近で地山(灰黄褐色砂混じり粘質土)となるのに対し、調査区の西側では47.8m前後と地山面の緩やかな下降が見られた。そのため調査区西側半分では近代の旧耕作土直下の地山面直上で遺構面となり、東西方向に巡らされた近現代の暗渠排水管が多く検出されている。その他、時期の異なる遺構についてもいずれもが地山面を遺構検出面として確認している。

(2) 検出遺構

地山面直上において検出した遺構では、耕作に伴う素掘り溝等を除けば幾つかの小穴と2条の自然河道等を検出している。また、これら自然河道の存在との関係が窺える砂、砂質土等の堆積による落ち込みも自然河道5WNR01の兩岸付近で見られ、北壁土層断面の観察により浅い窪み程度の落ち込みを2ヶ所で確認している。

自然河道5WNR01

調査区の東端で検出した自然河道である。西肩から7.0mまでの川幅を検出している。平面形よりほぼ南北方向の流路方向が考えられるものである。検出面より底面の最深部までの深さは約1.0mである。埋土は堆積層の状況により、砂や粘土ブロックの多く混じる砂質土を基調とした上部堆積層と若干

の砂が混じる粘質土・粘土を主体とした下部堆積層に大別が可能であった。埋土中の遺物出土については、いずれも量的にはさほど多くはなく上下の堆積層ともに土師器小片がわずかに出土している。これらの土器小片から概ね古墳時代中期以降の時期が考えられる。

当遺構は当初の検出時における砂質土を主とした堆積層相から自然河道と認識していたが、周辺の地形的な条件から南北方向の流路とは考えられず、また下部の粘質土・粘土主体となる堆積状況により人工的な溝状遺構と考えておきたい。後述の自然河道5WNR02の氾濫等により影響された埋没時の在り方から自然河道と判断してしまった感は否めないが、東調査区の遺構群との関連で考えるならば集落域の西限を示すものとも考えられる遺構であると判断したい。

自然河道5WNR02

調査区のほぼ中央で検出した灰白～褐灰色粗砂、シルト層を堆積埋土とした河川状遺構である。狭小なトレンチ調査であり危険回避のために完掘には至らなかったが、深さは検出面より1.0m以上であったことが推定される。平面形状より南東～北西方向の流路と考えられ、埋土と周辺遺構面の状況からオーバーフローによる氾濫の原因となった河川とも考えられる。遺物は上面検出時に多くの土師器が出土しているが、上部より掘りこまれた小穴、土坑等の古墳時代の小遺構に帰属するものであった可能性もある。上部の堆積層中にも土器小片がわずかに見られたが、掘削面までには基本的に無遺物であった。

(3) 小結

第5調査区西地区では狭長な調査区であり、わずかな遺構のみを検出した調査であったにも関わらず、少なからず成果が得られたと考えておきたい。

調査では、明確な遺物包含層は存在しなかったものの、古墳時代中期以降に時期幅が限られた遺物の出土が確認され、東調査区検出の遺物包含層や小穴群に見る集落遺跡の存在がより明らかになったものと言える。また、自然河道5WNR01とした大溝遺構が当該時期の集落域西限を示す可能性も考えておきたい。

3. 第6調査区

南六条地区の中央付近で実施した調査地点である。現地における調査は、平成24年10月24日より調査区設定と準備を開始し、近接の第5調査区と併行して調査を進行したため、最終的には11月22日にすべての調査を終了した。

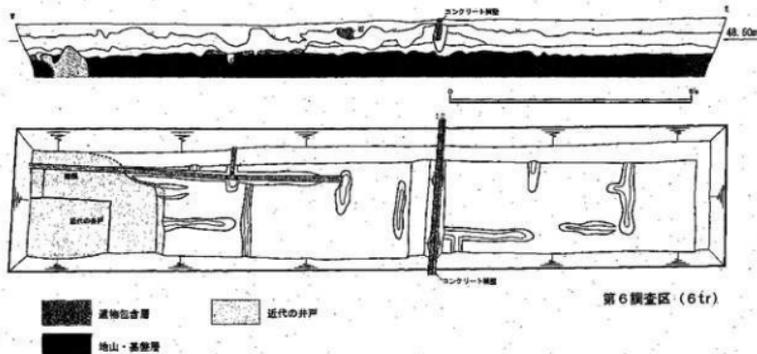
調査は狭小な調査地の東西に幅3mを基調とした長さ15mの調査区を設定して進行し、当該地点における遺構、遺物包含層の有無確認を主たる目的として実施した。

(1) 層序

ここでも調査地においてはすでに盛土造成による客土がされていたが、盛土以下では水田の旧状を留めている状況が窺えた。層厚0.3m程度の盛土以下では耕作土、床土、旧耕作土と明解な層順が見られ、直下では地山（灰黄褐色砂混じり粘質土）となっていた。

耕作土直下での地山は標高48.3m前後であり、調査区西半の一部にのみ直上に薄く堆積した層厚0.1m程度の遺物包含層（暗褐灰色粘質土）の存在、遺存が見られ、微量に古墳時代土師器等の土器片を包含していた。

(2) 検出遺構



第16図 第6調査区平面・土層図(S=1:100)

調査区全域の地山面直上で素掘り溝群、調査区西端の旧耕作土上面では近代の井戸を検出している。素掘り溝群は東西方向と南北方向の両者があり、重複関係より地山面でその多くを検出できた南北方向の小溝群が先行することがわかる。なお、東西方向の小溝は旧耕作土上面検出のものが多く、近現代に暗渠排水管を設置した時点にまでその方向性が踏襲されている。

調査区西半においてわずかに遺物包含層の遺存は見られたものの、当調査区では中世以前に時期的に遡る遺構は確認できなかった。

(3) 小結

第6調査区においても中世以降より続く耕作痕跡を確認するに留まった。しかしながら、調査区西半ではわずかに古墳時代遺物を包含する遺物包含層の遺存が見られたことから遺跡の兆候についての情報を得ることができた。

4. 第7調査区

南六条町調査区域の東端で実施した調査地点である。現地における調査は、平成24年11月22日より調査区設定と準備を開始し、近接の調査区と併行して調査を進行したため、最終的には12月10日にすべての調査を終了した。

調査は狭小な調査地の東西に幅2.5mを基調とした長さ20mの調査区を設定して進行し、当該地点における遺構、遺物包含層の有無確認を主たる目的として実施した。

(1) 層序

当調査区においても、現状では現地表面下に層厚0.3~0.4mの盛土造成による客土がされた状況であった。この下面に耕作土、床土および東半のみ残る砂・シルトの互層堆積が続き、これらの直下で層厚約0.2mの遺物包含層相当層（灰黄褐色砂混じり粘質土）を検出している。この上面では南北方向の素掘り溝群を検出している。地山面直上の堆積層となる遺物包含層相当層では微細な土器片を微量に含むものの、時期幅の特定については困難な状況であった。その下位に地山（灰褐色砂混じり砂質土・下位では褐灰色粘土）を標高49.0m前後で確認している。

(2) 遺構

調査区の両端において浅い落ち込み状遺構を検出している。

調査区西端で検出した落ち込み7S001は遺物包含層相当層を検出面とする北西～南東方向に斜行する深さ0.3m程度の浅い落ち込みであり、埋土も微砂や細砂のブロックを含む灰褐色～黄褐色砂混じり粘質土を基調としたものであるため当該地の旧地形を反映した流路肩部と考えられるものである。埋土中にほとんど遺物の出土は無く、時期は不明である。

調査区東端で検出した落ち込み7S002は地山面で検出した唯一の遺構である。東方に傾斜する地山面の上部堆積層の落ち込み底面と考えられ、底面は東方に緩やかに傾斜し、最深部で約0.4mの深さを呈する。埋土は黒褐色粘質土・粘土の単層であるが、遺物は全く出土していない。明確な遺構とは言えず、おそらく原地形を反映した地山面の下降部分となるものであろう。

(3) 小結

第7調査区においても中世以降、近現代までと続く耕作痕跡を確認するに留まり、時期的に遡る遺構や明確な遺物包含層等を確認することはできず遺跡の兆候について認めることはなかった。

5. 第8調査区

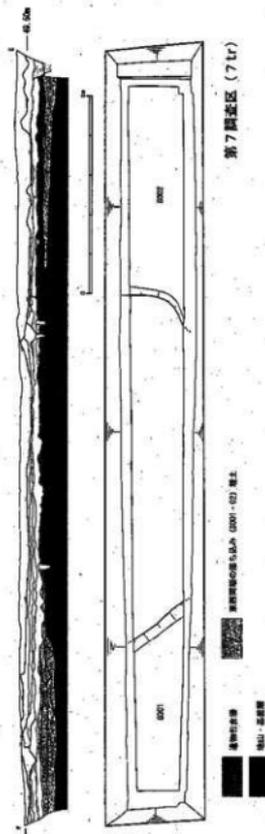
平成24年度調査時、南六条町調査区域の最東端で実施した調査地点である。現地における調査は、平成24年11月27日より調査区設定と準備を開始し、近接の調査区と併行して調査を進行したため、最終的には12月18日にすべての調査を終了した。

調査は狭小な調査地の東西に幅2mを基調とした長さ19mの調査区を設定して進行し、当該地点における遺構、遺物包含層の有無確認を主たる目的として実施した。

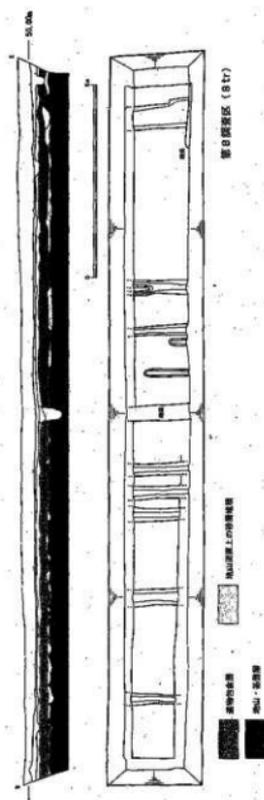
(1) 層序

現状では調査地全体に盛土造成済であり層厚0.5m前後の客土があった。これより下位では現地表面下0.7m前後までに盛土以前の耕作土、旧耕作土、床土層が続き、その下面に厚さ0.3m前後の遺物包含層相当層（灰黄褐色砂混じり粘土）を確認した。さらにその下面にて地山（灰褐色砂混じり粘質土・下位では褐～暗灰色粘土）を確認し、この上面（標高49.5m前後）で素掘り溝群を検出している。

また、調査区中央より東端にかけてのみ、地山面と上部の遺物包含層相当層の間に介在する砂質土堆積層（褐灰色微砂・砂質土）を確認しているが、堆積層上面および下面の地山面直上においても素掘



第17図 第7調査区平面・土層図
(S=1:125)



第18図 第8調査区平面・土層図
(S=1:125)

り溝が検出されているため、一時的な洪水砂の堆積と思われる。いずれの堆積層においても微細な土器片が包含されていたが、時期の特定については概ね中世以降と言わざるを得ない。

(2) 遺構

調査区全体にわたって東寄りに堆積した洪水砂層上面および地山面に南北方向の素掘り溝群を検出した他には、さらに時期の遡る遺構は確認されなかった。

(3) 小結

第8調査区においても、中世以降の素掘り溝群および近現代まで連続と続く耕作痕跡を確認するに留まり、時期的に遡る中世以前の遺構、明確な遺物包含層等を確認することはできず遺跡の兆候を認められなかった。

6. 第9調査区

現在道路の南端を画する水路に南接し、標高52.4～52.9mを測る南北に長い水田の北端に設定した調査区である。現地の小字名は川添である。東西約20m、南北約2mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成24年11月1日に開始し、同年11月15日にすべての作業を終了した。調査面積は40㎡である。

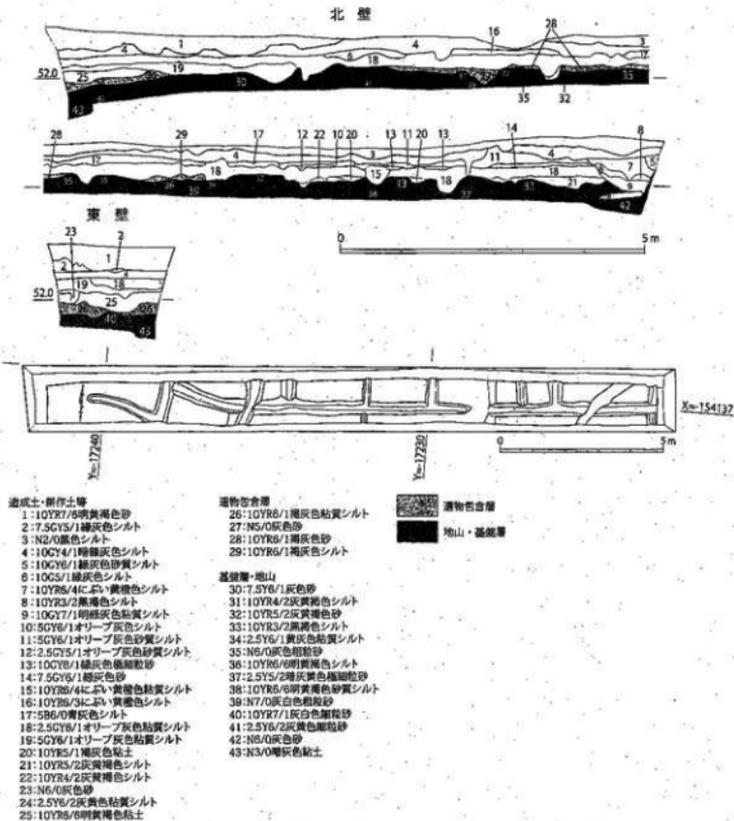
(1) 層序

調査地は道路用地買収に伴う造成地で、一部を除き明黄褐色砂ないし黒色シルトによる盛土造成(厚さ0.3～0.4m)を受ける。造成土の下は耕作土となるが、これは素掘り溝断面等の状況から暗緑灰色シルトを主体とする上層(厚さ0.2m前後)、オリブ灰色砂質シルトやにぶい黄橙色粘質シルトを主体として調査区東半にのみ分布する中層(厚さ0.1～0.3m)、オリブ灰色粘質シルトを主体とする下層(厚さ0.2～0.3m)に細分される。調査区東端では中層上面を掘り込み面として土管による暗渠の掘り方が見られることから、上層は近代以降の所産と考えられよう。耕作土を除去すると、現地表下約0.5～0.9mで褐色を主体とする砂ないしシルトからなる遺物包含層(厚さ0.2m未満)が表れるが、多くは耕作によって削平されており、耕作土直下で基盤層となる部分も多い。基盤層は調査区西半で灰色砂～粗粒砂、東半で黒褐色シルトを主体とする。この層の上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は51.7～52.3mを測る。

(2) 遺構

素掘り溝群

調査区の全面にわたって、東西2条、南北8条の素掘り溝群を検出した。幅0.2～0.6m、検出面からの深

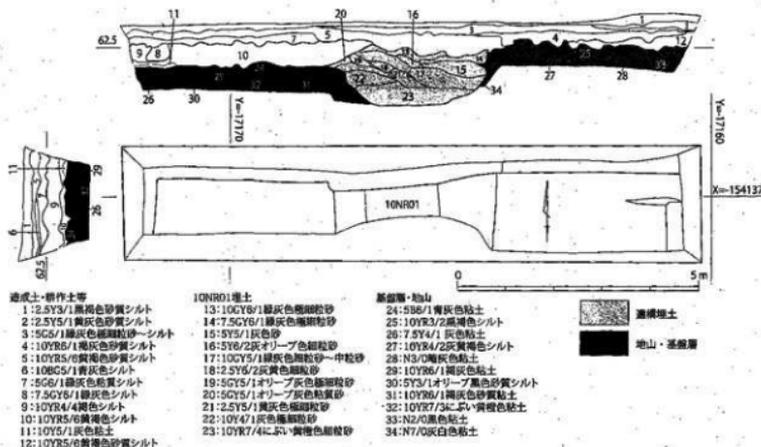


第19図 第9調査区平面(S=1:150)・土層図(S=1:80)

さ0.1~0.2mを測り、前述の耕作土中層ないし下層を埋土とする。東西方向のものについては、ほとんどの区間でほぼ正方位をとるが、調査区西端において北西方向へ屈曲する点が興味深い。

(3) 小結

本調査区では数条の素掘溝群を検出したのみで、顕著な遺跡の兆候は認められなかった。ただし、基本的に正方位をとる素掘溝群が調査区西端で北西方向へ屈曲する事実は、調査区の西方に何らかの地形の変化が存在する可能性を示唆するものと言えよう。なお、耕作土に混入して弥生土器底部片が出土した。



第20図 第10調査区平面・土層図(S=1:100)

7. 第10調査区

現在道路の南端を画する水路に南接し、標高52.8～53.1mを測る南北に長い水田の北端に設定した調査区である。現地の小字名は川添である。東西約12m、南北約2.5mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成24年11月1日に開始し、同年11月15日にすべての作業を終了した。調査面積は30㎡である。

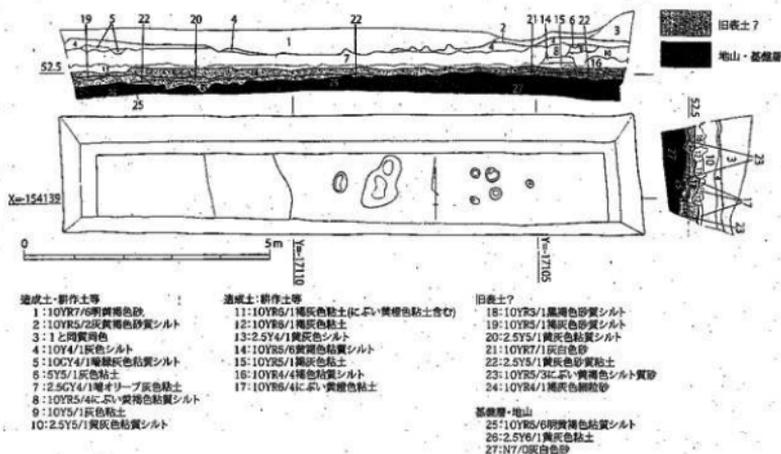
(1) 層序

調査地は道路用地買収に伴う造成地で、調査区全面が黒褐色砂質シルト(厚さ0.1～0.2m)により造成される。造成土直下は上方で褐色ないし黄褐色砂質シルト、下方で黄褐色シルト～砂質シルトを主体とする耕作土(厚さ0.2～0.4m)となり、調査区西半では耕作土が東半より深くまで及んでいる。耕作土を除去すると現地表面下0.3～0.7mで青灰色粘土ないし黒褐色シルトを主体とする基盤層にいたり、この上面で遺構を検出した。この基盤層は厚さ0.3～0.4mを測る二次堆積層で、その下層には黒色ないし灰白色の粘土層が存在して本来の地山と考えられるが、断面ではこの上面を掘り込み面とする遺構は確認されなかった。遺構検出面の標高はトレンチ西半で52.0～52.2m、東半で52.4～52.7mを測る。

(2) 遺構

自然流路10NR01

トレンチ中央付近で検出した、ほぼ南北方向に走る自然流路である。検出幅約3.4m、深さ約1.0mを測る。埋土は緑灰色極細粒砂を主体とする上層、灰色砂ないし緑灰色細粒砂～極細粒砂を主体とする中層、灰色～にぶい黄褐色の細粒砂を主体とする下層に大別される。埋土下層より古墳時代の土器のほか、平安時代ごろの軒丸瓦片が出土した。



第21図 第11調査区平面・土層図(S=1:100)

(3) 小結

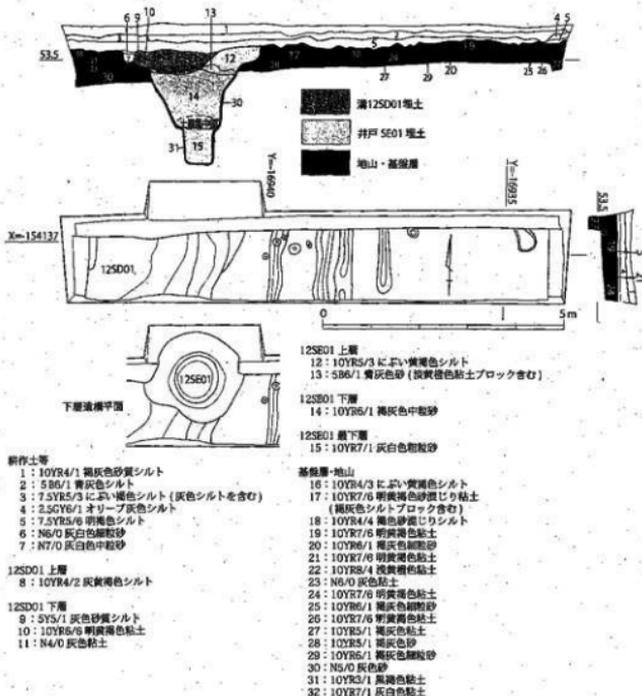
当調査区では、平安時代ごろの自然流路1条を検出した。調査地付近は旧高瀬川の流路であるという伝承がある、との教示を地元住民から受けており、調査区北方にはその名残とされる屈曲した地割が残る。また先述のとおり調査地の小字名も「川添」であり、10NR01が旧高瀬川であるかどうかはともかく、伝承と地名、発掘調査成果の三者が大筋で符合することになる。

8. 第11調査区

現在道路の南端を画する水路に南接する造成地の北端に設定した調査区である。造成前の水田面の標高は52.9～53.2mを測る。現地の小字名は武家領である。東西約12m、南北約2.5mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成24年11月16日に開始し、同年11月27日にすべての作業を終了した。調査面積は30㎡である。

(1) 層序

調査地は道路用地買収に伴う造成地である。造成土は明黄褐色砂を主体とし、調査区中央付近が浅く窪む造成以前の耕作面をフラットに整地するため厚さは0.2～0.5mと幅がある。調査区東端は、造成地への入り口となるスロープに向かって一段高くなる。造成土下方は暗オリーブ灰色粘土を主体とする耕作土で、調査区中央付近で厚さ0.3m、両端では0.6mを測る。耕作土を除去すると、現地表面下0.8mで調査区全面に黒褐色砂質シルト層が現れ、この上面で東西方向の素掘り溝1条が見られた。この層はある時期における旧表土層に当たるものと考えられる。旧表土層は下方では灰白色砂を主体とするようになり(黒褐色砂質シルト層と合わせた厚さ0.1～0.4m)、これを除去すると現地表面下0.9～1.1mで明黄褐色粘質シルトからなる地山面に至る。地山上面ではピット、落ち込み等を複数検出した。遺構検出面の標



第22図 第12調査区平面・土層図(S=1:100)

高は旧表土上面が52.5～52.6m、地山上面が52.4～52.5mを測る。

(2) 主な遺構

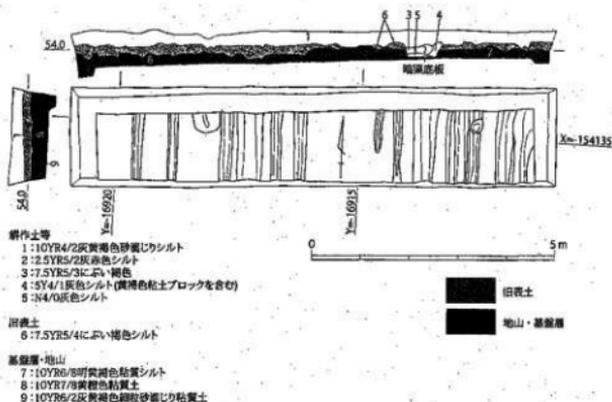
第V層上面においてビットや落ち込み等を検出した。ビットは直径0.15～0.3m・深さ0.03～0.1m程度を測るが、分布は規則的でなく、建物等を構成するような状況は認められない。

(3) 小結

本調査区ではビット数基を検出したが、建物等の遺構は確認できなかった。調査区西側では、第10調査区方向に向けて緩やかに下がる地形となる。

9. 第12調査区

現在道路の南側に接し、標高54.1～54.3mを測る畑地の北端に設定した調査区である。現地の小字名



第23図 第13調査区平面・土層図(S=1:100)

は壁ノ前である。東西10m、南北2mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成24年11月28日に開始し、同年12月11日にすべての作業を終了した。調査面積は20㎡である。

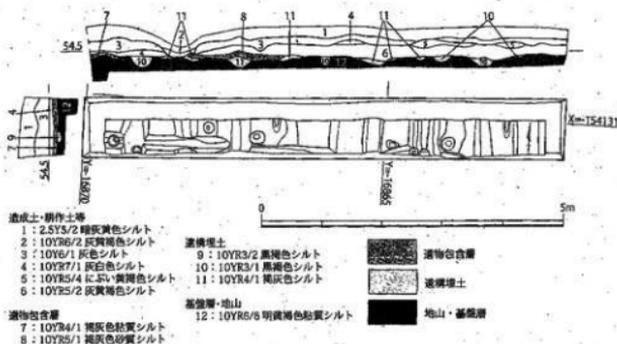
(1) 層序

調査地は畑地で、現地表面下0.3～0.5mは耕作土である。耕作土は上方では褐灰色ないし青灰色シルト、下方では明褐色シルトを主体とする。耕作土を除去するとその直下で黄褐色系のシルトないし粘土層が現れ、その上面が遺構面となることから、遺物包含層等は耕作によって既に削平されているものと考えられる。遺構検出面の標高は53.6～53.9mを測る。遺構検出面の下方では、現地表面下約1mで激しい湧水を伴う灰色砂が厚さ約1.2mにわたって続き、その下は黒褐色の粘土層となる。後述する井戸12SE01はこの層まで掘り込まれている。

(2) 遺構

溝12SD01 トレンチ西端で検出した、ほぼ南北方向に走る大溝である。検出幅約2.7m、検出面からの深さ約0.9mを測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層が灰色砂質シルト～粘土を主体とする。埋土中より14世紀代以降の土器類が出土した。

井戸12SE01 トレンチ西端付近で検出した井戸である。西側～中央部を溝12SD01に切られる。検出直径約2.0m、検出面からの深さ約2.3mを測る。遺構は検出面下方に存在する厚さ1.2mの湧水層を掘り抜き、その下の黒褐色粘土層をも0.8m程度掘り込んでいる。湧出した水を溜めておいた際の壁面崩壊を避けるため、強固な粘土層まで掘り込んだものと考えられる。粘土層上面より下方ではほぼ垂直に掘り込まれ、その直径は約1.0mである。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が褐灰色中粒砂、最下層が灰白色粗粒砂を主体とする。埋土中より14世紀代の土師器皿や土師質羽釜等が出土した。遺物は下層



第24図 第14調査区平面・土層図(S=1.80)

の下端に集中する傾向が見られた。

この他、トレンチ西半を中心としてピット9基と南北方向の素掘り溝4条を検出した。ピットは径0.04~0.2m・深さ0.05~0.2m、素掘り溝は幅0.2~0.35m・深さ0.03m前後を測る。埋土は耕作土下方と同質で、比較的新しい時期のものである。

(3) 小結

本調査区では、14世紀頃の溝と井戸、時期不明ながらピット群を確認した。切り合いは井戸が溝に切られる。調査区は現在の喜殿集落に南接する立地であることから、同集落が開かれた時期を考える上で重要な遺構となる可能性がある。

10. 第13調査区

現在道路の南側に接し、標高54.2~54.4mを測る畑地の北端に設定した調査区である。現地の小字名は堂ノ前である。東西10m、南北2mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移した。調査は平成24年11月28日に開始し、同年12月11日にすべての作業を終了した。調査面積は20㎡である。

(1) 層序

調査地の現状は畑で、現地表面下約0.3mは黄褐色砂混じりシルトからなる耕作土である。耕作土を除去すると、にぶい褐色シルト層が調査区一面に現れる。この層には遺物をほとんど含まないが、遺物包含層相当の旧表土となるものである。旧表土を除去すると現地表面下0.4~0.5mで明黄褐色シルトや黄褐色粘質土を主体とする地山に至る。旧表土上面で近世ないし近代とみられる底板を伴う暗渠を、地山上面で素掘り溝群を検出した。地山面の標高は53.9~54.1mを測る。

(2) 遺構

素掘溝群 調査区の全面にわたって13条の素掘溝群を検出した。いずれもほぼ南北方向に走り、幅0.2～0.5m、検出面からの深さ0.05～0.1mを測る。埋土は旧表土と同質同色である。

(3) 小結

本調査区では素掘溝群を検出したのみで遺物量もわずかであり、顕著な遺跡の兆候を確認することはできなかった。

11. 第14調査区

現在道路の南側に接し、標高54.7～54.8mを測る畑地の北端に設定した調査区である。現地の小字名は堂ノ前である。東西8m、南北1mの調査区を設定し、人力掘削により調査を行った。調査は平成24年12月12日に開始し、同年12月19日にすべての作業を終了した。調査面積は8㎡である。

(1) 層序

現地は道路用地買収に伴って畑地に造成を加えた箇所である。暗灰黄色シルトからなる造成土(厚さ0.2～0.3m)および灰色ないし灰黄褐色シルトを主体とする耕作土(厚さ約0.3m)を除去すると、調査区西寄りの一部に褐灰色シルトの遺物包含層(厚さ約0.1m)が遺存するのを除いては、明黄褐色粘質シルトの地山が露出する。地山上面で素掘り溝などの遺構を検出している。遺構検出面の標高は54.4m前後である。なお、耕作土上面には排水溝の断面とみられる落ち込みが見られ、この上に盛土をした現地表面においてもこの落ち込みは踏襲されている。

(2) 遺構

素掘溝群

調査区内で東西方向の素掘溝1条、南北方向の素掘溝11条を検出した。幅0.2～0.6m・深さ0.05～0.15mを測る。土師皿等が出土しており、中世以降の耕作痕跡と考えられる。

ピット群

調査区内でピット7基を検出した。埋土は黒褐色ないし褐灰色のシルトで、径0.1～0.2m・深さ0.05～0.2mを測る。分布は散発的で、建物等を形成するものではない。平面で検出したもののほかに断面でもピット(深さ・幅とも約0.15m、埋土は黒褐色シルト)を検出しており、瓦器碗が出土している。

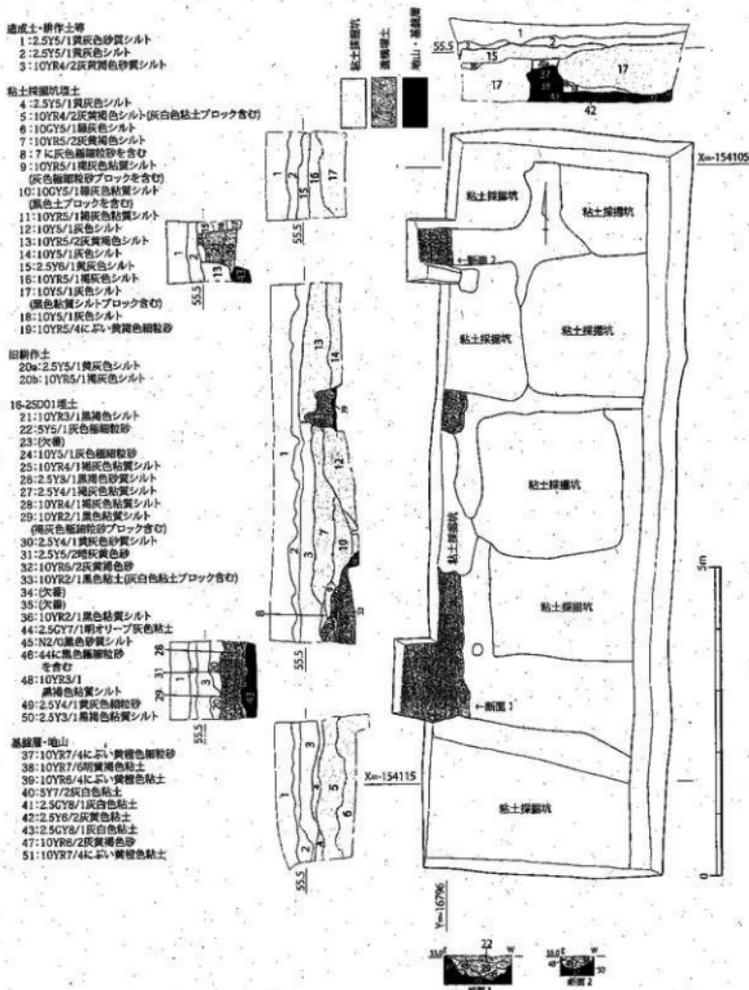
(3) 小結

本調査区では中世以降の素掘溝群とピット群を検出した。壁面で検出したピットから出土した瓦器碗は平安時代後期に遡るものである。

12. 第16-2調査区

中ツ道東側溝の確認を目的として、第16調査区の北側に設定した調査区である。現地の小字名は辻である。第16調査区と同一敷地内に東西4m・南北12mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成24年8月22日に開始し、同年9月7日にすべての作業を終了した。調査面積は48㎡である。

(1) 層序



第25図 第16-2調査区平面・土層図(S=1.80)

現地は造成地で、黄灰色砂質シルトからなる造成土(厚さ約0.2~0.4m)と黄灰色~灰黄褐色シルトからなる耕作土(厚さ0.2~0.4m)を除去すると、黄灰色~褐灰色シルトからなる旧耕作土(厚さ約0.1m)上面を掘り込み面として粘土探掘坑が多数掘削されている状況が看取される。これらを除去していくと、現地表面下0.7mでぶい黄橙色細粒砂ないし粘土を主体とする地山面に至る。この面では、多数掘削された粘土探掘坑の間隙を縫って、中ツ道東側溝とみられる溝16-2SD01を検出した。なお、地山面をなす粘土層は、下方では灰白色になる傾向が看取される。遺構検出面の標高は55.0~55.3mである。

(2) 遺構

溝16-2SD01 略南北方向に走る溝である。当調査区の北側で奈良県立橿原考古学研究所が平成24年度に実施した「中ツ道」発掘調査における「中ツ道東側溝SD01」(岡見2013)および、平成25年度に実施した「中ツ道推定地」発掘調査における「溝1」(北山2014)の南延長に相当する。西肩は調査区外となるが幅1.1m以上(底幅約0.5m)・検出面からの深さ0.4~0.6mを測る。底面の標高は調査区北側で54.8m、南側で約54.6mである。調査区内で検出した溝肩の標高は55.0m前後であるが、調査区西壁では55.2~55.3m付近までこの溝に伴う埋土の堆積が見られ、本来の遺構肩は少なくともこの高さに達するものとみられる。埋土は上層が黒褐色シルトないし灰色系の極細粒砂~粘土(21~24層)、下層は黒色ないし灰色系のシルト層(25~37層)を主体とする。溝内からは、8世紀ごろから12世紀ごろにいたる幅広い時期の遺物が出土しており、特定の時期の遺物のみを含む堆積はみられない。このことから、当地点での中ツ道東側溝の埋没時期は12世紀ごろと考えられる。なお溝16-2SD01の最深部は、X=154114.0に位置する断面1でY=16796.2、X=154106.5に位置する断面2でY=16796.1を測る。

粘土探掘坑群

本調査区でも、周辺調査区と同様に粘土探掘坑を多数検出した。一边2.3~4m以上、いずれも完掘していないが検出面からの深さは0.8m以上を測る。本調査区における粘土探掘坑群は中近世の旧耕作土上面を掘り込み面としており、近世~近代の所産と考えられよう。

(3) 小結

本調査区では、近辺の調査で確認されている推定中ツ道東側溝の延長部分を検出した。平成24・25年度に橿原考古学研究所による発掘調査で確認された推定中ツ道東側溝の中心座標と今回検出した16-2SD01の最深部座標を比較すると、

平成25年度北区1・2区間畦	X=154034.5	Y=16795.5
同 2・3区間畦	X=154038.0	Y=16795.2
同 3・4区間畦	X=154042.0	Y=16795.1
平成24年度調査区北側	(X=154044?)	Y=16794.8
同 南側	(X=154071?)	Y=16795.6
16-2tr 断面2	X=154106.5	Y=16796.1
断面1	X=154114.0	Y=16796.2

となり、平成24年度調査区北側付近を頂点としてわずかに蛇行しながら、約79.5mにわたってほぼ南北に走ることがわかる。その走向は、平成25年度北区1・2区間畦と16-2調査区断面1を単純に直線で結べば真北に対して東偏約0.5°となる。

また、今回の調査では、16-2SD01の埋土からは8世紀から12世紀までの遺物が混在して出土し、古

代の遺物のみを含む層は確認できなかった。権原考古学研究所の両調査でも、下限となる時期に差はあるものの同様の状況が報告されており、いずれの調査でも埋没直前の状況を捉えるに留まっているものと考えられる。当地付近における中ツ道東側溝の掘削時期については、現在に至るまでこれを直接的に示す知見は得られておらず、今後の課題と言えよう。埋没時期については権原考古学研究所の平成25年度北区で10世紀(北山2014)、24年度調査区で11～12世紀(岡見2013)と報告されている。平成25年度調査の報告では、24年度調査で確認された11～12世紀の遺物を含む層は側溝埋土ではなく上部堆積であると判断している(北山2014)が、16-2調査区で検出された東側溝は埋没時期が12世紀まで降ることが確実である。東側溝の埋没時期についても、場所によって埋没時期が異なる可能性も考慮しつつ、慎重な検討が必要となろう。

※中ツ道東側溝にかかる参考・引用文献については、第2章の主要参考文献を参照されたい。

Ⅲ. 平成25年度の調査

1. 第1調査区

現在道路の南側に接し、標高47.3～47.7mを測る南北に長い水田の北端に設定した調査区である。本事業に伴う調査区の中では最も西側に設定した調査区で、現地の小字名はコノセである。東西約30m、南北約1.5mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成25年11月11日に開始し、平成25年11月26日に全ての作業を終了した。調査面積は45㎡である。

(1) 層序

調査地の現状は道路用地買収に伴う造成地で、灰黄褐色シルトの造成土(厚さ約0.2～0.4m)と耕作土(厚さ約0.4m)を除去すると、灰黄色極細粒砂ないし灰黄褐色シルトを主体とする遺物包含層(厚さ0.2～0.3m)が現れる。耕作土は上方で青灰色極細粒砂、下方ではふい黄褐色細粒～極細粒砂を主体とする。包含層を除去すると調査区中央付近でふい黄褐色シルト層、その両側に褐灰色ないし灰色のシルト層が現れた。灰色系のシルトは古墳時代後期以降の落ち込み埋土、ふい黄褐色シルト層はその肩であるが、これらはいずれも厚さ0.3～0.5mで、その下方は褐灰色系の細粒砂～粗粒砂を主体として厚さ0.4～0.6mに及ぶ流路状の堆積となっており、この層でも縄文時代から古墳時代に至る時期の遺物が出土した。この砂層の下方で灰白色粘土を検出し、これを地山と判断した。上層遺構面の標高は47.0～47.1m、地山面の標高は46.2～46.3mを測る。なお、時間的制約から第Ⅴ層以下については調査区南半部のみを掘削して調査を実施した。

(2) 遺構

落ち込み1SX01 調査区東半で検出した落ち込みである。西肩を検出したのみであり、北・南・東側は調査区外へのびるが、東西幅11m以上を測る。底面は凹凸があるが、深さは最大約0.35mを測る。埋土は褐灰色極細粒砂～シルトを基調とする。古墳時代後期以降の遺物を含む。

落ち込み1SX02 調査区西半で検出した落ち込みである。東肩を検出したのみであり、北・南・西側は調査区外へのびるが、東西幅13m以上を測る。トレンチ西端では底面が東向きに高まる傾向が看取され、西肩はトレンチ西端からさほど離れていないものと考えられる。底面は凹凸があるが、深さは最大で約0.5mを測り、埋土は灰色粘土～シルトを基調とする。古墳時代後期以降の遺物を含む。

(3) 小結

当調査区では、古墳時代以降の落ち込み2基と、その下層で縄文時代～古墳時代後期の遺物を含む河川性の堆積を確認した。こうした状況から、当調査区の範囲は縄文時代から古墳時代にかけて流路内に位置し、この流路が埋没して一帯が離水・陸化したのちも低湿で不安定な地形であったことが想定される。

2. 第2調査区

現在道路の南側に接し、標高47.8～48.1mを測る南北に長い水田の北端に設定した調査区である。現地の小字名はコノセである。東西約20m、南北約1.5mの調査区を設定し、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行した。調査は平成25年11月27日に開始し、同年12月9日にすべての作業を終了した。調査面積は30㎡である。

- 造成土・耕作土
- 1: 10YR6/2 灰黄褐色シルト
 - 2: 7.5YR/1 灰色シルト
 - 3: 5B/1 黄褐色シルト
 - 4: 5B/1 黄褐色細粒砂
 - 5: 10G8/1 緑灰色シルト
 - 6: 2.5YR/1 緑灰色極細砂
 - 7a: 10G2/1 緑灰色極細砂
 - 7b: 10C7/1 明緑灰色シルト
 - 8: 7.5GY6/1 緑灰色極細砂～シルト
 - 9: 5GY6/1 オリーブ灰色極細砂～シルト
 - 10: 7.5YR/1 緑灰色極細砂
 - 11: 7.5CY6/1 緑灰色極細砂
 - 12: 5G6/1 緑灰色極細砂
 - 13: 7.5YR/8 褐色細砂～泥
 - 14: 2.5Y/8 褐色細砂～シルト
 - 15: 10YR6/4 にぶい黄褐色中粒砂
 - 16: 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂
 - 17: 10YR7/1 灰白色極細砂
 - 18: 10YR7/2 にぶい黄褐色極細砂
 - 19: 10YR5/1 褐色極細砂
 - 20: 7.5CY7/1 明緑灰色極細砂
 - 21: 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～粗粒砂
 - 22: 5GY6/1 緑灰色極細砂
 - 23: 2.5Y/8 黄褐色細砂～粗粒砂
 - 24: 10YR7/2 にぶい黄褐色細粒砂
 - 25: 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒～極細砂
 - 26: 10YR7/1 灰白色シルト
 - 27: 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂
 - 28: 7.5YR5/4 にぶい褐色細粒砂
 - 29: 10YR6/4 にぶい黄褐色細粒砂
 - 30: 10YR6/1 緑灰色極細砂
 - 31: 10YR6/2 灰黄褐色シルト
 - 32: 10YR7/1 灰白色粘土
 - 33: 5Y6/1 灰色細粒砂

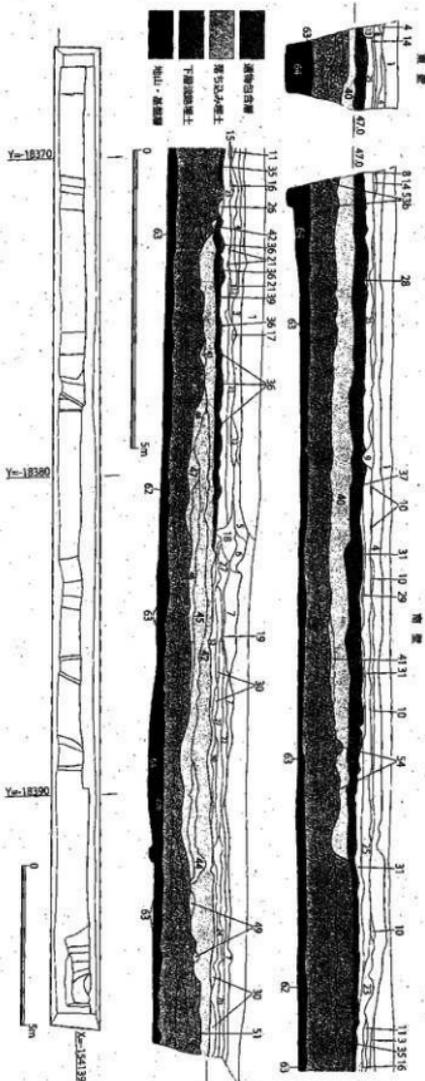
- 遺物を含む
- 34: 2.5Y/2 灰黄色極細砂
 - 35: 2.5Y/2 灰黄色極細砂～シルト
 - 36: 10YR7/4 にぶい黄褐色粗粒砂
 - 37: 5GY6/1 オリーブ灰色極細砂～シルト
 - 38: 10YR5/2 灰黄褐色シルト
 - 39: 10YR5/1 褐色シルト～粘土

- 15X01 黒土
- 40: 10YR5/1 褐色極細砂～シルト
 - 41: N5/O 灰色細粒砂

- 15X02 壤土
- 42: N5/O 灰色シルト
 - 43: 10YR6/2 灰黄褐色シルト
 - 44: 5GY6/1 オリーブ灰色粘土
 - 45: 10Y5/1 灰色粘土
 - 46: 10Y6/1 灰色シルト
 - 47: 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細粒砂
 - 48: 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～粗粒砂
 - 49: 2.5Y/1 黄褐色シルト

- 下層残積層土
- 50: 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト
 - 51: 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト
 - 52: 10YR4/1 褐色シルト
 - 53: 10YR5/1 褐色極細砂～極細砂
 - 54: 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂
 - 55: 10YR5/2 にぶい黄褐色細粒～極細砂
 - 56: 10YR6/1 褐色細粒砂
 - 57: 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂
 - 58: 7.5Y/1 灰色極細砂
 - 59: 10YR7/2 灰黄褐色中粒砂
 - 60: 2.5Y/1 黄褐色中粒砂
 - 61: 2.5Y7/2 灰黄色粗粒砂

- 基層層-粘土
- 62a: 2.5Y/6/4 にぶい黄褐色土
 - 62b: 2.5Y/8 明黄褐色粘土
 - 63: 10Y7/2 灰白色粘土
 - 64: 2.5Y4/1 黄褐色粘土



第26図 第1調査区平面(S=1:150)・土層図(S=1:80)

(1) 層序

調査地の現状は道路用地買収に伴う造成地で、一部を除きにぶい黄橙色細粒砂(厚さ最大0.4m)による造成がなされる。その下の耕作土は灰色極細粒砂ないし灰オリブ色極細粒砂を主体として厚さ0.3～0.4mを測り、これを除去すると現地表面下0.5～0.6mで黄褐色系の極細粒砂を主体とする層(厚さ0.2～0.4m)が露出する。この層は上部包含層で、下部にはさらに褐灰色ないし灰黄褐色系の細粒砂を主体とする下部包含層が厚さ0.3m程度堆積する。これらの両包含層からは埴輪片など古墳時代の遺物が多く出土した。これらを除去すると、にぶい黄橙色ないしにぶい黄褐色の細粒砂～粘土を主体とする地山面に至る。地山面上では複数の遺構を検出した。遺構検出面の標高は47.0～47.2mを測る。

(2) 遺構

大溝2SD1 調査区中央付近で検出した、北北西～南南東方向に走る断面逆台形の大溝である。検出幅約3.5m、検出面からの深さ約0.4～0.5mを測る。埋土は灰色系の極細粒砂～シルトを基調とする。後述のごとく遺物包含層から埴輪片等が多量に出土したことや、大溝より東側で遺構密度が極端に低くなることから古墳周濠の痕跡である可能性もあるが、当遺構の埋土内に含まれる遺物は僅少であり、性格を確定する材料に乏しい。

溝2SD2 調査区西端付近で検出した、北北西～南南東方向に走る断面U字形の溝である。検出幅0.5～1.0m、検出面からの深さ約0.2mを測る。埋土は下部包含層をなす褐灰色極細粒砂～シルトで、大溝2SD1より時期的に下る遺構であると判断される。

ピット2SP1 調査区西半で検出した不整形形のピットである。溝2SD2の東隣に位置し、検出面での直径約0.5m、検出面からの深さ約0.2mを測る。断面はU字形を呈する。埋土は褐灰色～黒色シルトを主体とする。

ピット2SP2 調査区西半で検出した不整形形のピットである。ピット2SP1の北東側に隣接し、検出面での直径約0.5m、検出面からの深さ約0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、中央に直径約0.1m、深さ約0.15mの杭痕状の凹みを有する。埋土は黒褐色～黒色シルトを主体とする。

ピット2SP3 調査区中央で検出した不整形形のピットである。検出長軸約0.8m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.28mを測る。断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色細粒砂を主体とする。

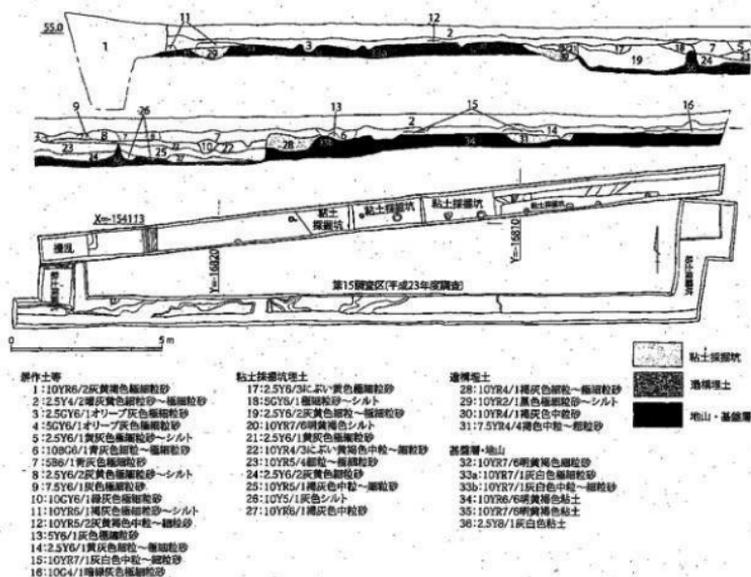
この他にも深さ0.1m程度の浅いピットや溝、土坑が見られるが、その多くはトレンチ西半(トレンチ西端から6m以内)に偏在するのが本トレンチの特徴で、特に大溝より東側には皿状断面の浅い溝とピットが見られるのみである。

(3) 小結

本調査区では、大溝1条のほかに複数の溝やピットを確認した。地山面の標高も第1調査区より0.5mほど高く、古墳周濠などを検出した第3調査区と同一の微高地上に位置するものと考えられる。平成24年度の調査を機に、第3調査区周辺に南六条ノカミ遺跡を設定したが、同遺跡の西限がこの第2調査区付近になるものと考えられる。

3. 15-2 調査区

中つ道関連遺構の遺存状況を確認するため、第15調査区調査時点で未買収であった北側および西側隣接地に設定した調査区である。調査区は東区と西区に大別され、東区は第15調査区北側の敷地内に東西22.5m・南北1mの調査区を、西区は東区の西側に隣接する標高55.8～56.0mの敷地に東西19m・南北



第28図 第15-2 E調査区平面・土層図(S-1:160)

などが見られたほか、壁面には地山上面にピット状の落ち込みも看取された。遺構検出面の標高は54.8～54.9mである。

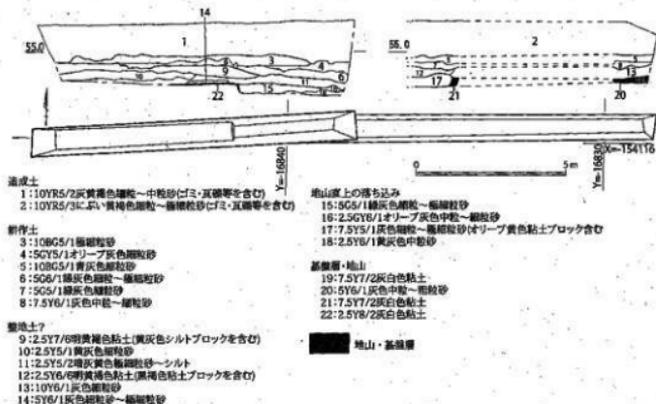
<西区>現地は近年まで土置き場等として利用されていた造成地で、黄褐色系の細粒砂を中心とした造成土によって最大1.2m覆われている。このため耕作土上面は東区の遺構検出面とほぼ同じ54.8m前後となる。青灰色極細粒砂ないし細粒砂を主体とする耕作土を除去すると、明黄褐色粘土を主体とする層が現われる。この層は一見ある時期のベースかとも考えられたが、層中に粘土やシルトのブロックを多く含むことから、耕地化に伴う整地土(厚さ0.3～0.6m)と判断した。整地土を除去すると、灰白色粘土を主体とする地山があらわれる。地山上面には灰色系の砂を埋土とする落ち込みが見られるが、遺物を含まず時期や性格等は不明である。また、これらについては危険回避のため完掘を避けており、深さは0.3m以上となる。地山面の標高は西区で53.9～54.0m、東区で54.2～54.3mで、攪乱により古い時代の遺構は完全に削平されているものと判断される。

(2) 遺構

粘土探掘坑

東区の大半で、近世以降の粘土探掘坑を複数確認した。一辺2.3～5.3m、検出面からの深さ0.4m前後を測る。なお、いくつかの粘土探掘坑を横断して東西に一列に並ぶピット列が見られるが、これらは粘土探掘坑埋土上面を検出面としており、时期的にはごく新しいものである。

素掘溝群



第29図 第15-2W調査区平面・土層図(S=1:160)

調査区西寄り、2条の素掘溝を確認した。幅20cm前後、検出面からの深さ0.03～0.07mを測る。

ビット

調査区北側断面で、幅約0.6m、深さ約0.2mのビット状の遺構を確認した。平面には表れず断面のみでの検出となったが、埋土は黒色極細粒砂～シルトで弥生土器の細片を含む。平成23年度に調査した第15調査区も含め、耕地化以前に廻りうる遺構はこれが唯一である。

落ち込み

第15調査区で検出したのと同様の落ち込みを、当調査区でも検出している。いずれも自然地形の一端を捉えたものと考えられる。

(3) 小結

第15および15-2調査区は推定される中ツ道の路面に当たるため、これに伴う遺構がわずかでも残存することを期待して調査を行ったが、結果としては近世以降の農地開発や粘土取りによってほぼ完全に削平されている状況を確認することとなった。一方で、弥生時代細片を含む遺構を壁面で確認していることから、調査地付近が削平前に遺構の分布域であったことは疑いないと言える。

IV. 出土遺物

1. 平成23年度調査区の出土遺物

(1) 第16調査区出土遺物 (1~3)

1~3はいずれも粘土探掘坑群の埋土より出土している。1は瓦器椀の口縁部片である。内外面にはヨコ方向の暗文状ミガキが明確に残る。また外面には成形時の指頭圧痕による凹凸が見られ、口縁部端面の内面側には沈線が巡らされている。これらの特徴から概ね14世紀前後の頃に帰属時期が求められる。2は近世以降の銭貨である。一部を欠くものの寛永通宝の文字が見えることから江戸期のものであることがわかる。3は土師質羽釜の鈎部分のみ残る破片である。外面のナデと内面にわずかに残る指頭圧痕のみ調整が看取される。形態的に見て屈曲口縁が付された形状と推測され、中世後期の鎌倉~室町期頃に帰属時期が求められる中世の日常雑器である。

(2) 第17調査区出土遺物 (4~19)

4~6は弥生土器の小片である。4は垂下した口縁の外端面に凹線が巡る。5は甕もしくは鉢の底部片である。摩滅のため外面調整は不明であるが、叩きの痕跡は見られない。6は鉢などの器種に付されたと思われる把手の残片である。これらの弥生土器片はいずれも遺物包含層より出土しており、器面調整や形態、手法面での特徴より弥生中期後半~末の土器であることがわかる。

7~10は奈良末~平安期の土器、瓦片である。7は黒色土器の甕である。内外面ともに黒色処理が施されたB類である。8・9の高杯脚柱部片は外面の面取り調整と長脚を特徴とするものである。10は丸瓦片である。外面縄目叩き後にナデ調整、内面には布目痕が残る小片である。

11~19は鎌倉期以降の中世土器片である。11~15は土師質羽釜である。16は土師質台付椀の脚台である。大型品となる椀に付されたものである。どれも小片であるが、薄手の器壁で精製された胎土のものや厚手で粗製のものが見られ、中世後期の室町期頃のものまでが見られる。17~19は瓦器椀、皿である。17は小型品で内外面には丁寧な暗文風ミガキが施される。18の底部小片とほぼ完存する19の小皿は見込み付近の暗文の施文状況と形態から12世紀前後の頃、平安末~鎌倉期の帰属時期が考えられる。これらの土器片は素掘り溝出土の14を除き遺物包含層より出土している。

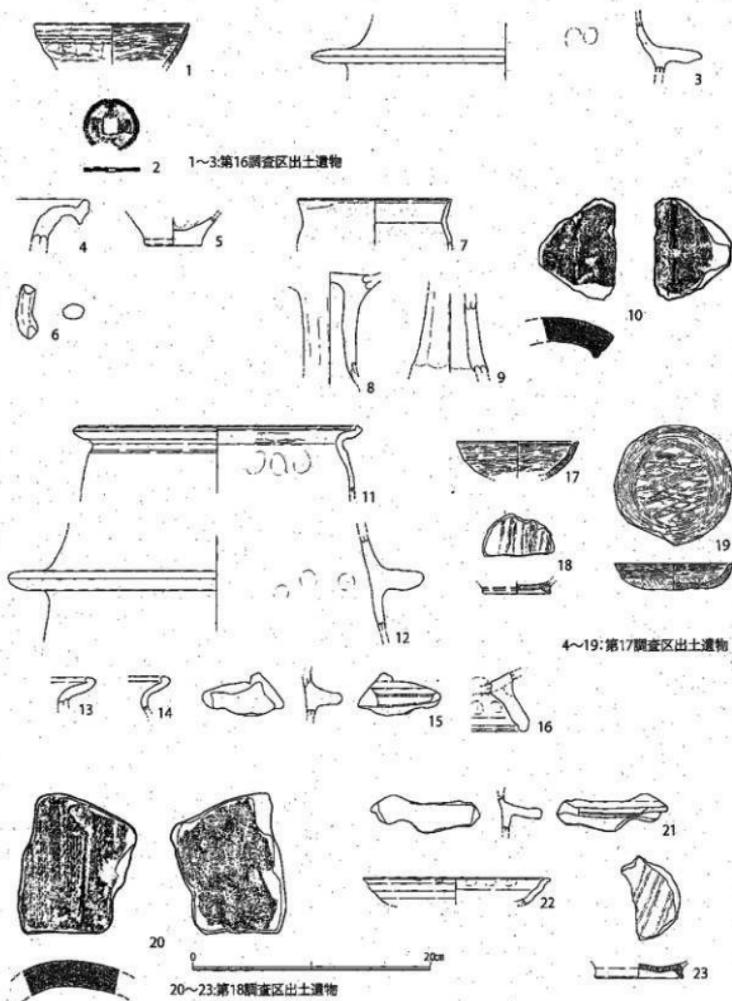
(3) 第18調査区出土遺物 (20~33)

20~23はそれぞれ調査区の各所で出土している。

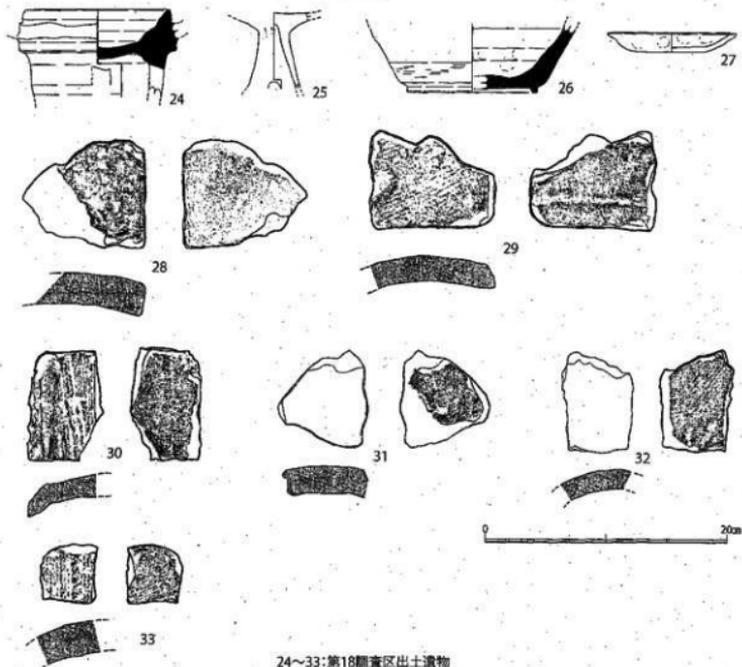
20の瓦片は溝18SD01東半下層出土の丸瓦片である。後述する溝18SD01砂層出土の28~33の瓦片と同様に外面には縄目叩き、内面に布目痕が残る。21~23の土器片はいずれも小片で、21が粘土探掘坑出土の土師質羽釜の鈎部分、22が遺構面検出時出土の精製品の土師質皿、遺構面の上部で出土した23が瓦器椀の底部である。いずれも形態と手法上の特徴から鎌倉・室町期の時期幅にある中世土器である。

24~33は溝18SD01砂層より出土している。

24は須恵器器台の杯部と脚柱の間に残る破片である。杯部内面見込み付近には受け部状の立ち上がりが付されており、通常の器台よりも細部に特徴が認められる。また、脚柱部には長方形透かし孔がわずかに残る。25は土師器高杯である。杯底部から脚柱部が残るもので脚柱の屈曲部付近には小円孔が残る。24の須恵器とともに古墳後期の土器である。26の高台をもつ須恵器壺底部と28~33の瓦片はいず



第30図 平成23年度調査区出土土器類①(S=1:4 たゞし2のみS=1:2)



24～33:第18調査区出土遺物

第31図 平成23年度調査区出土土器類②(S=1:4)

れも奈良末～平安期に帰属するものであるが、27の土師質血のみ中世に下る時期のもので、取本来は18SD01を切る素掘り溝に含まれていた遺物とみられる。28～31は平瓦片、32・33は丸瓦片であり、どれも内外面の手法状の特徴が一致するものである。

2. 平成24年度調査区の出土遺物

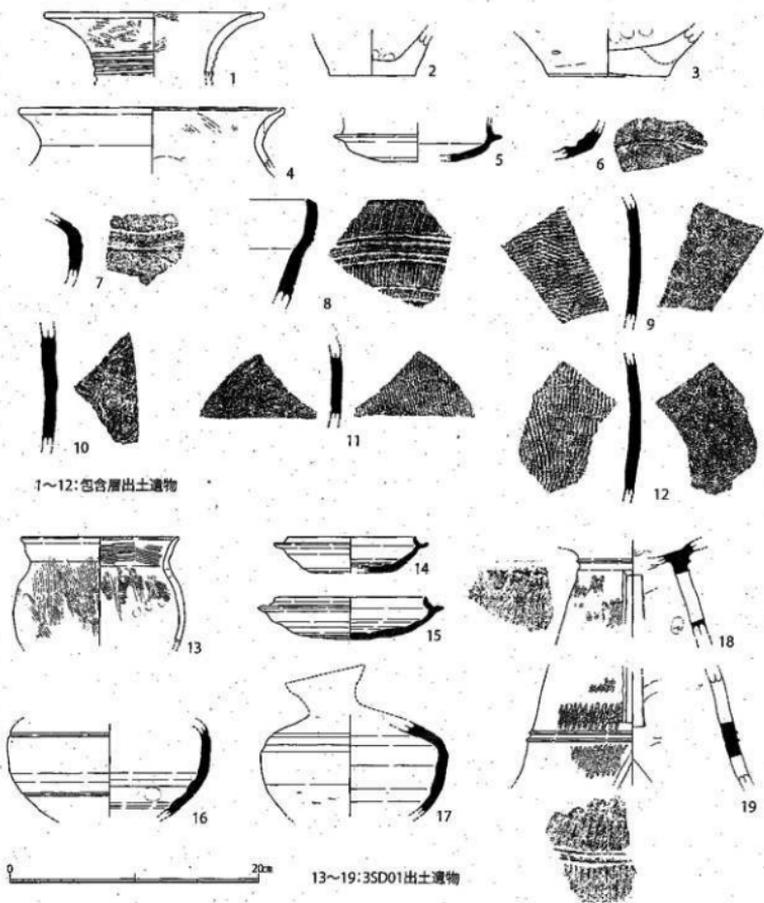
(1) 第3調査区出土遺物 (1～89)

1～12はI区遺物包含層出土の土器片である。

1は弥生前期の壺である。外面頸部には多条沈線が巡る。内外面にはヨコ・ナナム方向のミガキが施される。2・3は弥生土器の底部片である。形状より2が甕、3が壺と思われる。なお、2の外面には煤の付着が見られ、3の外面は羽圧痕が認められた。これらの土器片はともに弥生前期に帰属し、当調査区では最も時期の遡る遺物である。4は土師器甕である。頸部の屈曲が丸く鈍い広口の形態が知られる。おそらく古墳中期以降の時期の所産である。5～12は須恵器片である。いずれも小片であり、図示したのも傾き等に不安が残る。5の杯身、6～8の甕、その他は大甕の胴部片等の各器種がある。6

第1表 平成23年度調査区出土遺物観察表

番号	出土地点・層位	器種	色調	土質	地味	法量		製作率	調査	備考
						口径・直径	高さ(厚さ)			
1	第16調査区 粘土層部(前期)	瓦葺輪	N 4/ 灰	密	良好	口径 12.8cm	(3.4cm)	口縁部1/6	(内)ミガキ・土葺 (外)ミガキ・ナデ・指圧痕	
2	第16調査区 粘土層部(前期)	土葺輪	10Y 5/2 オリーブ灰	密	—	—	—	ほぼ完好	—	
3	第16調査区 粘土層部(前期)	土葺輪 羽釜	10YR 5/3 にぶい・黄褐色	密	やや密	—	—	(4.7cm)	口縁部1/6	(内)指圧痕 (外)指圧痕・ナデ (内)ヨコナデ (外)ヨコナデ
4	第17調査区 東平内寄りの 包含層	赤生土葺 輪	7.5YR 6/2 灰褐色	密	良好	—	—	(4.0cm)	口縁部片	(内)指圧痕 (外)指圧痕
5	第17調査区 東平内寄りの 包含層	赤生土葺 羽釜	7.5Y 3/2 オリーブ黒	密	良好	底径 4.5cm	(2.3cm)	底面の欠片	(外)指圧痕のため観察不明	
6	第17調査区 東平内寄りの 包含層	赤生土葺 肥子	5YR 6/0 黒	密	良好	—	—	—	断片のため観察不明	
7	第17調査区 包含層	黒色土葺 高杯	10YR 5/8 灰褐色	密	良好	口径	(3.8cm)	口縁部片	(内)指圧痕・ナデ (外)ナデ	外面酸化
8	第17調査区 東平内寄りの 包含層	土葺輪 高杯	N 8/ 灰白	密	良好	—	(8.3cm)	断片1/2	(内)指圧痕のため観察不明 (外)指圧痕・軟ナデ	
9	第17調査区 東平内寄りの 包含層	土葺輪 高杯	2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	—	(8.6cm)	断片1/2	(内)ヘラナデ (外)板ケズリによる取残り	
10	第17調査区 東平内寄りの 包含層	丸瓦	10YR 5/3 にぶい・黄褐色	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	
11	第17調査区 東平内寄りの 包含層	土葺輪 羽釜	7.5YR 2/2 黒褐色	密	良好	口径 23.5cm	(5.6cm)	口縁部1/8	(内)ヨコナデ・ナデ・指圧痕・接合痕 (外)ヨコナデ・ナデ	外面酸化
12	第17調査区 東平内寄りの 包含層	土葺輪 羽釜	10YR 5/3 にぶい・黄褐色	密	やや密	—	(8.0cm)	羽釜1/4	(内)ヨコナデ・指圧痕 (外)ヨコナデ	
13	第17調査区 包含層	土葺輪 羽釜	7.5YR 3/2 黒褐色	密	やや密	—	(2.4cm)	口縁部片	(内)指圧痕 (外)指圧痕	
14	第17調査区 東平内寄りの 包含層	土葺輪 羽釜	5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	—	(2.9cm)	口縁部片	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ	
15	第17調査区 包含層	土葺輪 羽釜	10YR 6/2 灰白	密	良好	—	(3.5cm)	羽釜片	赤生土 (内)ヨコナデ	
16	第17調査区 包含層	土葺輪 台付輪	10YR 6/4 にぶい・黄褐色	密	良好	—	(5.0cm)	断片	(内)ヨコナデ・指圧痕・接合痕 (外)ヨコナデ・工具痕・接合痕 (内)ミガキ・土葺	
17	第17調査区 東平内寄りの 包含層	瓦葺輪	N 3/ 暗灰	密	良好	口径 10.2cm	(3.0cm)	口縁部1/3	(内)指圧痕・ミガキ (外)ヨコナデ・ナデ	摩文
18	第17調査区 東平内寄りの 包含層	瓦葺輪	N 4/ 灰	密	良好	—	(1.0cm)	高台1/2	(内)ヨコナデ・ミガキ (外)ヨコナデ・ミガキ・指圧痕	瓦跡のみが指す 初層文
19	第17調査区 東平内寄りの 包含層	瓦葺輪	N 4/ 灰	密	良好	口径 9.8cm	(2.2cm)	ほぼ完好	(内)ヨコナデ・ミガキ・指圧痕 (外)黒目タタキ	
20	第18調査区 東平 18SD01下層	丸瓦	N 7/ 灰白	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	
21	第18調査区 粘土層部(前期)	土葺輪 羽釜	5YR 6/4 にぶい・暗褐色	密	良好	—	(3.1cm)	断片小片	(内)ナデ (外)ヨコナデ	
22	第18調査区 遺構跡(中)	土葺輪 高杯	7.5YR 7/4 にぶい・暗褐色	密	良好	口径 14.4cm	(2.2cm)	口縁部1/6	(内)ヨコナデ・指圧痕 (外)ヨコナデ・指圧痕・接合痕・工 具痕	
23	第18調査区 東平 上層	瓦葺輪	5Y 2/1 黒	密	良好	底径 7.4cm	(1.2cm)	高台部1/2	(内)ナデ・ミガキ (外)ナデ・ミガキ	平行の摩文
24	第18調査区 東平 18SD01上層	保護器 輪台	N 7/ 灰白	密	良好	口径 11.8cm	(7.3cm)	内層1/2	(内)タタキ・ナデ (外)ロクロケズリ・瓦葺輪	方形の透かし
25	第18調査区 18SD01上層	土葺輪 高杯	2.5YR 6/8 暗赤	密	やや密	—	(5.3cm)	断片1/2	(内)指圧痕のため観察不明 (外)ナデ	内孔
26	第18調査区 18SD01上層	瓦葺輪 高杯	2.5YR 6/8 暗赤	密	良好	底径 10.6cm	(5.7cm)	高台1/2	(内)ヨコナデ・指圧痕 (外)ナデ・ロクロケズリ・ヨコナデ	高台部に指圧 痕(ワカ)
27	第18調査区 東平 18SD01上層	土葺輪 高杯	2.5YR 6/6 暗赤	密	良好	口径 10.4cm	(1.8cm)	口縁部1/3	(内)ヨコナデ・指圧痕 (外)ヨコナデ・指圧痕	
28	第18調査区 東平 18SD01上層	平瓦	10YR 7/2 灰白	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	
29	第18調査区 東平 18SD01上層	平瓦	10YR 6/4 にぶい・暗褐色	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	
30	第18調査区 18SD01上層	平瓦	N 3/ 暗灰	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	
31	第18調査区 18SD01上層	平瓦	7.5YR 4/3 暗赤	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)指圧痕のため観察不明	
32	第18調査区 18SD01上層	丸瓦	7.5Y 2/4 にぶい・暗褐色	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)指圧痕のため観察不明	
33	第18調査区 18SD01上層	丸瓦	N 4/ 灰	密	良好	—	—	—	(内)布目圧痕 (外)黒目タタキ	



第32図 第3調査区出土土器類①(S=1:4)

の壺底部片の外面にはカキ目、工具痕等の製作時の痕跡や手法が見られる。須恵器は古墳後期、6世紀以降のものが多数を占める。

13~19は溝SD01の埋土より出土した土器片である。多くは後述する多量の埴輪片出土層位より下位で出土したものである。

13は土器器臺である。出土層位の状況から器面の遺存状態が良く内外面のハケ調整も明瞭に残る。

14・15は須恵器杯身である。小ぶりの14、やや口径の大きな15ともに形態的に6世紀後葉~末に帰属する特徴を呈する。16は須恵器壺の胴部片であるが、おそらく台付き壺であると思われる。17は口

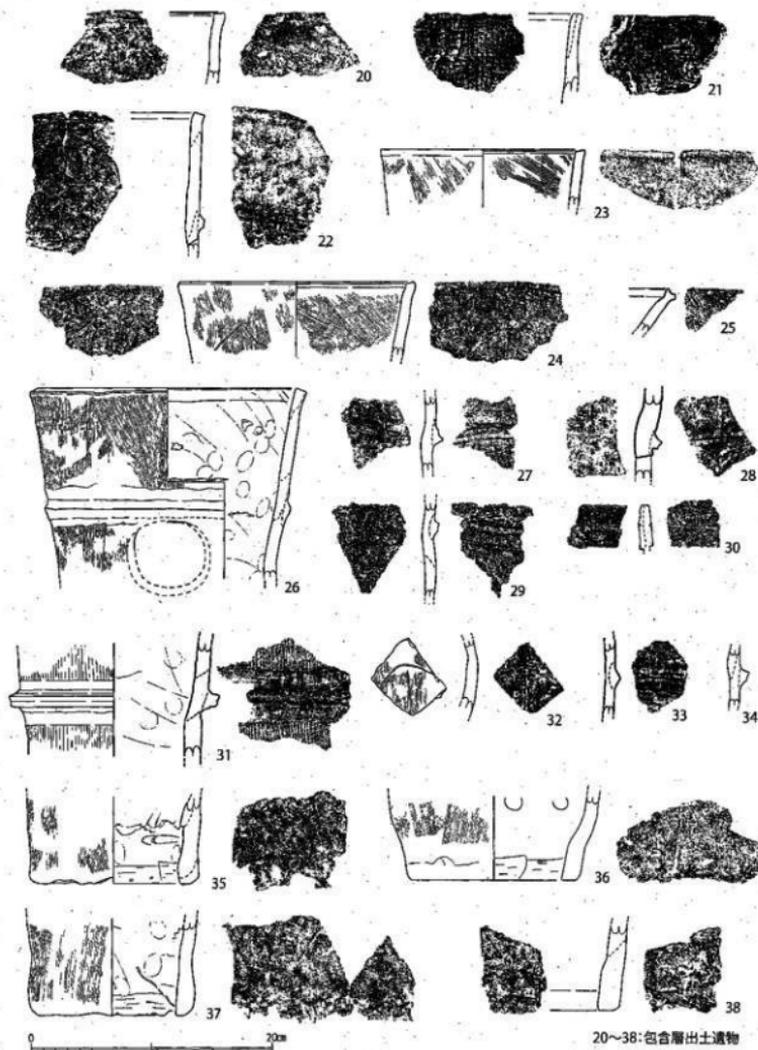
第2表 第3調査区出土土器類観察表①

番号	出土地点・層位	名称	色調	胎土	焼成	寸法		保存率	図解	備考
						口径・底径	高さ(残存高)			
1	第3調査区 I区 4層	赤生土器 甕	5YR 6/6 橙	中・中密	良好	口径17.6cm	(5.1cm)	口縁部1/6	(内)ヨココナデ・ナデ (外)ヨコ・ナメミズギキ・ヨココナデ・ ヘウ底残部	
2	第3調査区 I区 東平 第3層	土師器 甕	7.5YR 6/2 灰黒	粗	良好	底径6.8cm	(3.7cm)	底部1/2	(内)磨滅のため図解不明 (外)磨滅のため図解不明	
3	第3調査区 I区 3層	土師器 甕	2.5YR 6/5 橙	中・中密	良好	底径9.8cm	(3.9cm)	底部1/2	(内)ナデ・甕正底 (外)磨滅のため図解不明	
4	第3調査区 I区 東平 第3層 下層→第4層	土師器 甕	10YR 7/3 灰	密	良好	口径21.2cm	(5.3cm)	口縁部1/8	(内)ヨココナデ・ケズリ・ハケ (外)ヨココナデ	
5	第3調査区 I区 東平 第3層 上層→第4層	須恵器 杯倉	5YR 5/1 黄灰	密	良好	—	(3.1cm)	底部・片断	(内)ロクロナデ・ロクロケズリ (外)ロクロナデ	
6	第3調査区 I区 西平 第3層	須恵器 甕	7.5YR 7/1 白 伊南3ノ 灰	密	良好	—	(2.8cm)	底縁片	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・ロクロケズリ・工 具底・灰陶器・カキ石	
7	第3調査区 I区 西平 第3層 上層→第4層	須恵器 甕	N 7 / 灰白	密	良好	—	(4.3cm)	肩部片	(内)ロクロナデ	
8	第3調査区 I区 東平 第3層	須恵器 甕	5YR 6/1 黄灰	密	良好	—	(7.9cm)	口縁部片	(内)ロクロナデ・磨滅正底・ヘウ底 ・伊南1七層 (外)ロクロナデ	
9	第3調査区 I区 西平 第4層	須恵器 甕	N / S / 灰	密	良好	—	—	体部片	(内) 須恵器ナデ (外) タタキ	
10	第3調査区 I区 西平→西平	須恵器 甕	N 7 / 灰白	密	良好	—	—	体部片	(内) 須恵器ナデ (外) タタキ・灰陶器	
11	第3調査区 I区 3層	須恵器 甕	(内) 5Y 6/1 黄灰 (外) 5Y 5/2 オリーブ黒	密	良好	—	—	体部片	(内) 須恵器ナデ (外) タタキ・灰陶器	
12	第3調査区 I区 3層	須恵器 甕	(内) 5Y 6/1 黄灰 (外) 5Y 5/2 オリーブ黒	密	良好	—	—	体部片	(内) 須恵器ナデ (外) タタキ・灰陶器	
13	第3調査区 I区 3SD01	土師器 甕	2.5YR 6/5 橙	中・中密	良好	口径12.4cm	(8.8cm)	口縁部1/4	(内) 磨かい・コソウ・備注遺・工具 正底 (外) 磨かい・コソウ・ヨココナデ・磨 かい・タテウ・ナメミズギ	
14	第3調査区 I区 3SD01 西平(粘土)	須恵器 杯倉	N 5 / 灰	密	良好	口径10.2cm	(2.9cm)	体部1/4	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・ロクロケズリ	
15	第3調査区 I区 3SD01 西平(粘土)	須恵器 杯倉	N 8 / 灰	密	良好	口径12.2cm	(3.5cm)	体部1/3	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・ロクロケズリ	
16	第3調査区 I区 3SD01	平瓶	7.5YR 8/1 灰黒	密	良好	体部径8.0cm	(7.5cm)	—	(内)ロクロナデ (外)ロクロケズリ・工具底	17と同一個体か
17	第3調査区 I区 3SD01 西平(粘土)	平瓶	2.5YR 8/6 黄	中・中密	良好	肩径14.7cm 頸部径6.7cm	(8.2cm)	体部1/3	(内)ヨココナデ・ロクロケズリ(外)・灰 底 (外)ヨココナデ	
18	第3調査区 I区 西平 第4層	須恵器 甕	5YR 5/1 灰	密	良好	—	(7.8cm)	体部片	(内)ロクロナデ・甕正底・備注遺・ 正底・灰陶器 (外)ナデ・破片文(18年2本)	
19	第3調査区 I区 3SD01 高松土	須恵器 甕	5YR 5/2 灰	密	良好	—	(9.1cm)	体部片	(内)ロクロナデ・甕正底・備注遺 (外)ロクロナデ・破片文(18年3本)	

縁下位の頸部付近を付した痕跡に偏りが見える点より須恵器平瓶であることがわかる。胴部の上位に丸みをもつ形態的特徴が前述の16と類似する。18・19はともに破片であるが同一個体となる須恵器器台の脚部である。外面の柳描き波状文施文と長方形、三角形の透かし孔が特徴的である。これらの溝埋土出土土器には若干の埴輪片が同一層で共存するが、数量的には上部に堆積した遺物包含層より出土した埴輪片の方が多量となっていた。

20～55はI区の溝SD01の上部堆積層を成す遺物包含層より出土した埴輪片である。埴輪では円筒埴輪と朝顔形埴輪の両者が見られるが、その他器形埴輪等の形象埴輪の出土は見られていない。焼成については土師質、須恵質の両者が認められる。

20～24・26・45・47・49・50は口縁部付近の破片である。いずれも外面には一次調整のタテハケのみで内面側の調整はハケもしくはナデ調整等のみの簡略化した手法による。24の外面には線刻、上位



第33図 第3調査区出土埴輪類①(S=1:4)

の突帯が残る26には対向位置に穿たれた円孔が残る。35~38・40・53・55は底部および基底より上位が残る円筒埴輪である。これらも外面には一次調整のタテハケのみで内面はナデといった簡素な手法

第3表 第3調査区出土埴輪類観察表①

番号	出土地点・層位	器種	色調	粘土	焼成	口径	高さ	高さ(保存部)	外面調整	内面調整	底面調整	透かし彫刻・位置	残存率	備考
20	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	7.5YR 6/6 橙	密	良好	—	—	(5.4cm)	タテハケ・ヨコナデ 調整痕	ナメハケ	—	—	口縁部 小片	ヘラ記号
21	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	7.5YR 7/0 橙	密	良好	—	—	(8.9cm)	タテハケ・ヨコナデ	ナメハケ・ヨコナデ	—	—	口縁部	
22	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 6/6 橙	密	良好	—	—	(11.3cm)	タテハケ・ヨコナデ	タテハケ・調整痕	—	円形透かし	口縁部 一休部	
23	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 5/6 明赤黄	密	良好	—	—	(4.7cm)	タテハケ・ヨコナデ	ナメハケ・ヨコナデ	—	—	口縁部 1/4	
24	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 5/8 橙	密	良好	19.2cm	—	(8.2cm)	タテハケ・ヨコナデ	ナメハケ・ヨコナデ	—	—	口縁部 1/5	ヘラ記号
25	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	—	—	(3.6cm)	タテハケ・ナメハケ	ナデ	—	—	口縁部 小片	
26	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 5/8 橙	密	良好	22.8cm	—	(15.9cm)	タテハケ・ヨコナデ 調整痕	ヨコナデ・ナデ 調整痕・接合痕	—	円形透かし	口縁部 1/4	
27	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 5/8 明赤黄	密	良好	—	—	(6.2cm)	タテハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ 調整痕	—	円形透かし	縁部小片	
28	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	2.5YR 5/8 明赤黄	密	良好	—	—	(7.0cm)	タテハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ 調整痕	—	円形透かし	縁部片	ヘラ記号 透かし取工 具痕
29	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 6/8 橙	密	良好	—	—	(7.7cm)	タテハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ タテハケ・接合痕	—	円形透かし	縁部片	
30	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	10YR 7/2 にじみ黄 黄	密	良好	—	—	(3.7cm)	縁部調整用ハケ ナデ	縁部調整用ハケ ナデ	—	—	縁部片	天地不明 ヘラ記号
31	第3調査区 1区 第4層	円筒埴輪	5YR 6/8 橙	密	良好	—	—	(9.4cm)	タテハケ・ヨコナデ 調整痕	ナデ・調整痕 接合痕	—	—	縁部 一突部 1/6	
32	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	7.5YR 7/8 橙	密	良好	—	—	(5.3cm)	ハケ	ナデ・調整痕	—	—	縁部片	天地不明 ヘラ記号
33	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 6/6 橙	密	良好	—	—	(8.2cm)	タテハケ・ヨコナデ	ナデ	—	—	縁部片	
34	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	7.5YR 8/4 浅黄橙	密	良好	—	—	(4.5cm)	タテハケ・ヨコナデ	ナデ・調整痕	—	—	縁部部 小片	
35	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 6/8 橙	密	良好	12.7cm	—	(7.2cm)	タテハケ	ヨコナデ・調整痕 接合痕・工具痕	ケズリ	—	基底部 1/4	
36	第3調査区 1区 第4層	円筒埴輪	2.5YR 5/8 明赤黄	密	良好	—	—	(7.0cm)	タテハケ・ナデ 調整痕	ナデ・調整痕	ケズリ	—	基底部 1/4	
37	第3調査区 1区 第3層下層～第4層	円筒埴輪	5YR 6/8 橙	密	良好	12.0cm	—	(7.9cm)	タテハケ・調整痕	ナデ・調整痕 接合痕	ケズリ 基底部 調整用ハケ	—	基底部 1/4	
38	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 6/8 橙	密	良好	—	—	(7.2cm)	タテハケ・工具痕	ナデ・調整痕 接合痕	ケズリ	—	基底部 小片	

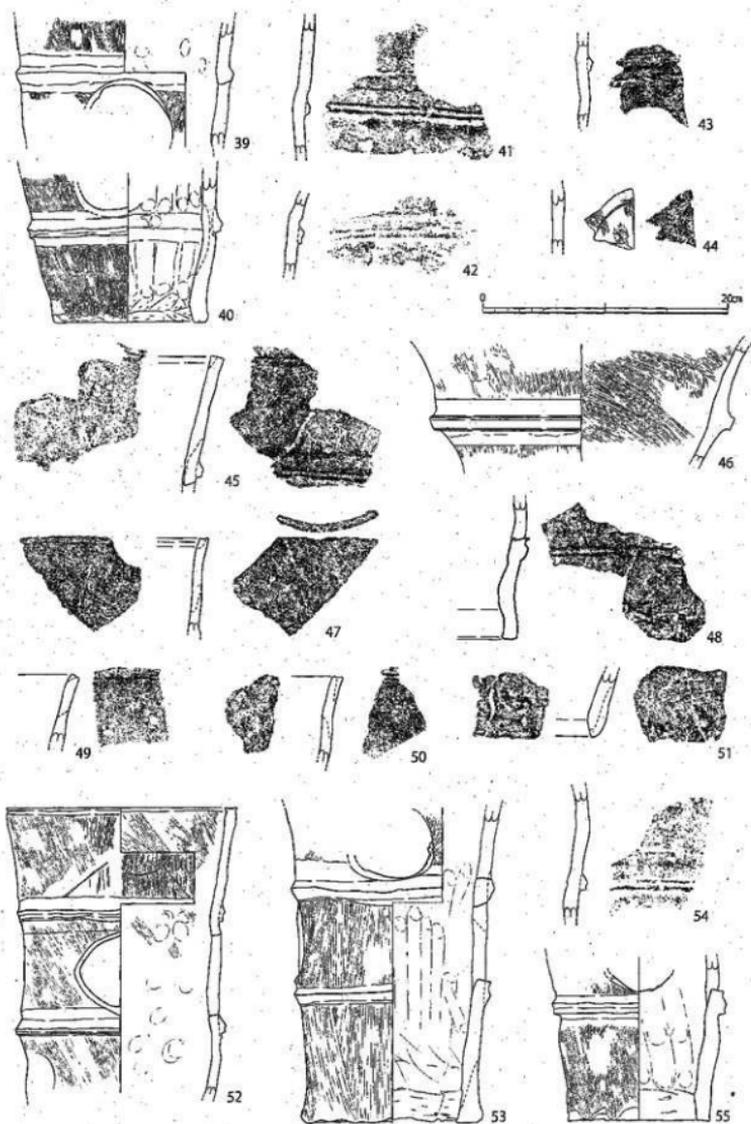
が通有となるが、基底面の内面端部付近のヨコ方向ケズリ調整のみに特徴を示しており、38・48・51のナデによる基底内面調整のみのものを除けば、出土埴輪基底部のほとんど多くに見られることが注視される。

これら埴輪類の断片から総合的に見た特性については円筒埴輪のみにては以下のように整理することができる。①基底部径13.0cm前後で口径が20cm前後上方に開く形態を呈し、高さが40cm程度の小型品が主体を成す。②形態としては3条突帯で4段構成により、2段目および3段目には円孔を対向位置に穿つとともに段ごとに交差位置に配置する。③口縁部付近となる4段目には一方方向のみに線刻を施すものもある。④外面は一次調整のタテハケ、内面はナデ調整が主体となる簡素な手法だが、基底内面下位にのみヨコ方向ケズリによる調整手法が見られる。⑤突帯断面形状は不定形かつ不統一である。

なお、数量的に少ない朝顔形埴輪については言及できないが、基底部内面付近のケズリ調整が認められない基底部片との相関性も想定される点のみ指摘しておく。最後にこれら埴輪類の時期については、概ね6世紀代と考えるが、共存する須恵器の時期から6世紀後半に近い時期を考えたい。

56～59はⅣ・Ⅴ区遺物包含層出土の土器片である。

56は弥生中期頃の壺底部片である。底部付近の外面にはハケ、ミガキが残り、内面には指頭圧痕が見える。57は高杯小片である。外端面の凹線文より弥生中期後半～未のものと思われる。この2点の土器は



39~42, 52~55: 包含層 43~51: 3SD01西翼

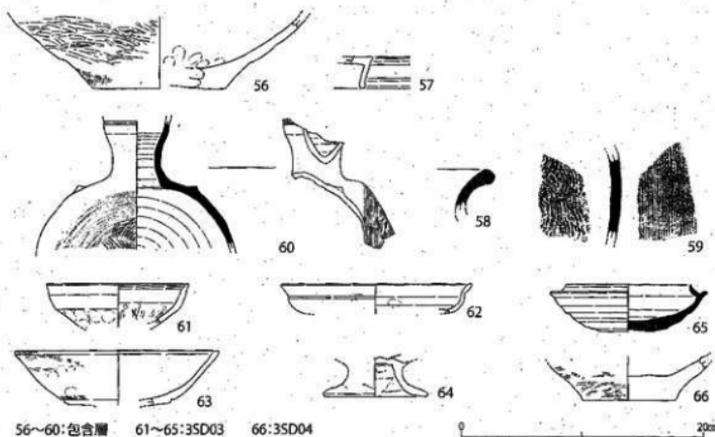
第34图 第3調査区出土埴輪類②(S=1:4)

第4表 第3調査区出土埴輪類観察表②

番号	出土地点・層位	器種	色調	胎土	成型	口徑	底径	最高部 径(cm)	外周形状	内径形状	底面形状	高かしの形 態・寸法	破片率	備考
39	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 7/6 明赤褐色	密	良好	-	-	(10.4cm)	タテハ・コナデ 断面直	ナデ・胎直 接合痕	-	円形透かし	体部1/2	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
40	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 7/6 黄	密	良好	-	12.2cm	(12.3cm)	タテハ・コナデ	コナデ・ナデ 接合痕	ケズリ 基部の須恵器 土層	円形透かし	底面ほぼ 完存	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
41	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	2.5YR 6/6 黄	密	良好	-	-	(10.8cm)	タテハ・コナデ	断面のため 観察不能	-	円形透かし	体部片	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
42	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	5YR 6/8 黄	密	良好	-	-	(5.9cm)	タテハ・コナデ	ナデ・胎直 接合痕	-	円形透かし	体部片	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
43	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	10YR 7/2 にぶい黄褐色	密	良好	-	-	(6.6cm)	タテハ・コナデ 工具痕	ナデ・コナデ	-	-	口縁部小 片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
44	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	5YR 6/6 黄	密	良好	-	-	(4.9cm)	タテハ	ナデ・胎直 接合痕	-	-	体部小片	天端不明 へつ記号
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
45	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	5YR 6/6 黄	密	良好	-	-	(10.7cm)	タテハ・コナデ	タテハ・コナデ ナデ・胎直 接合痕	-	円形透かし	口縁部片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
46	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	朝顔型埴輪	5YR 7/5 黄	密	良好	-	-	(9.3cm)	タテハ・コナデ	ナデ・コナデ 胎直・接合痕	-	-	突等部1/4	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
47	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	7.5YR 7/6 黄	密	良好	-	-	(7.9cm)	タテハ・コナデ	コナデ・コナデ	-	-	口縁部片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
48	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	7.5YR 7/4 にぶい黄	密	良好	-	-	(11.2cm)	タテハ・コナデ 工具痕	ナデ・胎直 接合痕	コナデ	円形透かし	底面片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
49	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	5YR 6/4 にぶい黄	密	良好	-	-	(5.6cm)	タテハ・コナデ	ナデ・胎直 接合痕	-	-	口縁部小 片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
50	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	5YR 5/4 にぶい赤褐色	密	良好	-	-	(7.1cm)	タテハ・コナデ	タテハ・コナ デ	-	-	口縁部小 片	へつ記号
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
51	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)	円筒埴輪	7.5YR 7/6 黄	密	良好	-	-	(5.2cm)	タテハ・工具痕	ナデ・接合痕	ケズリ	-	底面小片	
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
	第3調査区 1区 35D01西側埋土(粘土)													
52	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層	円筒埴輪	5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	18.8cm	-	(23.5cm)	タテハ・コナデ 胎直	ナデ・コナデ 胎直	-	円形透かし	口縁部1/4	へつ記号
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
53	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層	円筒埴輪	5YR 7/8 黄	密	良好	-	14.8cm	(25.7cm)	タテハ・コナデ	タテハ・コナ デ 接合痕	-	-	-	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
54	第3調査区 1区 第3層	円筒埴輪	2.5YR 6/6 黄	密	良好	-	-	(10.2cm)	タテハ・コナデ	断面のため 観察不能	-	円形透かし	体部片	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													
55	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層	円筒埴輪	7.5YR 6/8 黄	密	良好	-	11.6cm	(13.3cm)	タテハ・コナデ	タテハ・コナ デ 胎直	ケズリ	円形透かし	底面1/3	
	第3調査区 1区 第3層 下半～第4層													
	第3調査区 1区 第3層													

後述の溝SD04の検出面上面より出土している。60は須恵器提瓶の破片である。胴部のカキ目調整と形骸化した吊手痕跡により同種の器種でも後出する要素が見える。58・59も小片である。甕の口縁断片と胴部片である。これらの須恵器も6世紀以降のものである。

61～64はIV区溝SD03埋土より出土した土器片である。溝埋土でも上位の堆積層より出土している。



第35図 第3調査区出土土器類②(S=1:4)

61~64は土師器片である。61の杯は小型品であり、ナデ調整のみ施される。62の皿は形態的に見ても上位の堆積層からの混入と思われる中世土器である。63の高杯と64の台付鉢脚部片はいずれも単純なナデ調整等による仕上げが見られるものであり、胎土も粗製品である。これらの土器では、62の土師質皿を除けば、他は概ね7世紀前後の土器である。

66は調査区東端のV区溝SD04埋土中より出土した弥生土器の壺底部片である。外面にのみヨコ・ナメ方向のミガキ調整が残る。形態的特徴から弥生中期前半頃の時期が考えられる。

67~86は調査区各小区の遺物包含層より出土した埴輪片である。

67~76は朝顔形埴輪の口縁部~壺部上半の各部小片である。67~70の口縁端面では沈線を巡らせて凹面を成し、同様の断面形を呈する。内外面のハケ目調整も共通しており、同様の規格が認められる。朝顔形埴輪の頸部以下で壺部相当箇所が残る75・76等の破片ではわずかに膨らみが残る程度であり、著しく形骸化した形態であることが特徴的である。

77は衣笠形埴輪と対を成す立ち飾りの破片である。内外面共にナデ調整し、片面にのみ装飾的に線刻を施す。当調査区での器財埴輪の出土はこの1点のみ認められた。

78~80は円筒埴輪の各部残片である。内外面にハケの残る78の口縁部片を除き、他は外面タテハケと内面ナデによる簡素な調整である。

81~86は基底部片である。基底部から2段目までが残る82のみに1区出土円筒埴輪と同様な基底内面側のヨコ方向ケズリが見られる。その他の基底部片の内面にはこの手法は見られず、内面はナデ調整のみで断面形状にも異なった様相が認められる。

87~89はIV区溝SD03埋土より出土した埴輪片である。どれも朝顔形埴輪となる破片である。87の口縁部では内外面のハケ調整が顕著である。88・89では一次口縁内面にはナデ、二次口縁の内面のみにハケ目調整が施されている。

これら埴輪類においても、I区出土埴輪と同様の様相が窺え、概ね6世紀後半頃の時期が考えられるが、前後関係については不明である。

第5表 第3調査区出土土器類観察表②

番号	出土地点・層位	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整	備考
						口径・底径	高さ(残存高)			
56	第3調査区 IV-V区 第3層下部-第4層	弥生土器 甕	7.5YR 7/6 黄	密	良好	口径11.0cm 底径8.9cm	(5.9cm)	底縁1/3	(内)ナデ・指圧痕 (外)ナデ・指圧痕・工具痕・ケズリ	
57	第3調査区 IV-V区 第3層下部-第4層	弥生土器 高杯	2.5YR 5/6 黄赤褐色	密	良好	—	(2.8cm)	底縁ほぼ完全 (外)口縁	(内)磨滅のため調整不明	
58	第3調査区 IV-V区 第3層下部-第4層	須恵系 甕	5YR 5/1 黄灰	密	良好	—	—	口縁部片	(内)ヨコナデ	
59	第3調査区 IV-V区 第3層下部-第4層	須恵系 甕	7.5YR 6/1 灰	密	良好	—	—	体部片	(内)花鳥類	
60	第3調査区 IV-V区 第2-3層	須恵系 甕	(内)N 7/0 灰白	密	良好	—	(10.7cm)	底部1/8 底縁1/3	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・タタキ後縁かいりキ目	内外面に調整
61	第3調査区 IV区 3SD03 埋土	土師器 杯	5YR 5/6 黄	密	良好	口径11.7cm	3.6cm	杯底片	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・ナデ	
62	第3調査区 IV区 3SD03 埋土	土師器 甕	10YR 8/4 に赤い黄褐色	密	良好	口径15.6cm	2.5cm	口縁部片	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・ナデ	
63	第3調査区 IV区 3SD03 埋土	土師器 高杯	5YR 6/5 黄	密	良好	口径16.6cm	(4.6cm)	口縁部1/8	(内)ナデ (外)ナデ・指圧痕・接合痕・ハケ	
64	第3調査区 IV区 4層 3SD01 埋土	土師器 台付杯	7.5YR 5/3 に赤い黄	密	良好	口径8.9cm	3.3cm	高台2/3	(内)ヨコナデ・ナデ・指圧痕・接合痕 (外)ヨコナデ・ナデ・指圧痕・接合痕	
65	第3調査区 IV区 3SD03 埋土	須恵系 杯	2.5YR 5/1 オリーブ灰	密	良好	口径10.2cm	3.8cm	体部1/2	(内)ロクロナデ・指圧痕 (外)ロクロナデ・ロケズリ・指圧痕	
66	第3調査区 V区 3SD04	弥生土器 甕	2.5YR 5/6 黄赤褐色	やや密	良好	口径7.6cm	(3.6cm)	底部のみ残存	(内)磨滅のため調整不明 (外)ナデ・ミガキ	

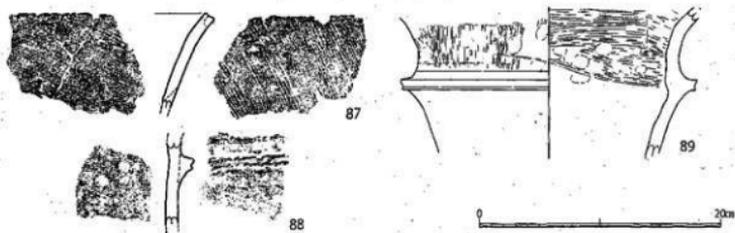
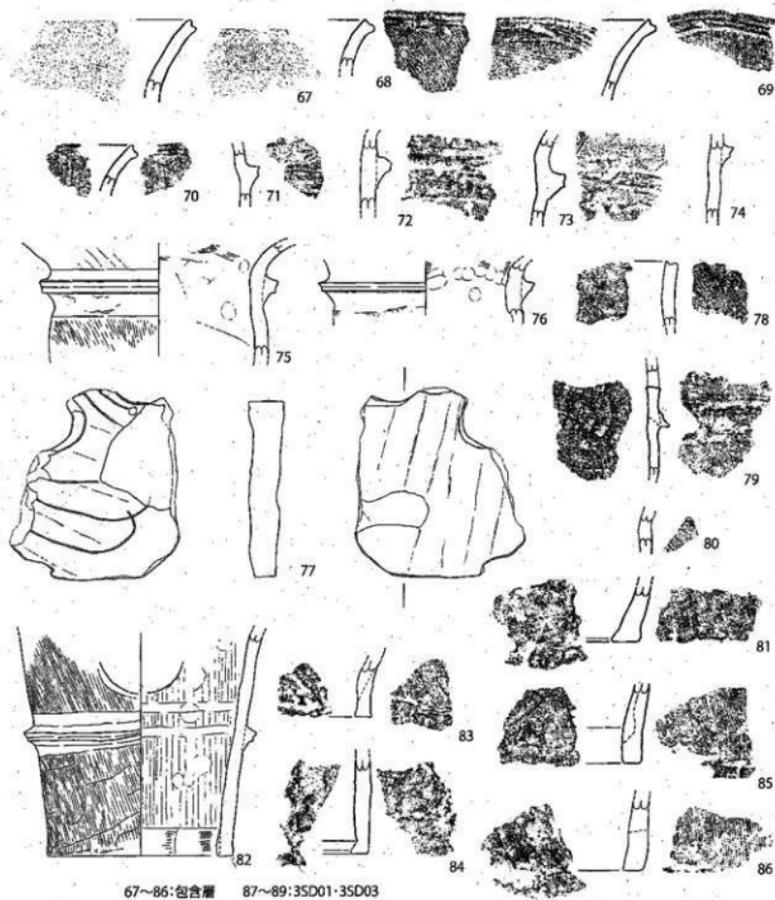
(2) 第5調査区出土遺物 (90~118)

90~112は第5調査区西地区(5Wトレンチ)出土の土器である。出土した土器類では須恵器は小片程度しか出土しておらず、大半が土師器で占められている。

90は小型の甕である。内外面の調整は磨滅のため不明であるが胴部は丸みをもった球形胴部の甕である。91はやや大型の甕である。外面は調整不明であるが、内面には頸部付近の指頭圧痕とケズリ調整痕が明瞭に残る。92の高杯脚柱部片では外面にタテヘラナデ、内面に杯部接合時に生じるシボリ痕が見られる。90~92はいずれも調査区中央遺構面検出、確認時に出土している。

93は甕の口縁部片である。やや厚手で粗製の胎土で製作されている。形態的には頸部の屈曲が明瞭な点の特徴となる。94の高杯片では杯底部と口縁の間に沈線を巡らし、稜を成す。脚柱との接合は単純な貼付けのみである。調整は磨滅のため不明。95の高杯脚柱部は脚柱と脚座部の間の屈曲が明瞭である。内面には製作時の工具痕が見える。93~95は自然河道NR01埋土下部より出土。

96は口縁端部の内面肥厚を特徴とする布留式系の小型甕である。97は小片であるため形状は明らかではないが、おそらく壺の頸部であると思われる。98は口縁がやや外反気味であるが、外面にはタテハケ後のヨコハケが施され、内面にはヘラケズリ調整が見える。99~112は高杯の杯部、脚部等の破片である。99~104の杯部片では100・103のような鈍い稜が特徴的な高杯も含まれるものの、掬型杯部の

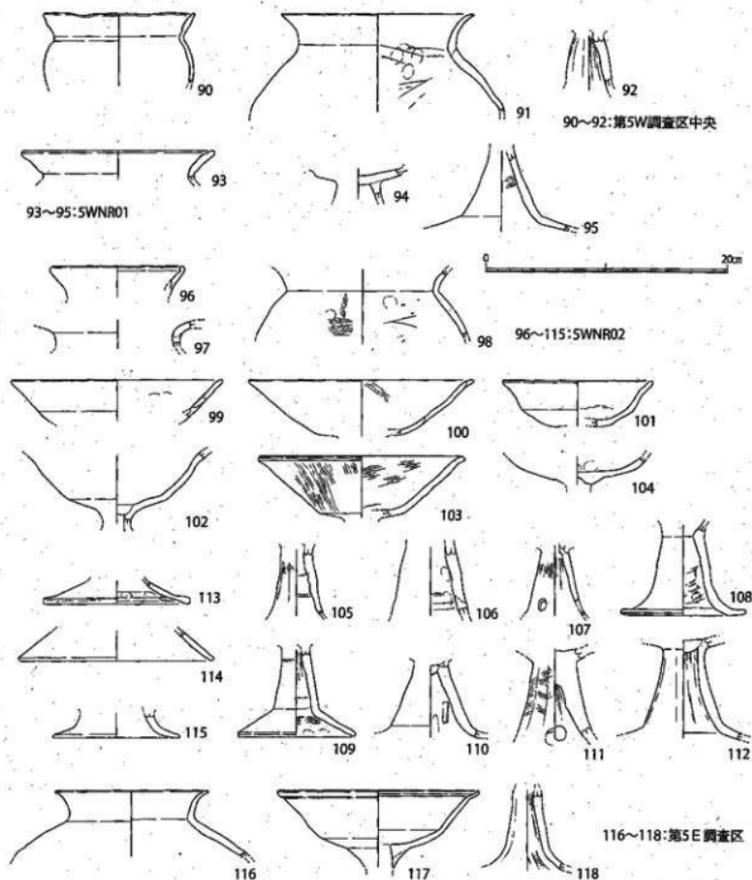


第36図 第3調査区出土埴輪類③(S=1:4)

第6表 第3調査区出土土埴類観察表③

番号	出土地点・層位	名称	色調	胎土	焼成	口径	底径	高さ(器高)	外部装飾	内部装飾	底部装飾	その他 注目点	保存率	備考
67	第3調査区 IV-V区 第4層下層	朝顔形埴輪 (内)2.5YR 7/1 明赤灰 (外)10R 5/4 赤褐色	密	良好	-	-	(5.6cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ	-	-	-	口縁部片	67と同一 個体か
68	第3調査区 IV区 第4層	朝顔形埴輪 2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	-	-	(5.0cm)	タテハケ・ヨ コナデ ナデ・捺合痕	ナデ・捺合痕	-	-	-	口縁部片	
69	第3調査区 IV区 第4層	朝顔形埴輪 7.5YR 6/8 褐色	密	良好	-	-	(3.9cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ	-	-	-	口縁部片	
70	第3調査区 IV-V区 第4層下層	朝顔形埴輪 2.5YR 5/1 赤灰	密	良好	-	-	(3.4cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ	-	-	-	口縁部片	
71	第3調査区 IV-V区 第2-3層	朝顔形埴輪 2.5YR 6/6 褐色	密	良好	-	-	(4.5cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコナデ・捺合痕	-	-	-	体部片	
72	第3調査区 IV-V区	朝顔形埴輪 10YR 5/2 灰褐色	密	良好	-	-	(5.7cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコナデ・ナデ 捺合痕	-	-	-	体部片	
73	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	朝顔形埴輪 7.5YR 6/1 赤灰	密	良好	-	-	(5.7cm)	タテハケ・ヨ コナデ 捺合痕	ヨコハケ・ヨコナデ 捺合痕	-	-	-	体部片	
74	第3調査区 IV-V区 第2-3層	朝顔形埴輪 2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	-	-	(5.2cm)	タテハケ・ヨ コナデ	タテナデ・捺合痕	-	-	円形遺 かし	体部片	
75	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	朝顔形埴輪 2.5YR 5/4 にふい赤褐色	密	良好	-	-	(3.3cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコナデ・ナデ 捺合痕	-	-	-	体部片1/4	
76	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	朝顔形埴輪 10YR 6/1 褐色	密	良好	-	-	(4.4cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ 捺合痕	-	-	-	突部部 1/4	
77	第3調査区 IV-V区 第3層 包含層	形象埴輪 立ち飾り 10YR 6/5 灰褐色	密	良好	-	-	(15.8cm)	タテナデ	タテナデ	-	-	-	立ち飾り の部片	へう記号
78	第3調査区 IV-V区 第4層下層	円筒埴輪 7.5YR 7/8 黄褐色	密	良好	-	-	(5.2cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ	-	-	-	口縁部	へう記号
79	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	円筒埴輪 (内)7.5YR 6/6 褐色 (外)7.5YR 7/4 にふい褐色	密	良好	-	-	(9.2cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコナデ・ナデ 捺合痕・捺合痕	-	-	円形遺 かし	体部片	
80	第3調査区 東岸 2-3層	円筒埴輪 2.5YR 6/8 褐色	密	良好	-	-	(2.5cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ナデ	-	-	-	体部小片	天端不明 へう記号
81	第3調査区 IV区 第3層下層	円筒埴輪 7.5YR 7/4 にふい褐色	密	良好	-	-	(4.3cm)	タテハケ	捺合痕 磨滅のため形態不明	-	-	-	底面片	
82	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	円筒埴輪 2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	-	15.2cm	(18.2cm)	タテハケ・ヨ コナデ 捺合痕	タテナデ・ヨコナデ 捺合痕・捺合痕	ケズリ 基部が埋地層 に工具痕	円形遺 かし一 列	底面2/3		
83	第3調査区 IV区 第3層下層	円筒埴輪 7.5YR 6/4 黄褐色	密	良好	-	-	(4.9cm)	タテハケ	ナデ・捺合痕	ヨコナデ 基部が埋地層 に工具痕	-	-	底面片	
84	第3調査区 IV区 第3層下層	円筒埴輪 2.5YR 5/8 明赤褐色	中々密	良好	-	-	(7.8cm)	磨滅のため 形態不明	ヨコナデ・ナデ 捺合痕	基部が埋地層 に工具痕	-	-	底面片	
85	第3調査区 IV-V区 第3層 包含層	円筒埴輪 8YR 5/4 黄褐色	密	良好	-	-	(6.6cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ナデ・捺合痕	ケズリ	-	-	底面片	
86	第3調査区 東岸-V区 第4層上半	円筒埴輪 10YR 6/2 灰黄褐色	密	良好	-	-	(5.2cm)	タテハケ 基部に赤褐色 磨滅り	ナデ・捺合痕	ナデ	-	-	底面片	
87	第3調査区 IV区 35D01遺土	朝顔形埴輪 10YR 7/3 灰黄褐色	密	良好	-	-	(8.4cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ヨコハケ・ヨコナデ ナデ	-	-	-	口縁部片	
88	第3調査区 IV区 35D01遺土	朝顔形埴輪 10YR 6/2 灰黄褐色	密	良好	-	-	(8.8cm)	タテハケ・ヨ コナデ	ナデ・捺合痕	-	-	-	体部片	
89	第3調査区 IV区 35D03遺土	朝顔形埴輪 2.5YR 6/3 にふい褐色	密	良好	-	-	(12.5cm)	タテハケ・ヨ コナデ 捺合痕	ヨコハケ・ヨコナデ 捺合痕	-	-	-	突部部 1/4	67と同一 個体か

104や小型の101、杯部口縁下位の縁が明瞭な深めの大型高杯となる102など形態的に見ても時期幅の広い様相が窺える。105～115の脚柱部や脚裾部にも同様に形態差の豊富な状況が見える。これらの土器片は自然河道NR02上面の窪みに堆積した遺物包含層より出土しており、河道埋没以降の堆積の時期



第37図 第5調査区出土遺物(S=1:4)

幅を知ることができる土器群となる。土器の様相からは概ね古墳中・後期の時期幅が想定される。

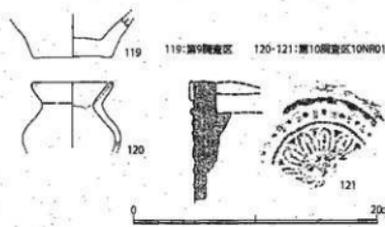
116~118は第5調査区東地区(5Eトレンチ)出土土器である。いずれも調査進行時の北辺サブトレンチ掘削時にまとめて出土したものであり、北壁土層断面の観察から遺構埋土中の土器と考えられるものである。116はやや立ち気味の外反口縁と膨らんだ胴部上半が特徴となる甕である。胴部内外面の調整は不明である。117は杯底部と口縁部間の稜が鈍くなった高杯である。布留式系末期の杯部形状と脚部挿入手法による杯部接合痕跡が残る点が看取される。118の高杯脚柱部片には外面にタテヘラナデ、内面にシボリ痕が見える。色調と胎土の質感が異なるため117の高杯とは別個体である。

第7表 第5調査区出土遺物観察表

番号	出土地点・層位	名称	色調	胎土	構成	径長		現存率	調査	備考
						口径・底径	取高(残存高)			
90	第5調査区 中央 サブトレ	土器類 小磁器	2.5YR 6/6 橙	密	良好	口径12.4cm	(5.8cm)	口縁一休部分	(内)磨滅のため調査不明	
91	第5調査区 中央 サブトレ	土器類 鉢	(内)10YR 7/6 明 黄褐色	密	良好	口径16.0cm	(8.1cm)	口縁部1/3	(内)3コナチナデ・ケズリ 瓦葺・胎合層	(内)3コナチナデ
			(外)10YR 3/1 黄褐色							
92	第5調査区 中央 遺構遺土上	土器類 高杯	2.5YR 6/8 橙	密	やや劣 良好	-	(4.5cm)	胴部1/3	(内)磨滅のため調査不明	
93	第5調査区 東半 SNR01 下部埋合層	土器類 高杯	5YR 5/2 灰黄	密	良好	口径15.7cm	(2.4cm)	口縁部1/8	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			2.5YR 5/8 明赤褐色							
94	第5調査区 東半 SNR01 下部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	-	(2.5cm)	杯部1/4	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			2.5YR 6/8 橙							
95	第5調査区 中央 SNR01 下部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(8.7cm)	胴部1/2	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			5YR 6/6 橙							
96	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	口径10.8cm	(2.5cm)	口縁部1/8	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			7.5YR 5/3 にがい黄褐色							
97	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 5/3 にがい黄褐色	密	良好	胴径10.8cm	(2.5cm)	胴部1/4	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			5YR 4/3 にがい黄褐色							
98	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	5YR 4/3 にがい黄褐色	密	良好	胴径12.6cm	(6.2cm)	胴部一休部分	(内)ヘラケズリ・胎合層	(内)3コナチナデ・胎合層
			5YR 6/6 橙							
99	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	口径17.4cm	(3.5cm)	杯部1/8	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			10YR 7/2 にがい黄褐色							
100	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	10YR 7/2 にがい黄褐色	密	良好	口径18.8cm	(4.7cm)	杯部1/3	(内)3コナチナデ・磨滅のため調査不明	(内)3コナチナデ・磨滅のため調査不明
			7.5YR 6/6 橙							
101	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 6/6 橙	密	良好	口径12.6cm	(3.8cm)	杯部1/3	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			2.5YR 5/8 明赤褐色							
102	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	-	(5.6cm)	杯部1/3	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			7.5YR 7/4 にがい黄褐色							
103	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 7/4 にがい黄褐色	密	やや劣 良好	口径16.8cm	(5.1cm)	杯部1/4	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ、タテハク
			7.5YR 6/6 橙							
104	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 6/6 橙	密	良好	-	(2.3cm)	杯部1/3	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			7.5YR 4/2 灰黄							
105	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 4/2 灰黄	密	良好	-	(5.5cm)	胴部2/3	(内)ナデ	(内)ナデ・胎合層のミチ
			10YR 7/4 にがい黄褐色							
106	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	10YR 7/4 にがい黄褐色	密	やや劣 良好	-	(4.9cm)	胴部2/1	(内)一層工具圧痕・磨滅のため調査不明	磨滅3分の内 形跡少し
			2.5YR 6/8 橙							
107	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(6.0cm)	胴部ほぼ正完形	(内)一層ミガキ・磨滅のため調査不明	(内)3コナチナデ
			10YR 5/3 明赤褐色							
108	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	10YR 5/3 明赤褐色	密	やや劣 良好	胴径9.9cm	(7.6cm)	胴部1/6 胴部1/2	(内)ケズリ・工具圧痕・胎合層・磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			2.5YR 5/6 明赤褐色							
109	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	やや劣 良好	胴径9.8cm	(7.2cm)	胴部正完形	(内)一層ミガキ・磨滅のため調査不明	(内)工具圧痕・磨滅のため調査不明
			7.5YR 8/4 淡黄褐色							
110	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	7.5YR 8/4 淡黄褐色	密	やや劣 良好	-	(8.0cm)	胴部1/2	(内)工具圧痕・磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			2.5YR 5/8 明赤褐色							
111	第5調査区 東半-中央 SNR02 上部埋合層	土器類 高杯	2.5YR 5/8 明赤褐色	密	良好	-	(8.3cm)	胴部ほぼ正完形	(内)ナデ・紋付・胎合層	(内)3コナチナデ
			2.5YR 5/6 明赤褐色							
112	第5調査区 中央 NR02	土器類 高杯	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	-	(8.8cm)	胴部ほぼ正完形	(内)紋付ナデ	内孔3箇所 径定4孔
			5YR 6/6 橙							
113	第5調査区 東半-中央 NR02 上部埋合層	土器類 高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	胴径12.0cm	(1.7cm)	胴部1/4	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			10YR 7/2 にがい黄褐色							
114	第5調査区 東半-中央 NR02 上部埋合層	土器類 高杯	10YR 7/2 にがい黄褐色	密	良好	胴径15.8cm	(2.5cm)	胴部1/5	(内)磨滅のため調査不明	(内)3コナチナデ
			5YR 2/1 黒褐色							
115	第5調査区 東半-中央 NR02 上部埋合層	土器類 高杯	5YR 2/1 黒褐色	密	良好	胴径10.8cm	(2.0cm)	胴部1/6	(内)磨滅のため調査不明	(内)磨滅のため調査不明
			10YR 5/3 黄褐色							
116	第5調査区 中央西寄り 北辺サブトレ埋合層	土器類 高杯	10YR 5/3 黄褐色	密	良好	口径12.8cm	(5.5cm)	口縁部1/8	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			5YR 6/8 橙							
117	第5調査区 中央西寄り 北辺サブトレ埋合層	土器類 高杯	5YR 6/8 橙	密	良好	口径16.8cm	(6.4cm)	口縁部1/4	(内)3コナチナデ	(内)3コナチナデ
			7.5YR 4/3 黄褐色							
118	第5調査区 中央西寄り 北辺サブトレ埋合層	土器類 高杯	7.5YR 4/3 黄褐色	密	良好	-	(8.8cm)	胴部ほぼ正完形	(内)ミチ	(内)胎ナデ・胎合層
			5YR 6/6 橙							

第8表 第9・10調査区出土遺物調査表

番号	出土地点・層位	名称	色調	胎土	構成	法高		残存率	脚位	備考
						口径・底径	器高(残存高)			
119	第9調査区 表土	弥生土器 壺	(伊)2YR 5/8 赤褐色	粘	堅い	口径6.4cm	(3.4cm)	—	—	(伊)遺跡のため調査不能 (伊)倉持遺 遺跡のため 調査不能
		(伊)5YR 2/1 黒褐色	底径6.4cm			底径3/4				
120	第10調査区 10NR01下層	土師製 小壺	5YR 6/8 橙	粘	良好	口径3.3cm	(5.4cm)	—	—	(伊)遺跡のため調査不能 (伊)倉持のため調査不能
121	第10調査区 10NR01下層	瓦 軒丸	—	粘	良好	内区径8.4cm	(9.9cm)	—	—	—
						外縁外区幅2.2cm				
						外縁内区幅1.3cm				



第38図 第9・10調査区出土遺物(S=1:4)

以上、第5調査区東西両地区の出土土器群について、再度その特性について列記する。出土した土器は遺物包含層とわずかな遺構埋土から採取されたものであり一括性には乏しいものばかりであるが、土器に見る特徴から一定の時期幅で考えることができる土器群と言えるものである。具体的には形態差の大きい壺に見える内面ケズリ、口縁端部の肥厚や外面ハケ調整の在り方が、また高杯杯部形態と脚部接合手法等においても古墳前期以降の奈良盆地各地に通用な布留式土器の諸特徴の残存するものを含むことが窺える点にある。つまり、布留式系要素が残存しつつも各器種の画一性消失が進行し、次第に個性差が目立つ土器の推移が見えることである。こうした土器様相の変化から集落展開の始点が布留式土器様式末期で、かつ須恵器導入前後期に当たる古墳中期以降と推定される。

(3) 第9調査区出土遺物 (119)

119は調査区の表土中より出土した弥生土器底部片である。内外面ともに器面の摩滅が著しく調整手法は観察し難いが、形態的に見て弥生中期頃の壺の底部片と思われる。

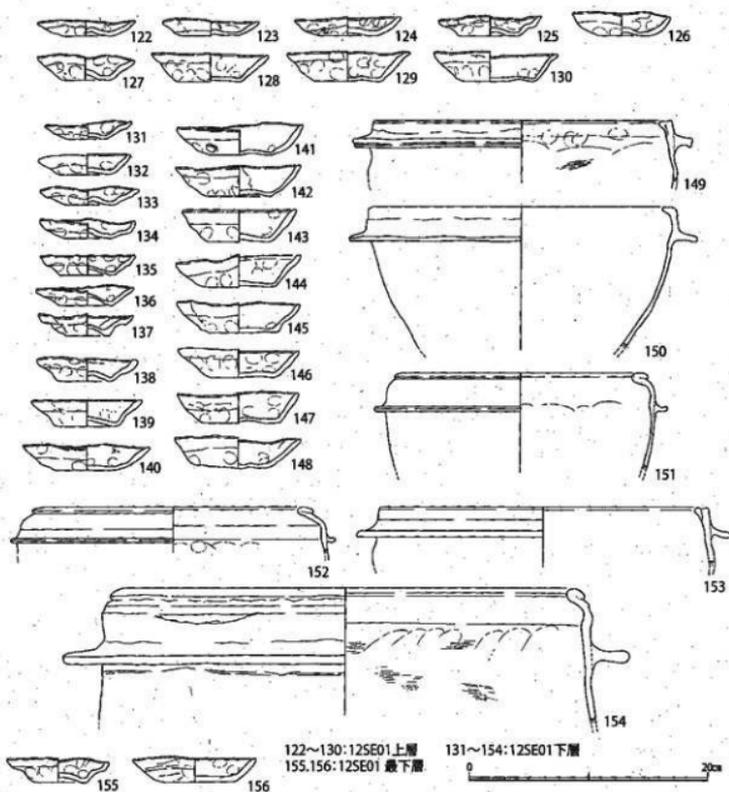
(4) 第10調査区出土遺物 (120・121)

120は土師器小型壺である。摩滅のため内外面の調整は不明であるが、おそらく調整面の省略化がすすんだ粗製品であると思われる。形態的には須恵器導入期以降の古墳中・後期の土器と考えられるものである。121は瓦当面が明瞭に残る軒丸瓦片である。小型化した内区の単弁文様と外縁の珠文等の特徴から概ね平安期頃のものと考えられる。これらの土器、瓦はいずれも自然河道NR01下層より出土している。

(5) 第12調査区出土遺物 (122~156)

井戸SE01および溝SD01より多量の土師質皿完形品と羽釜を主体とする中世土器群が出土している。
井戸SE01出土土器群 (122~156)

122~148・155・156の土師質皿はいずれも内外面に成形時の指頭圧痕のみを残し口縁部付近をココナデして仕上げた手柄ねの皿である。径8.0~9.0cm前後の小型品では底部付近を凹ませた突き上げ底の形態が目立ち、やや中型品の径10cm超のものでは平底様のものが主となる。いずれも口縁部端付近の内縁や内面に油煙の付着するものが見られ、灯明皿として日常に使用したものであったものも幾つか含まれていた。149~154の土師質羽釜でも大小の規格と形態差が認められ、149・150・153のように鈔



第39図 12SE01出土遺物(S=1-4)

より上位が短く立ち上がり内側に短く屈曲させた口縁形態のものや151・152のような鈎より上位で内湾させた後に端部を外方に丸く折り返した口縁形態を成す羽釜の両者が見られる。また、大型品は154の1点のみであるが、小型品の一部と同様の内湾外方折り返しの口縁端をもつ形態のものである。これらは、概ね同一時期幅のもので占められており各器種の形態と組成からも瓦器焼消失前後の14世紀代（鎌倉末～室町期の間）の土器群と考えられる。

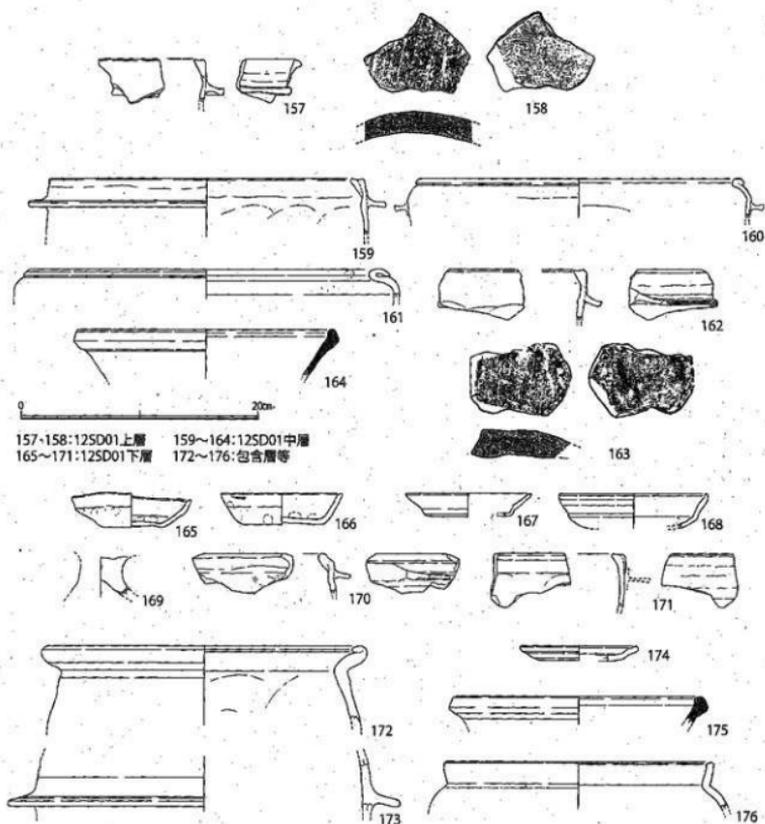
溝SD01出土土器（157～171）

溝SD01埋土中の各層からも土器片、瓦片が出土している。

169は古墳前期の土師器台付き鉢もしくは高杯の脚柱部小片である。脚柱部には3方に小円孔が残る。内外面とも摩滅のため調整不明であるが、粗製品である。158・163の平瓦片は外面縄目叩きと内面に布目圧痕が見られる奈良末～平安期初頭頃の瓦である。その他の土器類では土師質羽釜（157・

第9表 125E01出土遺物観察表

番号	出土地点・層位	名称	色調	粘土	地蔵	法量		保存率	調査	備考
						口径・底径	高さ(残存高)			
122	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	7.5YR 7/4 灰~青	密	良好	口徑8.2cm	1.3cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕・工具痕	外周腐化
123	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑8.2cm	1.3cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕・工具痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	外周腐化
124	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑9.0cm	1.6cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
125	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	7.5YR 6/4 灰褐色	密	良好	口徑8.6cm	2.4cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内外腐化
126	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	2.5YR 6/2 灰黄	密	良好	口徑8.1cm	1.9cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
127	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	7.5YR 7/4 灰~青	密	良好	口徑8.0cm	1.9cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内外腐化
128	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑8.8cm	1.7cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
129	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑10.3cm	2.5cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕・壺 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内周腐化
130	第12調査区 125E01上層	土師器 甕	7.5YR 6/4 灰~青	密	良好	口徑10.4cm	2.5cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
131	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑7.3cm	1.3cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
132	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	7.5YR 5/2 灰黄	密	良好	口徑8.2cm	2.7cm	口縁部1/2 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
133	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	5YR 6/4 灰~青	密	良好	口徑8.3cm	1.3cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋	
134	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑8.0cm	1.8cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
135	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	7.5YR 6/3 灰~青	密	良好	口徑8.0cm	1.6cm	口縁部1/3 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
136	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑8.0cm	1.6cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋	
137	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑7.2cm	1.9cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内外腐化
138	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 6/6 橙	密	良好	口徑8.4cm	1.9cm	口縁部3/4 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋	
139	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	7.5YR 5/3 灰~青	密	良好	口徑9.2cm	2.3cm	口縁部1/3 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
140	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑10.6cm	2.1cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕・甕底蓋	
141	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 6/4 灰~青	密	良好	口徑10.8cm	2.5cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
142	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	(内)10R 5/6 赤 (外)7.5YR 4/3 黄灰	密	良好	口徑10.5cm	2.6cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
143	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 6/6 橙	密	良好	口徑9.7cm	2.7cm	口縁部1/2 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内外腐化
144	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 6/6 橙	密	良好	口徑10.4cm	2.7cm	口縁部5/6 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
145	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑10.4cm	2.5cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内周腐化
146	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	5YR 6/4 灰~青	密	良好	口徑10.2cm	2.4cm	口縁部3/4 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋	
147	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑10.2cm	2.5cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
148	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	7.5YR 6/4 灰~青	密	良好	口徑10.6cm	2.6cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	
149	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	(内)5YR 4/3 黄灰 (外)5YR 2/1 黒	密	良好	口徑24.8cm	5.2cm	5/6残存	(内)右コナデ・ヘラケズリ・ハケ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデ	外周腐化
150	第12調査区 3801下層	土師器 甕	7.5YR 2/1 黒	密	良好	口徑24.1cm	11.8cm	口縁部1/2 残存	(内)右コナデ・ヘラケズリ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデ	外周腐化
151	第12調査区 3801下層	土師器 甕	7.5YR 7/4 灰~青	密	良好	口縁部 20.6cm	8.3cm	口縁部欠	(内)右コナデ・ヘラケズリ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデ	外周腐化
152	第12調査区 3801下層	土師器 甕	7.5YR 4/2 灰黄	密	良好	口徑22.0cm	3.0cm	口縁部欠	(内)右コナデ・ヘラケズリ・甕底蓋・接合痕 (外)右コナデ	外周腐化
153	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	10YR 8/3 黄褐色	密	良好	口徑27.4cm	5.0cm	口縁部1/6 残存	(内)右コナデ・ヘラケズリ (外)右コナデ	
154	第12調査区 125E01下層	土師器 甕	5Y 7/6 黄	密	良好	口縁部 37.2cm	11.3cm	口縁部5/6 残存	(内)右コナデ・ヘラケズリ・接合痕 (外)右コナデ・ヘラケズリ	内周腐化
155	第12調査区 125E01最下層	土師器 甕	2.5YR 5/6 明赤褐色	密	良好	口徑8.4cm	2.0cm	完好	(内)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕・工具痕 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	内周腐化
156	第12調査区 125E01最下層	土師器 甕	5YR 7/3 灰~青	密	良好	口徑10.4cm	2.0cm	口縁部3/4 残存	(内)右コナデナデ・甕底蓋 (外)右コナデナデ・甕底蓋・接合痕	

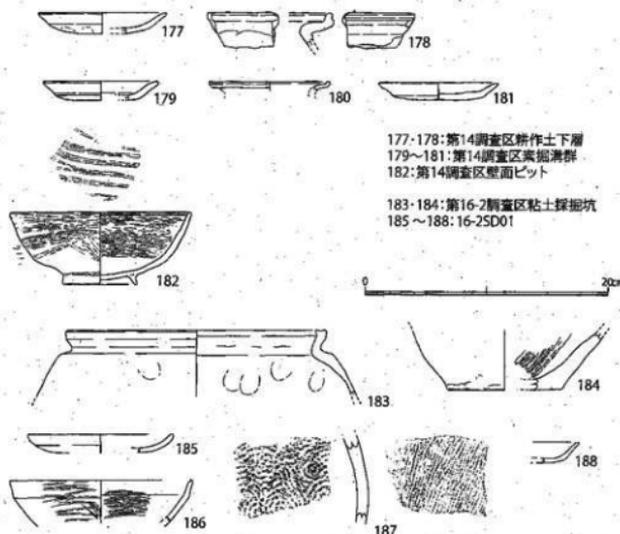


157-158:12SD01上層 159~164:12SD01中層
165~171:12SD01下層 172~176:包含層等

第40図 12SD01ほか出土遺物(S=1:4)

159~162・170・171)・小皿(165~168)等の中世土器があるが、164の東播系の須恵質すり鉢のような搬入土器も含まれている。157・158が埋土上層、159~164が埋土中層、165~171が埋土下層よりそれぞれ出土している。なお、前述の井戸SE01出土中世土器群と同形態、同時期あるいはそれらに後続する時期までの土器類も出土している。

第12調査区のその他出土土器(172~176)では、調査進行時の上位堆積層掘削時や遺構検出までに取り上げた土器類が主体であるが、172・173・176の土師質羽釜や174の小皿のように形態的にも井戸や溝出土の土器群よりやや新しい様相を示す室町期以降の土器が顕著に認められる。また、ここでも小片であるが175のように特徴的な東播系すり鉢も出土している。



177-178: 第14調査区耕作土下層

179~181: 第14調査区裏掘溝群

182: 第14調査区壁面ピット

183-184: 第16-2調査区粘土探掘坑

185~188: 16-2SD01

第41図 第14・16-2調査区出土遺物(S=1-4)

(6) 第14調査区出土遺物 (177~182)

耕作土下部および素掘り溝埋土等から中近世の土器類がわずかに出土している。177・179・181は餅質小皿である。177は近世の白色系小皿であり、精緻な胎土で製作されている。179・181は胎土が赤色系で粗製の小皿である。178の口縁部片はおそらく広口小型壺の口縁端であり、端部にはつまみ上げが見られるものである。何らかの容器であったと考えられる。182はほぼ完存する瓦器椀である。しっかりとした高台部分と内外面に施された暗文ミガキが特徴的なものであり、外面には連弧文状暗文、内面の見込みにはジグザグ状暗文が施文されている。形態、手法ともに古相を呈する典型的な大和型瓦器椀であり、12世紀前後の頃に帰属時期が求められる。

177・178は耕作土下部、179~181は素掘り溝埋土、182は調査区壁面ピットとサブトレンチ掘削時にそれぞれ出土している。明らかに11世紀後半、平安後期にまで遡る182の瓦器椀を除き、いずれも中世後期以降、近世までの土器を主体とする。

(7) 第16-2調査区出土遺物 (183~188)

183は直立気味の口縁部が特徴的な土師質羽釜である。鏝より上位のみが残る破片である。184は大和地域に通用な瓦質すり鉢の底部片である。内面には工具使用の掻き取りによる摺り目が見られ、使用痕となる摩滅が認められる。両者ともに中世後期の室町期の日常土器である。調査区南端の掘乱より出土している。(青木)

185は16-2SD01上層、186~188は16-2SD01下層から出土した土器である。185は短く立ち上がる口縁部の途中に凹線状の強いナデを施す土師皿である。186は口縁部先端の強いヨコナデが特徴的な瓦器椀で、外面のミガキがやや疎らであるのに対し内面のそれは比較的密であることから、185と同様12世

第10表 第12・14・16-2調査区出土土器類観察表

番号	出土地点・層位	名称	色調	粘土	構成	径		残存率	調査	備考
						口径・底径	高さ(残存高)			
157	第12調査区 12SD01上層	土師器 羽釜	10YR 8/3 黄褐色	密	良好	—	3.8cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ヤヤ奇威のため調査不明 伊呂コナデ・ヤヤ奇威のため調査不明
158	第12調査区 12SD01上層	瓦片	N 4/ 灰白	密	良好	—	—	欠片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ
159	第12調査区 12SD01中層	土師器 羽釜	2.5YR 8/3 黄灰	密	良好	口径26.4cm	4.8cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ハラケズリ・組合 伊呂コナデ
160	第12調査区 12SD01中層	土師器 羽釜	10YR 7/3 にぶい・黄褐色	密	良好	口径26.8cm	3.4cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ・組合
161	第12調査区 12SD01中層	土師器 羽釜	2.5YR 8/2 灰白	密	良好	口径30.0cm	2.5cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ツグ島・備正 伊呂コナデ
162	第12調査区 12SD01中層	土師器 羽釜	10YR 7/3 にぶい・黄褐色	密	良好	—	4.1cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ハラケズリ・組合 伊呂コナデ
163	第12調査区 12SD01中層	瓦片	10YR 6/2 黄褐色	密	良好	—	—	欠片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ
164	第12調査区 12SD01中層	すり鉢	N 7/ 灰白	密	良好	口径21.6cm	4.1cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ・灰褐色
165	第12調査区 12SD01下層	土師器 皿	2.5YR 6/6 黄	密	良好	口径10.0cm	2.9cm	底面	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・備正 伊呂コナデ・備正
166	第12調査区 12SD01下層	土師器 皿	2.5YR 5/8 明褐色	密	良好	口径10.2cm	2.6cm	口縁部1/3残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・備正 伊呂コナデ・備正・組合
167	第12調査区 12SD01下層	土師器 皿	2.5YR 6/8 黄	密	良好	口径10.6cm	1.9cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
168	第12調査区 12SD01下層	土師器 皿	7.5YR 6/2 灰黄	密	良好	口径12.4cm	2.9cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
169	第12調査区 12SD01下層	土師器 おひし	2.5YR 7/8 黄	密	良好	—	3.4cm	底部1/2残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデのため調査不明 伊呂コナデのため調査不明
170	第12調査区 12SD01下層	土師器 羽釜	10YR 8/3 黄褐色	密	良好	—	3.3cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・組合 伊呂コナデ
171	第12調査区 12SD01下層	土師器 羽釜	7.5YR 8/1 灰白	密	良好	—	4.5cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ハラケズリ・組合 伊呂コナデ
172	第12調査区 北辺サブトレ	土師器 土釜	10YR 3/1 黒黄	密	良好	口径27.6cm	6.7cm	口縁部1/3残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ハラケズリ 伊呂コナデ
173	第12調査区 北辺サブトレ	土師器 羽釜	10YR 8/1 灰白	密	やや良好	—	4.6cm	欠片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデのため調査不明 伊呂コナデ
174	第12調査区 北辺サブトレ	土師器 皿	10YR 7/3 にぶい・黄	密	やや良好	口径10.0cm	1.2cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・備正 伊呂コナデ・備正
175	第12調査区 検出中	灰褐色 すり鉢	5Y 7/1 灰白	密	やや良好	口径21.8cm	2.3cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
176	第12調査区 検出中	土師器 羽釜	10YR 8/2 灰白	密	やや良好	口径23.8cm	4.1cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
177	第14調査区西半 朝土下層	土師器 皿	10YR 7/1 灰白	密	やや良好	口径10.6cm	1.6cm	口縁部1/6	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
178	第14調査区西半 朝土下層	土師器 皿	7.5YR 8/4 黄褐色	密	やや良好	—	2.9cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
179	第14調査区 東部中層	土師器 皿	7.5YR 8/6 黄褐色	密	やや良好	口径9.6cm	1.5cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
180	第14調査区 東部中層	土師器 皿	5YR 6/4 にぶい・黄	密	やや良好	口径10.0cm	0.8cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
181	第14調査区 南北東部の溝	土師器 皿	5YR 7/8 黄	密	やや良好	口径4.9cm	1.3cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデのため調査不明 伊呂コナデのため調査不明
182	第14調査区 サブトレ内 第14調査区 検出中	瓦片	7.5YR 2/1 黒	密	やや良好	口径15.2cm	6.0cm	口縁部片 1/3残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ミギキ 伊呂コナデ・ミギキ 伊呂コナデ・ミギキ 伊呂コナデ・ミギキ
183	第14調査区 南端部 第14調査区 南端部	土師器 皿	10YR 8/3 黄褐色	密	やや良好	口径21.2cm	5.5cm	口縁部1/6残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・備正・組合 伊呂コナデ
184	第16-2調査区 16-2SD01上層	すり鉢	伊呂2.5Y 8/1 伊呂2.5YR 6/1黄灰	密	やや良好	直径9.2cm	4.8cm	底部1/3残存	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・重目7&2条 伊呂コナデ・組合
185	第16-2調査区 16-2SD01上層	土師器 皿	10YR 7/4 にぶい・黄褐色	密	やや良好	口径12.0cm	1.5cm	口縁部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ
186	第16-2調査区 16-2SD01下層	瓦片	N 4/ 灰	密	良好	口径15.0cm	3.9cm	口縁部・底部	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ・ミギキ 伊呂コナデ・ミギキ
187	第16-2調査区 16-2SD01下層	灰褐色 土	N 5/ 灰	密	良好	—	—	残部片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデのため調査不明 伊呂コナデのため調査不明
188	第16-2調査区 16-2SD01下層	灰褐色 皿	N 6/ 灰 伊呂 口縁部10Y5/1 灰	密	良好	—	1.6cm	口縁部・底部 片	伊呂コナデ 伊呂コナデ	伊呂コナデ 伊呂コナデ

紀中頃ないし後半に位置づけられるものである。187は外面の平行タキと内面の同心円状当て具様が特徴的な須恵器甕の胴部片である。188は須恵器皿の口縁部小片とみられ、口縁端部をやや外方へつまみ出す。小片のため口径を正確に推定しづらいが、おおむね20cm内外になるものとみられる。8世紀中頃の所産と考える。(北口)

3. 平成25年度調査区の出土遺物

(1) 第1調査区出土遺物(1~5)

1は縄文土器の鉢である。外面には凹線による区画沈線による文様が施文されるが、地文となる縄文については器面の摩滅のため看取できない。施文等の特徴から縄文後期の縁帯文系土器と考えられ、波状口縁を成す浅鉢の一部であると思われる。2は土師器高杯の杯部片である。厚手の器壁と粗製の胎土が特徴となる。形態等の特徴から概ね古墳後期の帰属が考えられる。3~5は須恵器である。3の小型壺は通常には見られない形態であり、単体の器種ではなく器台、壺等に装飾的に付されたものとも考えられる。4・5は高杯である。どちらも立ち気味の脚部形態から長脚2段透かし孔をもつものと思われる。3~5の須恵器は2の土師器と同様に古墳後期の帰属時期が求められる。

2がSX02最下層、4がSX02上層より出土。その他は遺物包含層より出土している。

(2) 第2調査区出土遺物(6~33)

遺物包含層を主体に須恵器、土師器、埴輪等の破片遺物が多く出土している。

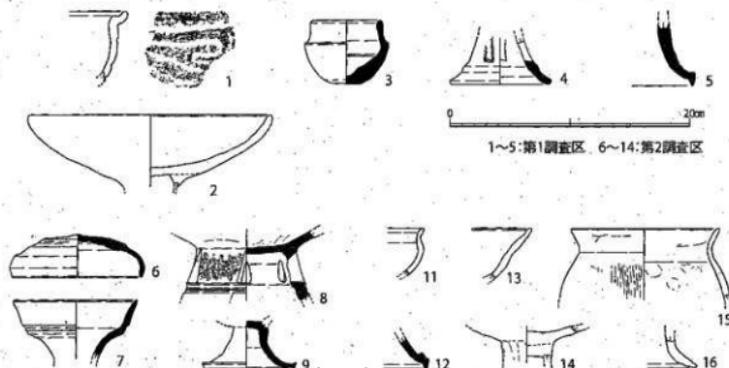
6~10は須恵器である。6は天井部が丸く、回転ケズリ調整箇所比率が小さい杯蓋である。7は壺もしくは甕の口縁であるが、立ち気味の口縁端の形状から当該器種でも新形の形態と思われる。8は器台の杯底と脚柱部間の破片である。脚柱の外面には微細な波状文が施文され、三角形透かし孔が6方に穿たれている。9の高杯脚部は短脚無孔のもので小型品である。10の高杯脚部片は脚柱端部の形状からやや古相を示す短脚高杯である。以上の須恵器では古墳後期以降の各時期のものが多く混在する。

11~15は土師器である。いずれも小片であり11は小型鉢、13は高杯の器形のみが知られ、形態から概ね古墳中・後期の土器片であることがわかる。12・14の高杯各部の小片と15の甕は形態と手法より若干時期が下る土器であることがわかり、古墳時代末以降のものと思われる。15の甕は単純な屈曲口縁甕であり、外面タテハケと内面指頭圧のみの調整手法が見える。大溝SD01出土の11を除き、他は遺物包含層出土である。

16~32は埴輪片である。ほとんどが遺物包含層より出土している。

埴輪片には16~20の朝顔形埴輪と21~33の円筒埴輪が見られるが、器形埴輪等の形象埴輪は含まれていない。焼成については土師質、須恵質に近い硬質なものも含まれている。16~20は朝顔形埴輪の口縁部片である。いずれも内外面にヨコ・ナナメ方向のハケ目調整が一次調整のみで施されている。18は朝顔形埴輪の壺部上半のみ残る破片である。外面にはヨコハケ、内面にナナメ方向のナデと指頭圧痕が残る。21・22は円筒埴輪の口縁部片である。口縁端を強くヨコナデし、端部は内側に突出する。外面には一次調整のタテハケ、内面にはナナメ方向のナデのみで調整する。23~32の円筒埴輪片でも内外面の調整は同様の手法により製作されており、29のように透かし孔は円孔のみが認められる。26は口縁部付近の小片であるが、弧状の線刻が外面に施文されたものである。33の基底部では外面タテハケ、内面ナナメ方向ナデに加え、基底部端面の内外面に仕上げに再度の調整をおこなっていることが看取される。

これらの埴輪片の観察により、ここで出土した埴輪の形態は3条4段程度の小型の円筒埴輪と朝顔形



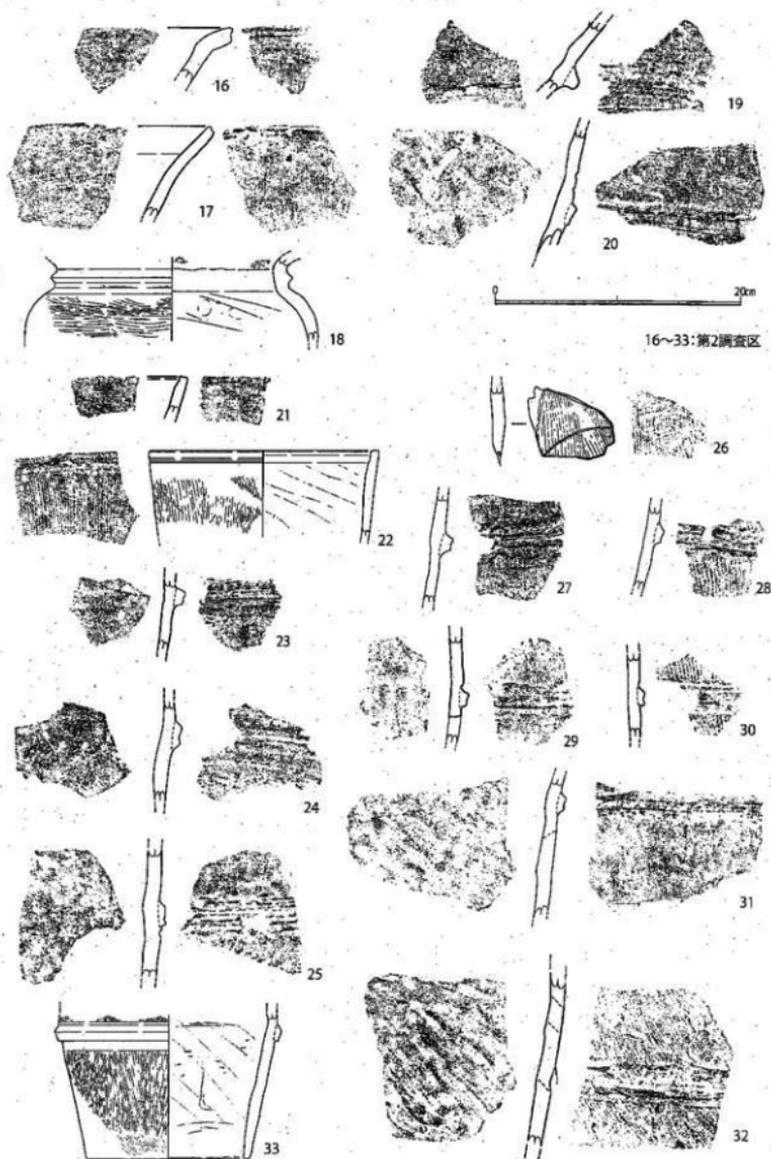
第42図 平成25年度調査区出土土器類(S=1:4)

第11表 平成25年度調査区出土土器類

番号	出土地点・層位	器種	色面	胎土	地成	径量		残存率	調査	備考
						口径・底径	高さ(残存高)			
1	第1調査区 東半アトレ 包倉層	陶文土器 鉢	10YR 4/3 に赤い斑	密	良好	—	径0cm	口縁部小片	内ナゲ・凹縁 (9)凹縁	
2	第1調査区 西半 15X02上層	土師器 高杯	5YR 5/8 赤赤陶	密	良好	口径20.6cm	径0cm	口縁部2/3	内外面ともに磨面のため観察不能	
3	第1調査区 西半 アトレ包倉層	須恵系 小皿	N 6/ 灰	密	良好	口径5.6cm	(5.3cm)	口縁部・底部1/2	(内)ロクロナデ・灰降着 (外)ロクロナデ・灰降着	
4	第1調査区 西半 15X02上層	須恵系 高杯	N 3/ 暗灰	密	良好	器径6.4cm	(3.9cm)	器底1/2	(内)ロクロナデ・灰降着	三方に長方形の窪み し有り
5	第1調査区 西半アトレ 包倉層	須恵系 高杯	N 5/ 灰	密	良好	—	(5.4cm)	器底片	(内)ロクロナデ・凹縁 (外)ロクロナデ	
6	第2調査区 上部包倉層	須恵系 杯	N 7/ 灰白	密	良好	口径10.6cm	(3.6cm)	体部ほぼ残存 口縁部3/4	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・ロクロナシ(左側内)	
7	第2調査区 上部包倉層	須恵系 杯	N 6/ 灰	密	良好	口径10.4cm	(4.9cm)	杯部小片	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ・凹縁	
8	第2調査区 上部包倉層	須恵系 鉢	10B 5/1 青灰	密	良好	—	(5.7cm)	体部1部片 杯部小片	(杯部内)当具裏面ナデ・タキのちナデ (杯部外)ナゲ (体部内)ナゲ (体部外)数文・灰降・凹縁・灰降着	1段窪み4方に 三角形窪みし有り 10本線状工具で3本の 線状文を施す
9	第2調査区 西半包倉層	須恵系 高杯	5P 4/1 暗青灰	密	良好	器径7.5cm	(4.0cm)	脚柱部ほぼ残存 器底片	(内)ロクロナデ・ナデロクロズ	
10	第2調査区 上部包倉層	須恵系 高杯	2.5GY 8/1 オリーブ灰	密	良好	—	(3.7cm)	器底小片	(内)磨面のため観察不能・凹み割れ (外)ロクロナデ・灰降着	
11	第2調査区 西半 大塚D01	土師器 鉢	2.5YR 6/8 橙	密	良好	—	(4.0cm)	杯部片	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ	
12	第2調査区 アトレ包倉層	土師器 高杯	5YR 5/8 赤赤陶	密	良好	—	(3.0cm)	杯部片	(内)ナゲ (外)ナゲ・板ケズリ・面取り・黒点痕	
13	第2調査区 東半 下部包倉層	土師器 高杯	5YR 5/8 赤赤陶	密	良好	—	(4.4cm)	口縁部・杯部小片	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ	
14	第2調査区 東半 下部包倉層	土師器 台付鉢・盤	5YR 7/6 橙	密	良好	—	(2.9cm)	器底小片	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ	
15	第2調査区 中央 下部包倉層	土師器 鉢	10YR 4/2 灰黄陶	密	良好	口径12.2cm	径2cm	口縁部・杯部小片	(内)ヨコナデ・ナゲナゲ (外)ヨコナデ・面リキ	

埴輪による組成であったことが想定される。時期については概ね古墳後期、6世紀代の帰属と考えられる。

4. 特殊遺物

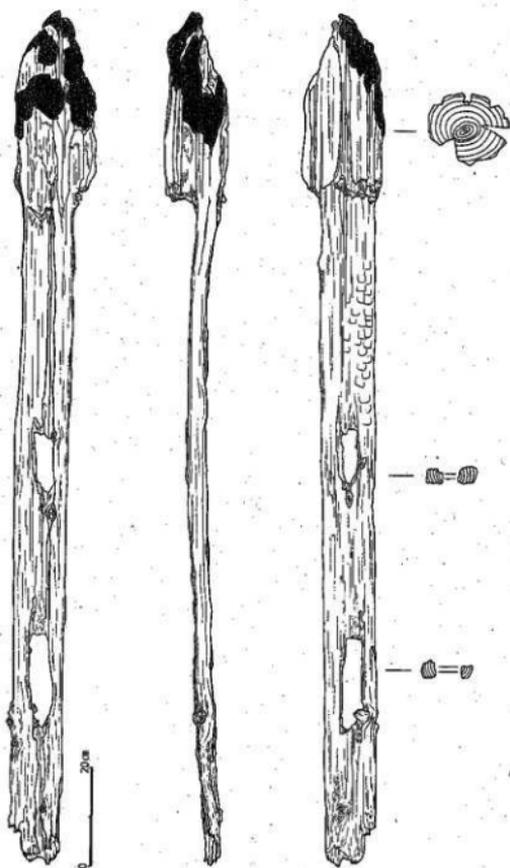


第43図 平成25年度調査区出土埴輪類(S=1:4)

第12表 平成25年度調査区出土土輪類観察表

番号	出土地点・層位	名称	色調	土質	形状	法量		外部観察	内部観察	底面形状	底面の 径(長さ)	備考
						口径	底径					
16	第2調査区中央 下部包倉層	新緑形土輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(4.5cm)	ヨコナデ・黒い・タテハ ク	中央部炭化層(黒い) ヨコナデ	-	-	-
17	第2調査区 サブトレー区	新緑形土輪	2.5YR 5/8 橙	密	良好	-	(7.7cm)	タテハク・ヨコナデ タテハク・ヨコナデ	黒い・タテハク・ヨコ ナデ	-	-	-
18	第2調査区 包倉層	新緑形土輪 (内)10YR 5/4 浅黄 (外)2.5YR 6/8 橙		やや密	良好	縦厚径 18.6cm	(5.8cm)	ヨコナデ・黒い・ヨコナ デ	黒い・ヨコナデ 縦径	-	-	-
19	第2調査区中央 下部包倉層	新緑形土輪	2.5YR 5/8 明赤黄	やや密	良好	-	(5.1cm)	タテハク・ヨコナデ	ヨコナデ・縦径・縦厚 径有り	-	-	検断片
20	第2調査区中央 下部包倉層	新緑形土輪	2.5YR 5/8 明赤黄	密	良好	-	(10.1cm)	ヨコナデ・ヨコナ デ	ナデ・縦径・縦厚 径有り	-	-	検断片
21	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(3.0cm)	ヨコナデ・ヨコナ デ	ヨコナデ・ナメナ デ	-	-	口縁部小片
22	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	7.5YR 8/6 浅黄	やや密	良好	8.4cm	(7.0cm)	ヨコナデ・黒い・タテハ ク	ヨコナデ・ナメナ デ	-	-	口縁部付近 へずり有り
23	第2調査区西半 下部包倉層	円筒土輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(5.2cm)	ヨコナデ・黒い・タテハ ク	ナメナ・ヨコナ デ	-	-	検断小片
24	第2調査区 サブトレー区	円筒土輪	5YR 6/6 橙	密	良好	-	(6.3cm)	ヨコナデ・ヨコナ デ	ナデ・縦径	-	-	-
25	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(10.2cm)	ヨコナデ・ヨコナ デ	ナデ・縦径	-	-	検断片
26	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	5YR 7/8 橙	密	良好	-	(5.6cm)	黒い・タテハク・ヘク 記号	縦径のたぬ縦径不明	-	-	検断小片 へずり あり
27	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	2.5YR 6/8 橙	密	良好	-	(5.7cm)	黒い・タテハク・ヨコナ デ	ヨコナデ・タテハ ク	-	-	検断小片
28	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	5YR 7/8 橙	密	良好	-	(5.5cm)	黒い・タテハク・ヨコナ デ	縦径のたぬ縦径不明	-	-	内面透 かし
29	第2調査区 包倉層	円筒土輪	2.5YR 5/6 明赤黄	密	良好	-	(3.4cm)	黒い・タテハク・ヨコナ デ	ナデ・縦径	-	-	内面透 かし
30	第2調査区 包倉層	円筒土輪 (内)5YR 7/8 橙 (外)5YR 6/4 に近い		密	良好	-	(5.8cm)	黒い・タテハク・ヨコナ デ	縦径のたぬ縦径不明	-	-	内面透 かし
31	第2調査区中央 E区	円筒土輪	5YR 7/8 橙	密	良好	-	(11.1cm)	ヨコナデ・黒い・タテハ ク	ナメナ	-	-	-
32	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	7.5YR 7/4 に近い	やや密	良好	-	(14.0cm)	黒い・ヨコナデ・多角か らナメナ	ナメナ	-	-	検断片
33	第2調査区中央 下部包倉層	円筒土輪	5YR 7/6 橙	やや密	良好	13.4cm	(11.0cm)	タテハク・ヨコナ デ	ナメナ・縦径 (ケズ)	-	-	内 裏 1/4

第44図は第3調査区3SD03から出土した木製品である。長さ176.5cm、径約17cmの心持ち材を加工したもので、先端はやや尖った形状を呈し、黒く炭化した部分が多い。先端から37cmほどは断面が楕円形を呈し、原木の形状を比較的良好に残すが、それより後方では一方を大きく削り込まれ、幅約111cm・厚さ4cm程度の板状に加工される。板状部の加工面には、手斧によるとみられるハツリ痕が部分的に遺存する。板状部の中央付近と後ろ寄りには、ホゾ穴状の不整形長方形を呈する穴が2つ穿たれる。中央部のものは長さ約12cm・幅約3.5cm、後ろ寄りのものは長さ約19cm・幅4～5cmを測る。用途については明確でないが、ホゾ穴状の穿孔を2つ持つことから建築材の可能性が考えられる一方、古墳周濠から一部が炭化した状態で出土したことは、あたかも古墳にまつわる祭祀等の行為に用いられたのちに周濠内に投棄された状況を想起させる。以上から、現段階では建築材を転用して古墳祭祀に使用された木製威儀具と考えておくのが妥当であろう。



第44图 3SD03出土木製品(S=1:10)

第4章 まとめ

最後に、今回の調査成果を地区ごとに整理してまとめたい。

南六条地区の調査

南六条町調査区においては国道24号線と繋がる南六条交差点の東付近を最西端とし、ここから東方約0.8kmに位置する最東端の第8調査区までを設定して道路拡幅計画路線上の遺跡有無確認を目的とした発掘調査を実施した。

平成24年度には第3調査区から第8調査区までの5箇所で開催して調査を実施し、第3・第5両調査区の調査で顕著な遺跡の兆候を確認している。

第3調査区では埋没古墳の周濠となる溝3条を検出し、径20m程度あるいはそれ以上の墳丘規模とも考えられる6世紀後半頃の小規模古墳2基の存在を想定することができた。また、多くの埴輪片の出土とともに木製成儀具のような木製品も出土している。西側に近接した平成25年度調査の第2調査区においても同様な埴輪片が多く出土しており、周辺での小規模古墳群形成の一端を知ることが可能である。また、第5調査区では遺構・遺物の遺存は少なかったものの、古墳中・後期の集落の存在も確認され、これら古墳群の形成基盤を成すことも考えられた。そして、平成24年度調査後にはこれら両調査区周辺を「南六条ノカミ遺跡」と命名し周知の遺跡として登録するに至った。

このように、南六条町周辺ではこれまで遺跡存在が空白視された地域であっただけに大きな成果であったと言える。また、奈良県立橿原考古学研究所による近年の郡山下つ道JCT関連発掘調査で確認された北西方の横田堂垣内遺跡や南六条北ミノ遺跡の成果とともに近隣地域においても同様に古墳後期の小規模古墳による群集墳展開が明らかとなりつつあり、今回報告の調査成果が今後の検討材料に加えられた点を大きく評価しておきたい。

(青木)

平成25年度には第1調査区と第2調査区で調査を実施し、第2調査区で遺跡の兆候を確認した。

第2調査区では大溝やピット等を検出したほか、包含層から多量の埴輪片の出土を見た。大溝からは遺物の出土が希薄であり、第3調査区で検出したような古墳周濠になるかは不明瞭であるが、第2調査区付近にも後期古墳が存在することは確実と言えよう。第1調査区では、縄文時代から古墳時代までの遺物を含む自然流路と、この河川が埋没した後の不安定な地形を確認した。地山の検出レベルは第2調査区と比べて50cm以上低く、第1調査区付近は低湿な地形だったようである。

(北口)

喜殿地区の調査

喜殿地区では、第10調査区で平安時代ごろの瓦を含む流路を検出し、隣接する第9および第11調査区では顕著な遺構を確認することができなかった。喜殿集落の南側に位置する第12調査区では中世後半期の井戸や溝を確認し、喜殿集落の成立に関わる可能性のある成果を得ることができた。調査地南方には遺物散布地として喜殿遺跡が周知されているが、同遺跡の範囲を第12調査区を含む形で拡張する必要があると考えられる。

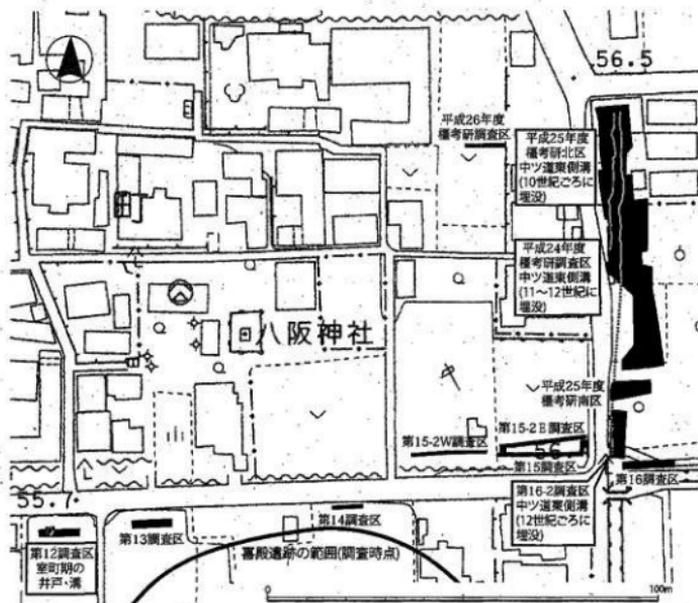
喜殿地区における調査の最重点項目であった中つ道推定地に設けた調査区は第15調査区、第15-2、第16、第16-2の各調査区であったが、結果としては第16-2調査区で中つ道東側溝とみられる溝を確認した一方で、路面推定地に設定した第15・第15-2調査区では開墾による削平が著しく、西側溝を含め中つ道に伴う遺構を確認することはできなかった。また、東側溝の埋没時期について橿原考古学研究所の平成24年度調査では11世紀ないし12世紀、25年度調査では10世紀とされているのに対し、本調査区の範囲内では埋没時期は12世紀と推定される。第16-2調査区の南方では東側溝を踏襲する水路が現在も機能

しており、東側溝の埋没時期には箇所ごとに差がある可能性も考慮されよう。

中ツ道以东では、第18調査区で条里坪界とみられる東西溝を確認した。この溝には古墳時代以前の遺物も混入しており、周辺が古くから開発された土地であったことをうかがわせる。 (北口)



写真1 第3調査区の前墳想定復元案



第45図 喜殿町周辺の既往の調査 (S=1:1, 250、白線は遺構界を示す)

付編 天理市南六条ノカミ遺跡古墳周濠出土土木質遺物の樹種

平成24年度におこなわれた名阪道路（天理地区）の拡幅工事に伴う発掘調査において、天理市南六条町で新たに発見された南六条ノカミ遺跡の古墳周濠から出土した木質遺物の樹種の調査をおこなったので、結果を報告する。

出土した遺物は、長さ約176.5cm・径約17cmの心持ち材でできており、用途は不明であるが建築部材の可能性もあると考えられる。

樹種の調査に際しては、遺物の破損箇所から小ブロックを採取し、カミソリを用いて木口・柱目・板目の三断面切片を徒手により切削した。これらの切片はアルコールシリーズで脱水したのちキシレンで透徹し、ピオライトで封入して永久プレパラートに仕上げた。このプレパラートを透過光の生物顕微鏡と落射蛍光顕微鏡下で観察し、樹種同定をおこなったのち顕微鏡写真を撮影した。同定に際しては、島地・伊東（1982）の記載を参照し、現生木材の材鑑プレパラートと照合をした。

観察所見は、仮道管と樹脂細胞および放射柔細胞からなり、樹脂道はない。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部幅はやや狭い。樹脂細胞は、晩材部または晩材部近くの早材部に点在する。腐朽の進行により分野壁孔の残存状態は良くなかったが、蛍光顕微鏡で壁孔縁の輪郭が円形であることと、かろうじて崩れかけた長楕円形の孔口部を観察でき、ヒノキ型で1分野に2個まれに3個存在することがわかった。放射組織は単列で高さは1~15細胞高であるが、比較的低いものが多い。

以上の観察結果から、本試料はヒノキ科（Cupressaceae）のヒノキ（*Chamaecyparis obtuse* Endl.）と同定した。ヒノキは日本特産の常緑高木針葉樹で、通常樹高30~40m・胸高直径0.5~1.5mになるが、大きいものでは樹高50m・径2.5mになるものもあるとされる。本州（福島以南）・四国・九州・屋久島に分布し、日本各地に植林が多くおこなわれている。材は強靱で耐久性や湿潤性が高く、現在でも建築材や器具類に多く用いられる。

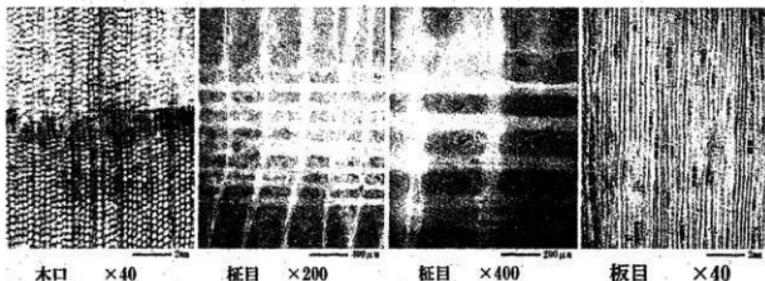


写真2 天理市南六条ノカミ遺跡古墳周濠出土土木質遺物顕微鏡写真

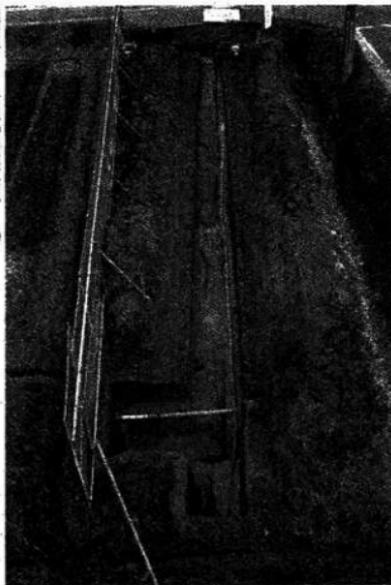
图 版



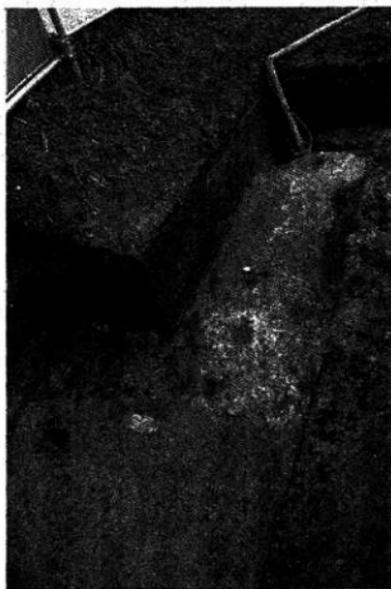
第15調査区 調査前全景(西から)



第15調査区 遺構検出状況(西から)



第15調査区 遺構完掘状況(西から)



第15調査区 東端北拡張区
完掘状況(北から)



第16調査区
遺構検出状況(東から)



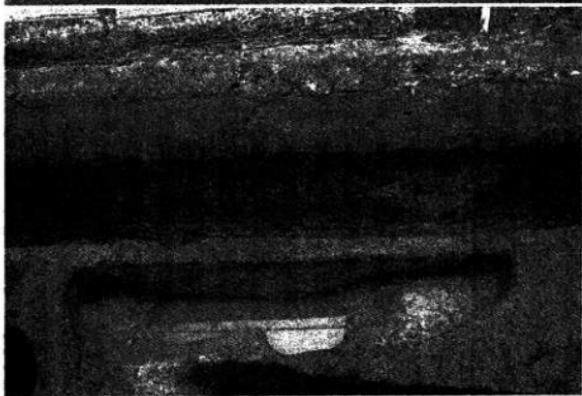
第16調査区 全景(東から)



第16調査区
粘土採掘坑 土層断面



第16調査区
粘土採掘坑 土層断面



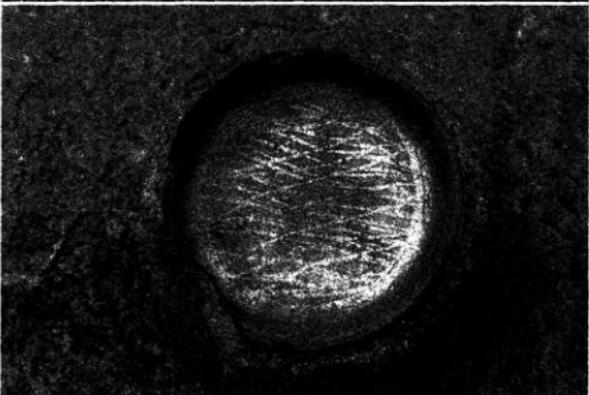
第16調査区
粘土採掘坑 土層断面



第17調査区
調査前全景



第17調査区
包含層
遺物出土状況



第17調査区
包含層
遺物出土状況



第17調査区 遺構検出状況(東から)



第17調査区 遺構完掘状況(東から)



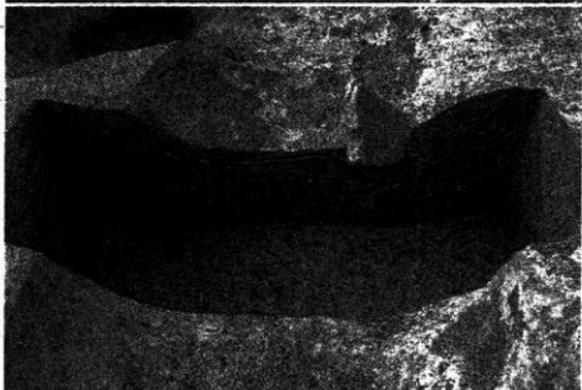
第18調査区
遺構検出状況
(西から)



第18調査区
遺構検出状況
(部分拡大・西から)



溝 18SD01 近景
(東から)



溝 18SD01
瓦出土状況
(東から)



溝 18SD01
須恵器出土状況
(南から)



第18調査区
遺構完掘状況
(東から)



第18調査区
遺構完掘状況
(東から・部分拡大)



第15調査区遠景
(南東から)



第16～18調査区
遠景(西から)



第3調査区
調査前全景(東から)



第3調査区西端
遺構検出状況(東から)



溝 3SD01(西から)

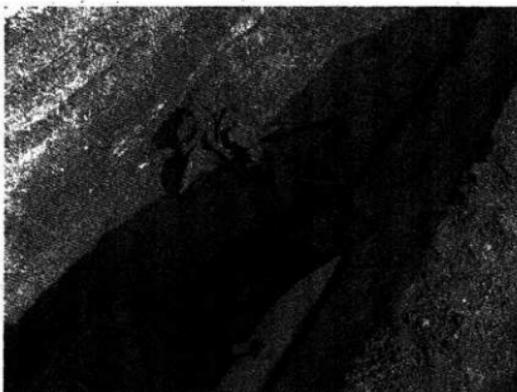


溝 3SD01
埴輪出土状況(南から)

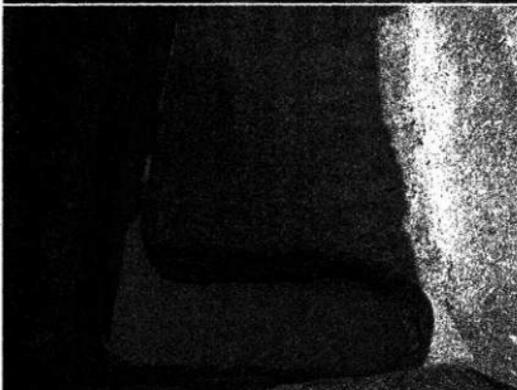


溝 3SD02(西から)

溝 3SD02
埋没樹木根
出土状況(南から)

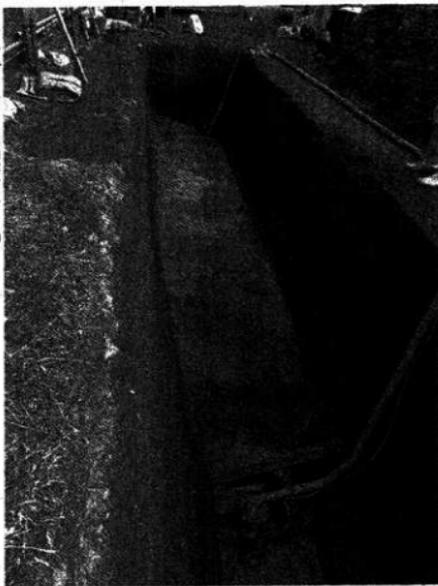


溝 3SD04
遺構検出状況(西から)



溝 3SD04
遺構完掘状況(西から)





溝 3SD03
木製品出土状況(西から)



遺構完掘状況(東から)



調査区全景(西から)



柱穴群(南西から)



自然河道 SWNR02
完掘状況 (北西から)



自然河道 SWNR01
完掘状況 (北西から)



調査区全景 (東から)



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



第7調査区全景(西から)



第8調査区全景(東から)



遺構検出状況(西から)



遺構完掘状況(西から)



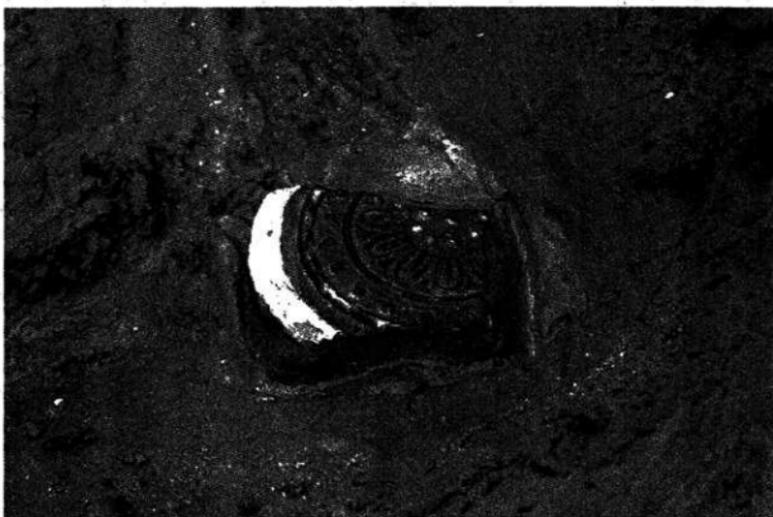
遺構検出状況



遺構完掘状況



自然流路 10NR01 完掘状況



自然流路 10NR01 瓦出土状況



上層遺構面検出状況(東から)



上層遺構面完掘状況(東から)



下層遺構面完掘状況(西から)



下層遺構面完掘状況(東から)

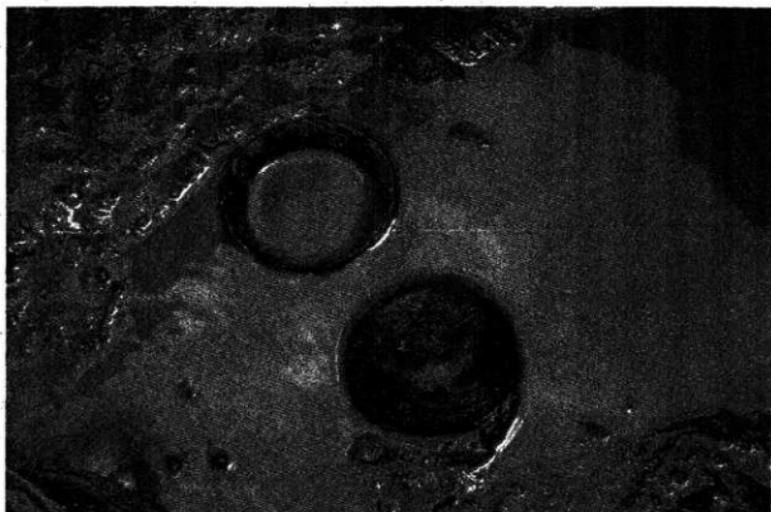
図版24 第12調査区 ①



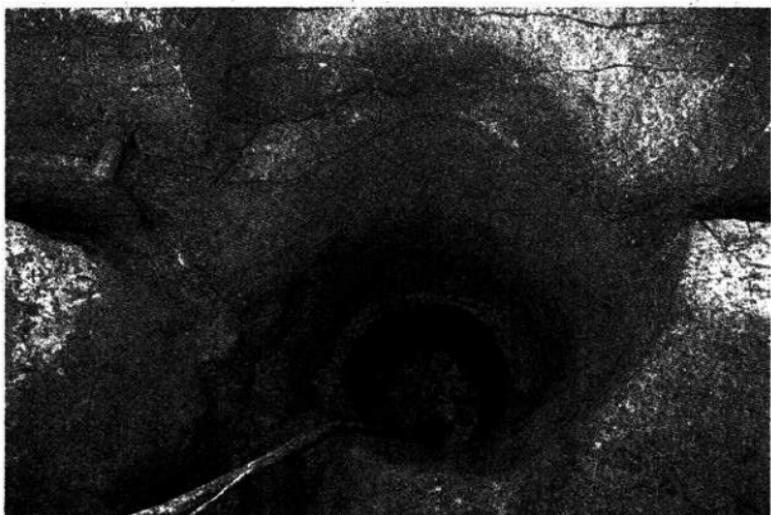
遺構検出状況(西から)



調査区全景(西から)



井戸 12SE01 遺物出土状況(南から)



井戸 12SE01 完掘状況(南から)



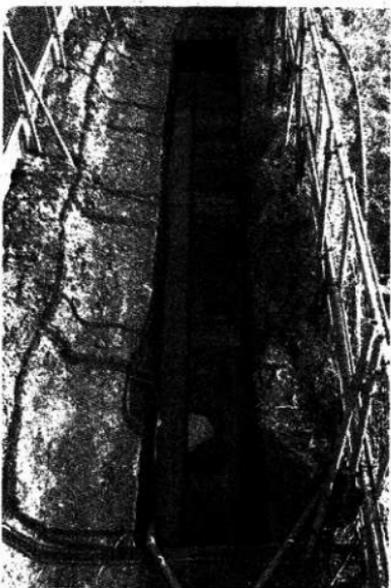
遺構検出状況(東から)



調査区全景(東から)



遺構検出状況(西から)



遺構完掘状況(西から)



遺構検出状況(南から)



調査区全景(南から)



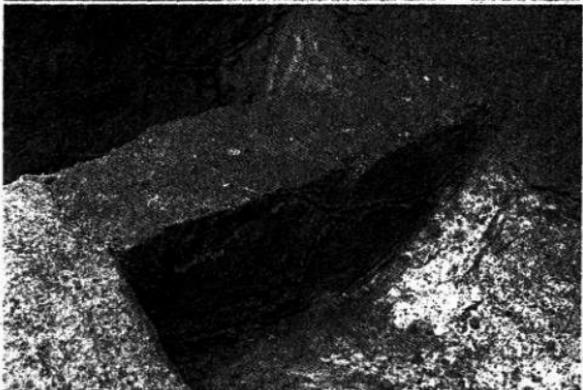
溝 16-2SD01 検出状況 (南から)



北拡張区 溝 16-2SD01 検出状況 (上が北)



溝 16-2SD01
断面 1 土層断面
(北から)



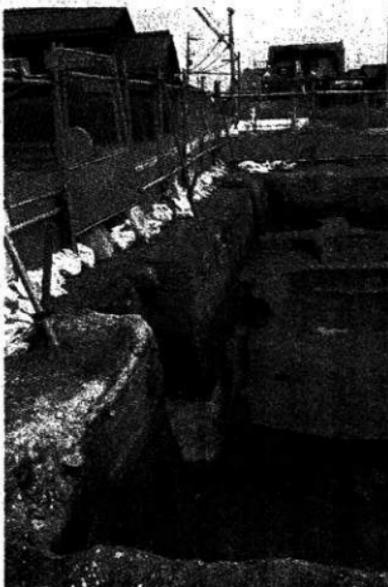
溝 16-2SD01
断面 2 土層断面
(北から)



溝 16-2SD01
完掘状況
(南から)



溝 16-2SD01 と中ツ道 (北から)



溝 16-2SD01 と中ツ道 (北から)



第3調査区全景(上が北)



第5・6調査区全景(上が南)

第5・6調査区遠景
(北西から)



第7・8調査区遠景
(東から)



第7・8調査区遠景
(南から)





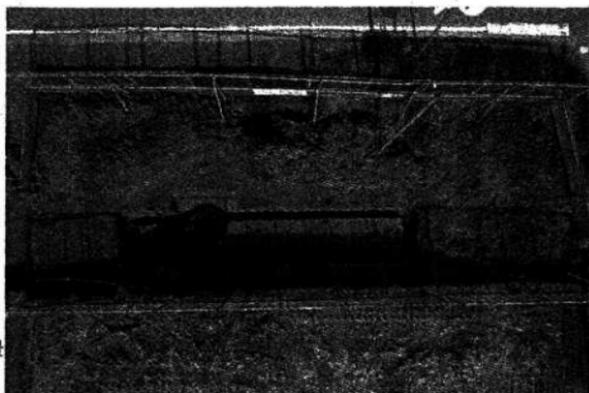
第9・10調査区遠景
(西から)



第9・10調査区遠景
(南から)



第11調査区遠景
(東から)



第12調査区全景
(上が北)



第12・13調査区遠景
(北から)



第14調査区遠景
(南から)



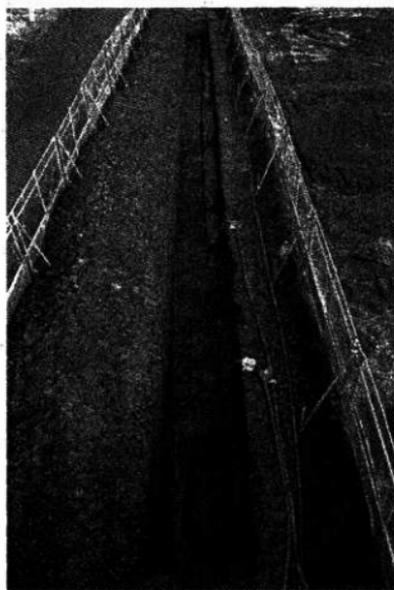
第16-2調査区全景(上が西)



第16-2調査区と中ツ道(南から)



遺構検出状況(西から)



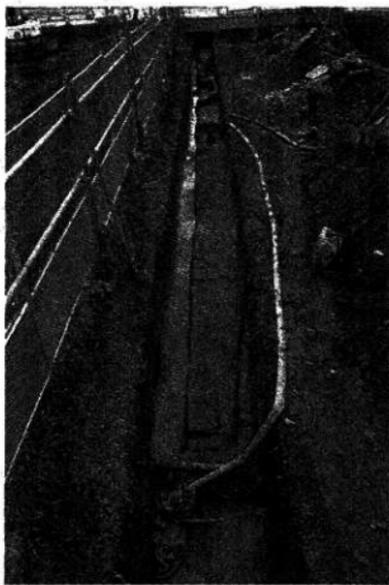
調査区全景(西から)



遺構検出状況
(西から)



調査区全景
(西から)



第 15-2E 調査区遺構検出状況 (西から)



第 15-2E 調査区全景 (西から)

図版 40
第15-2調査区
②



第 15-2W 調査区西半 全景

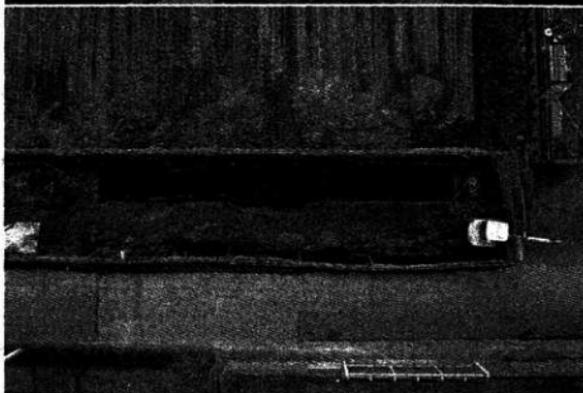


第 15-2W 調査区東半 全景

第1調査区遠景
(西から)



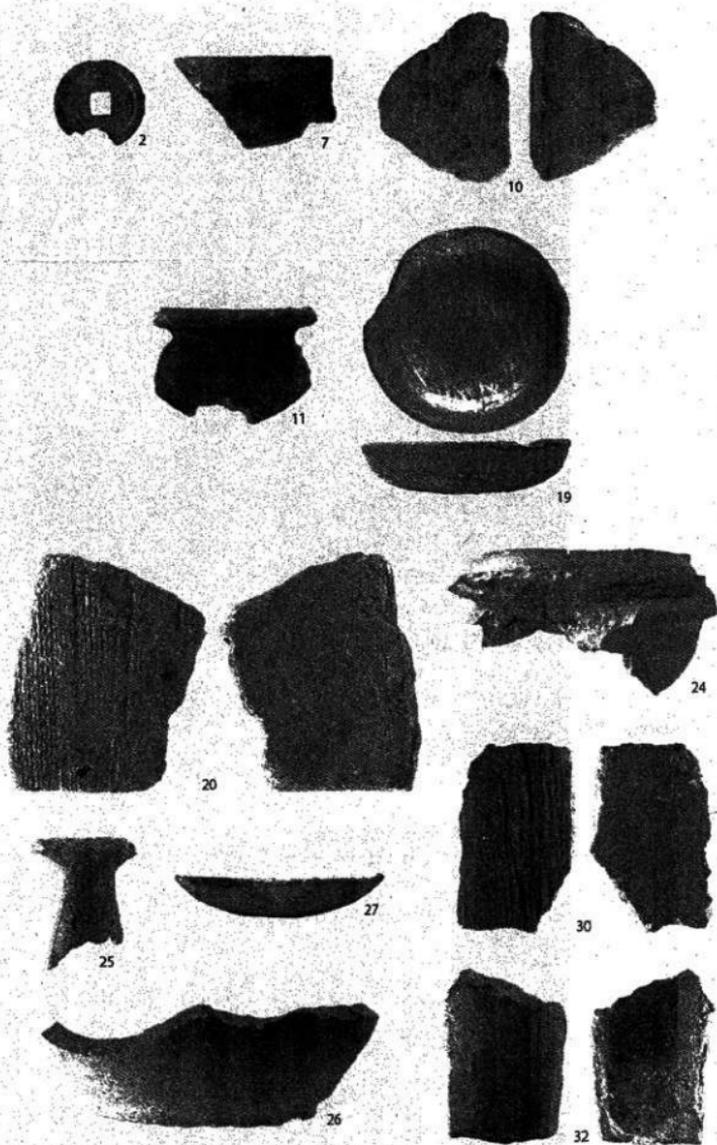
第2調査区全景
(上が南)



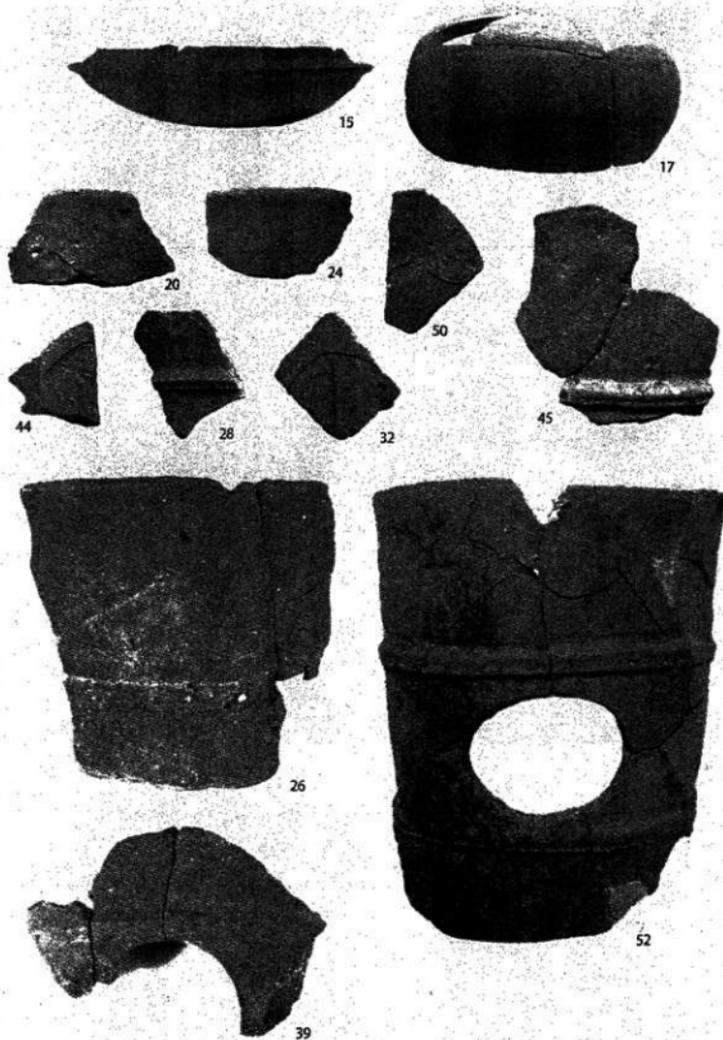
第15-2調査区全景
(北から)



図版42 平成23年度調査地出土遺物



図版43 平成24年度調査地出土遺物①





37



40



55



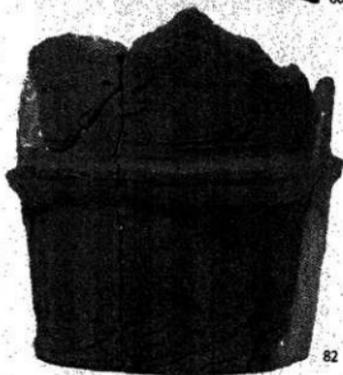
77



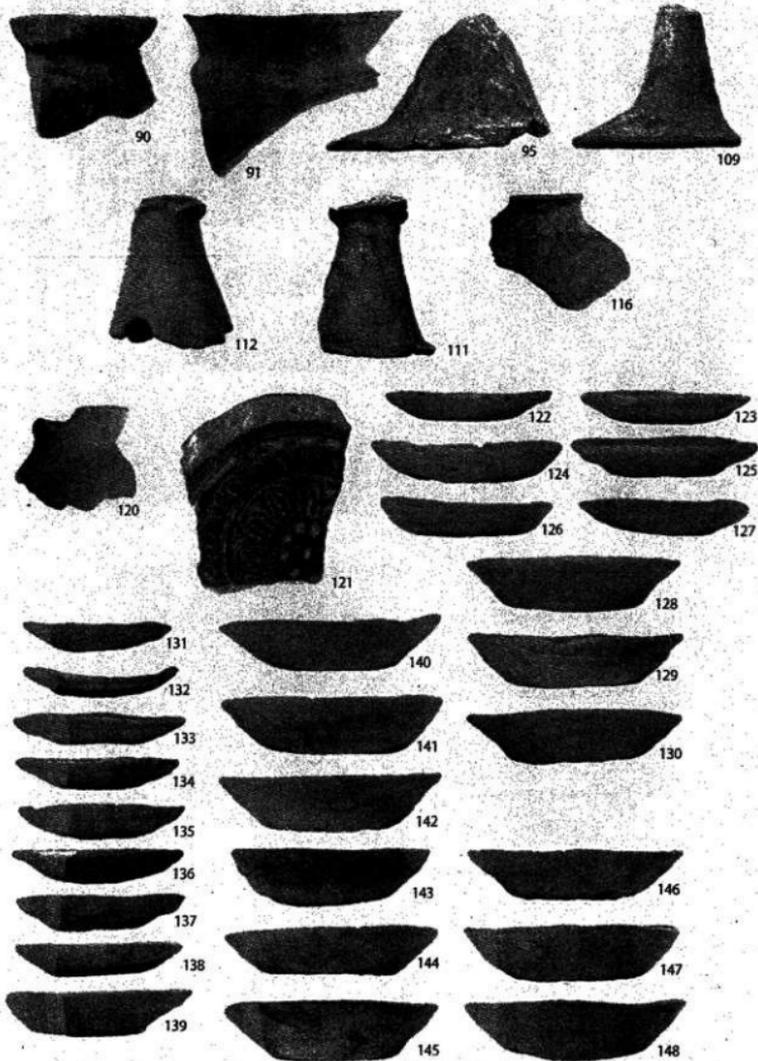
53

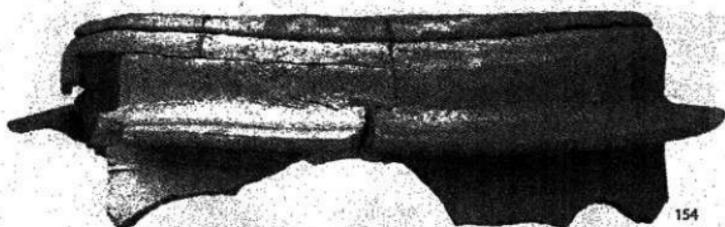


60



82





154



151



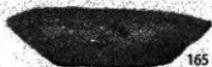
155



156



163



165



166



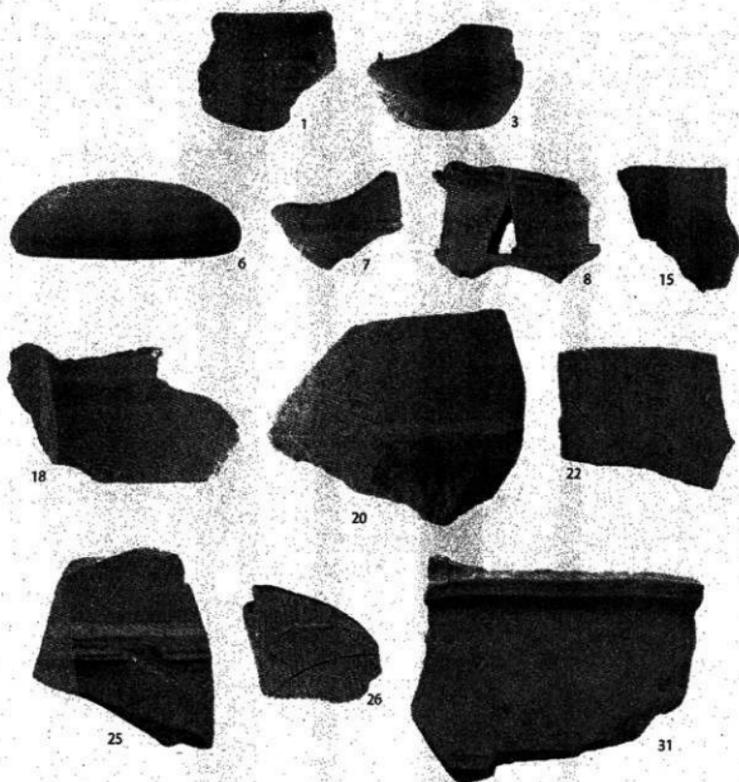
172



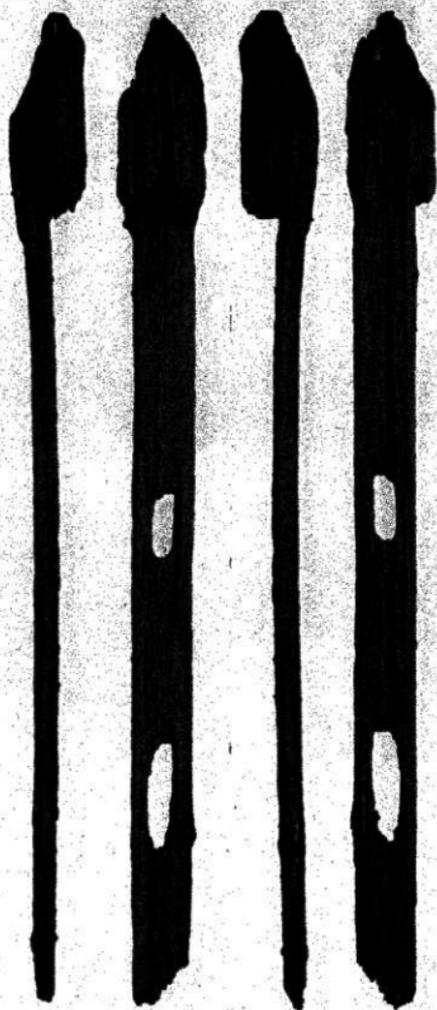
182



183



図版48 第3調査区出土木製品



報告書抄録

ふりがな	めいはんどうろ てんりちく まいぞうふんかざいほつくつちょうさほうこくしよ							
書名	名阪道路(天理地区)埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	青木勘時・北口聡(編集)							
編集機関	天理市教育委員会							
所在地	〒632-8555 天理市川原城町605							
発行年月日	平成28(2016)年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平成23年度名阪道路 (天理地区)埋蔵文化 財発掘調査	天理市喜殿町地内	292044	14B-0261	34° 36' 38"	135° 49' 04"	20111124 ~ 20120130	520.9㎡	道路 拡幅
平成24年度名阪道路 (天理地区)埋蔵文化 財発掘調査	天理市喜殿町・ 南六条町地内	"	14B-0261 08D-0133 08C-0100	34° 36' 38" 34° 36' 37"	135° 48' 47" 135° 48' 14"	20120822 ~ 20130119	574㎡	道路 拡幅
平成25年度名阪道路 (天理地区)埋蔵文化 財発掘調査	天理市喜殿町・ 南六条町地内	"	08C-0100 14B-0261	34° 36' 37" 34° 36' 38"	135° 47' 58" 135° 49' 0"	20131111 ~ 20131226	116.5㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南六条ノカミ遺跡	古墳	古墳	周濠	埴輪・木製品など				
中ツ道遺跡	道路	奈良~平安	東側溝	須恵器・瓦器など				
喜殿遺跡	散布地	室町	井戸・溝	土師皿・土師質土器など				

※1 遺跡番号は奈良県遺跡地図収録の番号を掲載した。

※2 経緯度表示は世界測地系(平成14年4月1日より運用)による。

平成28(2016)年2月29日

名阪道路(天理地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地
印刷 働天啓
天理市森本町810